
インフィニット・ソード
伊波ヨシアキ

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ソード

【作者名】

伊波ヨシアキ

【あらすじ】

女性にしか扱う事のできないパワードマルチフォームスーツ、「インフィニット・ストラトス」通称「IS」は開発者である「篠ノ之束」によって引き起こされたクーデター「白騎士事件」にてその初陣を飾った。

ISの高性能を目の当たりにした世界各国は早期ISの復旧を目指すと同時に、ISが女性にしか扱えないという理論から社会に女尊男卑という性差別の世界を招いてしまう結果に繋がってしまった。

そんな世界において、一部の人間達はこの世界に女尊男卑の風習

を打ち消すため、ISを凌駕する強大な人型機動兵器「ソード」を生み出したのである。

※当時、月刊ホビージャパンに連載されていた機動戦士Zガンダムのパラレル設定の外伝的なマイナーIF作品のチート機体「タイラントソード」をISにぶっこんだクロスです。

SCENE 1「ソード始動」

ソード開発研究部署「ネオ・ファリア」、国連オーストラリア基地「トリントン」より開発が進められている超機動人型兵器の開発部門である。

先の白騎士事件の参戦によって、かの「白騎士」を撃墜寸前にまで追い詰めたほどの強大な威力と高性能を発揮した試作一号機「タイラント」を元に次期試作二号機への開発を進めていた。

そして、その量産化計画の第一プロジェクトとして今回開始されているのが「S（セカンド）SE計画」と呼ばれる今プロジェクトによってタイラントに続く試作二号機のソード「ハイペリオン」がそれである。

その戦術思想は、ISと呼ばれる女性にしか扱う事のできないパワードスーツ兵装や他の想定対象に対し、高機動によるドッグファイトを生かした戦術機体であるため、頭部の20ミリビーム銃や武装は後方のバックパックのブースターユニットに装備されたSEジェネレーター式ビームガトリングカノンと主兵装のビームサーベルを装備した、シンプルに近い兵装を施してある。

また、この試作二号機ハイペリオンは今後量産化機種のベースともなりうる機体ゆえ、数ある試験データから生み出された性能結果も十分に期待されていた。

さて、そのソードのテストパイロットであるが、初期試作一号機において白騎士事件に参戦し、かの白騎士を撃墜にまで追い詰めた噂のテストパイロット「キース・マクレガー」大尉である。

その、事件後に中尉から大尉へと昇進した彼はS（セカンド）SE計画においても中心に近い位置づけで今回のハイペリオンのテス

トパイロットとして奮闘していたのだ。

*

青で統一されたソード試作二号機「ハイペリオン」がネオ・ファリア専用デッキにおいて起動前の最終チェックに入っていた。

数十名の整備士らが機体の各出力調整に目を通す中で、そんな彼らが行き交うデッキの地上には一人、テストパイロットであるキース・マクレガー大尉がパイロットスーツに着替えて、デッキに雄々しく立つハイペリオンを満足げに見上げていた。

「前回のタイラントと比べて、こいつの『SEシステム』のレベルは格段に上がっているな」

そう口にする彼であるが、そんな彼が発したSEシステムとは「Sub ject・E f f a c e m e n t」の略であり、反重力機能をもち、その多くを慣性制御フィールドとして、特にソード起動時に生じる異常なGによって機体の自壊を防ぐために用いられるのであるが、このハイペリオンに関してはSEシステムの暴走や故障時を細かく想定して、起動中に停止した場合は数十分間Gに耐えきれぬ機体強度で保ち、故障時には最新の自己修復ナノマシン機能を搭載しているため機体やシステムの復帰に向けて瞬時に早期修復し、SEシステムのトラブルを確実に安全に解決できてしまうのだ。前回のタイラントではシステムに異常をきたさないためにいくつもの安全装置やプロテクトシステムが何重にも張り巡らされていた対処仕様のため、機動までにやや時間がかかってしまっていた。

それに比べてこのハイペリオンは起動時間がこれらのプロテクトを最低限に簡略化したため、推進システムのSEドライブを始動させたと同時に防御システムSEフィールドを展開しながら起動するために、実戦における状況においても安心だ。

「キース大尉」

見上げる彼の隣から、指揮官帽を被った士官の男が歩み寄ってきた。見た目は恰幅だが、柔道と空手で鍛え上げた餃子耳が特徴的で、見た目は若い新兵を驚かせるほどの怪力の持ち主である。

「ハワード中将！」

つかさずキースは敬礼する。

ハワード・ドナルド中将は、キース達ネオ・ファリアを膝元に置く、この基地の指令でもある。今回のSSEプロジェクトの総責任者としてキース達の活躍を見守っているのだ。

「本格的な量産までこぎ着ければ、この『女尊男卑』などという風潮も終わらせることができるであろう。いやはや、最近私のオフィス付近の女性たちは随分とIS信者に成り下がった者らが多くて困るよ——」

と、輪髭のきいた顎を撫でまわしながらため息をついた。

「黒人男性の士官に入れる茶は無いとまで言いおった。ミルクコーヒーの一杯ぐらいいいではないかと論争になってな。まあ、それ以前に上官に対する無礼によってここからカナダの片田舎へ輸送してやったわい」

今頃、安月給の事務職に嘆いているに違いない。

「人種的な発言をするなんて——解雇処分でよろしいかと」

「あのお嬢さんは、お上のコネで入れられたようなものだから下手には出来んよ。しかし、最近我が軍内でもIS思想の女性達が増え続けていることに不安を抱く。米軍も条約で禁じられているISを上手い言い訳を述べて軍事へと転用してしまうのだから恐れ入る」

「お気持ち、お察しします」

キースの部署にもそういう人間が少なからずいる。

「ところで、コイツの調子はどうかね？」

「ハッ、すごぶる快調であります！」

「ははは！ それは頼もしい。いつかこの機体が量産された暁には、IS女共の青っ白いケツをひっぱたいやりたいわい」

そういって、ハワード中將は懐っこい笑顔を向けたまま彼に背を向けて部署に戻って行った。

中將が去った後、キースもそろそろ搭乗命令が来る頃だろうと思いい、その場でしばしハイペリオンの雄姿を見上げながら待っている
と、

「見ろよ仁！ こいつが噂のハイペリオン・ソードだ」

「彩夏のソード好きには本当に呆れるぜー」

隣で自分よりも若手と思われる二人の兵が自分と同じように機体を見上げていた。見る限り、二人とも日経人だろうか？

「その二人！」

もうじきハイペリオンも起動試験に入るころだからその場から離れろと注意をかけた。

「は、はっ！」

途端に二人は反応で敬礼をキースへ向けだした。

「もうじきハイペリオンが起動する。時間があるのなら遠くから見えてくれると嬉しい」

「は、はい！ 是非ともそうさせていただきます」

と、と笑顔を見せるほうの兵士へキースも続けて問う。

「ソードに、興味があるのか？」

「はい！ ソードは自分にとって憧れであります」

「二人とも、名は何という？」

「第04警備部隊所属サイカ・オリベ二等兵であります！」

「同じく、所属のジン・ゴタンダ二等兵であります」

「日系人か？」

「いえ、兩名とも日本人であります！」

「日本？ ああ、あの国はISやロボット物の聖地だったからな。興奮するのも納得できる」

『キース大尉、そろそろハイペリオンへ搭乗願います』

「はい、直ちに」

右腕にはめられた通信機に返答して、

「そういうわけだ。二人とも時間があったら見ていてくれ」

「し、失礼します！」

彩夏はそう言って、仁と共にその場から離れていった。

「さて、行くか！ 頼んだぞ相棒」

そう言って、キースは見上げつつハイペリオンの足元に設置されたリフトへ足を踏み入れた。

「頑張ってください、中尉！」

「整備長の男がそう言い残して、彼にサムズアップを向ける。

「ああ、言ってくる！」

*

数時間前、オーストラリアから離れた海域では数か月前に米軍から奪取した飛行型パワードマルチフォームスーツ「IS／インフィニット・ストラトス」のフィーメール・キャット数十機が、ステルスに纏った潜水艇甲板より各自発進準備に取り掛かっていた。

「例の人型機動兵器がトリントンに配備されているっていう情報は本当のようね」

機体を纏ううちのブラウン髪をしたパイロット一人がつぶやくと、

「白騎士事件に突如介入し、彼の白騎士を撃墜寸前にまで追い詰めたっていうあの人型兵器がね？」

赤髪のパイロットが問う。

「噂だと、機体のプロジェクトは一時期凍結されるもISの復旧によって女尊男卑の風習が世界へ広まったことで再びプロジェクト

を再起動。男女平等とかいう生ぬるい風習をねちっこい男共は納得
いかないようね」

と、今度は金髪のパイロットが返した。

内の一機は呆れたようにため息をついた。

「男だろうと女だろうと、力を手にしたものが世界を支配するとい
うのがこれまで歴史でつづられてきた人間としての掟だという事
をわからせてあげましょーよ！」

天真爛漫な態度をとる桃色の髪をした、幼気なさが残るパイロッ
トが元氣よく声を上げると、

「もうじきで作戦を開始する。私語は慎め！」

そんな彼女たちの会話を後ろの指揮機とおもわしき青い髪の女性
が制止させた。

指揮官は、今作戦の予定を出撃前の最後に確認し合った。

「我ら亡国企業はこれより、国連軍のオーストラリア・トリント
ン基地へ襲撃に向かう。今作戦には敵I S部隊との戦闘もありうる
ため、各自十分に気を引き締めてかかれ！」

いつものように基地の襲撃ではないようだ。今回だけは国連の新
兵器「ソード」の奇襲破壊作戦以外にも同じI S同士のドッグファ
イトも待ち構えている。

「それも、敵I Sは情報によれば第三世代機の「クイーン・バイ
パー」で数はこちらの倍、十機だ。第二世代のファイメール・キャ
ットよりも第三世代機であるあちらの方が格段と性能に差がある。
各自の腕前が試される。今回だけは生きて帰投できる保証はないと
思え！」

「たいちよー！」

すると、桃色髪のパイロットが手を挙げた。

「なんだ？」

「えっとお、時間開いたら『男狩り』やっちゃってもいいですか？」

その容子とはうらはだに残忍なオーラを漂わせながら指揮官の銀髪に訊ねた。それに対して指揮官はため息を漏らして、

「――好きにしろ」

と言って彼女をご機嫌を取った。

「全機、出撃！」

指揮官機の支持と共に五機のファミリーメール・キャットは潜水艦の甲板から一斉に空へ飛びだった。

*

忍び寄る凶器が迫りくるのもしらず、トリントン基地ではいつもの通常勤務の日常が続いていた。警備隊の面々は束の間の休憩を後退しあって、ようやく彩夏たちの第04部隊の休憩が回ってきた。

「ふう〜トリントンは今日もあっついぜえ〜！」

自販機でコーラの缶を片手に織部彩夏の親友、五反田仁は手で僅かな風を仰いだ。

「一方のISの姉ちゃん共は外で汗かいた後はシャワー浴びて数時間の休憩かよ、後退時間30分の俺たちとはえらい差だぜ？」

そうやって休憩室のベンチに座って愚痴ってる仁の隣で彩夏も、「ハワード中將は、俺たちにも休憩をせめて一時間になって頼んでも、それに反対する女性隊員が大半だったっていうからね」

「アイツらのことじゃあるめえし、関係ねえだろ！ ISじゃない女共の方でも休憩が二時間だぜ二時間！ 不公平にもほどがあるだろうよ」

「今回のソードの件で大きく改善してくればいいんだがな」

そういって、彩夏は窓辺からソードが格納されているあの倉庫を見下ろした。

「お、またソードかよ」

「仁は、興味ないのかい？」

「そりゃあ興味あるけどよ——どうせ俺たちには無縁の職種だぜ、ソードのパイロットなんてさ」

「でもいいよなあ——俺もいつかチャンスがあるなら是が非でもアレに乗りたい！」

なぜ、彩夏がこうもソードにあこがれを持つのか、それは彼がまだ日本で学生時代を過ごしていたころの話だ。

当時、白騎士事件に巻き込まれた時のこと。一機のISによって日本に数百発のミサイル一齐に向けられたのだが、そのミサイルを一発も漏らすことなく白騎士とよばれる一機のISが迎撃に成功して彼女が日本を守ったという結論に至ったのだが、所詮はテロリスト束と白騎士による自作自演だということが浮き彫りになったのはいうまでもない。

そんな白騎士に国連軍の航空部隊がテロと認定した白騎士を攻撃にむかったのだが、現状の近代兵器である航空機はISの前では無力に終わり、あっけなく航空部隊は返り討ちにあった。しかし、しかし航空部隊が全滅した次に現れたのは国連軍の切り札として登場した白い人型機動兵器「ソード」が白騎士の前に立ちふさがったのである。大きさの比率は差があっても互いに互角の戦いを繰り広げる白騎士とソードであったが、あと一步で白騎士にとどめを刺す寸前でソードは謎の撤退を始めてしまった。おそらく、命令があったんだろう。

彼がソードと出会ったのはあの白騎士事件が切欠であった。上空で雄々しく戦う巨大なロボットの姿は当時学生時代の男子の彼には

男心を燻ぶられた感じだった。

それからしばらくして、ISが復旧していくにつれて世の中は「女尊男卑」と呼ばれる男性差別の風習社会が到来した。

それによって各国より女性中心主義を掲げたISによるテロ活動が勃発し、彼と彼の両親は成田の空港でそのテロリストの襲撃に会い、目の前で両親が一機のISに殺されてしまったのだ。

自分も殺されるかと思った。死を覚悟した直後に外部の各地で激しい爆発が起こり、彼を殺そうとしたISは背後から襲い掛かる巨大な手によって握り潰された。

同時にターミナル内が崩れ落ち、彼は瓦礫の下敷きにされてしまった。瓦礫に動けずに今度こそ諦めかけていた時に、先ほどISを潰してあの巨大な手が彼を瓦礫から好きだしてくれたのだ。

その巨大な手の主こそ、あの白騎士事件上空で彼が目撃した白いソードがそれであった。彼は二度もソードに命を救われたのだ。そして、あの機体から聞こえてきた「大丈夫か？」と呼びかける男の声を今でも忘れられない。

そんな憧れから、気づくと今の民間社会を嫌って高校から同期の蓮と共に国連軍に入った。

「ソードか……」

過去を思い返す、そんな彼の後頭部から何かの物理的衝撃が襲ってきた。

「痛ッ！」

彼の後頭部を襲ったのは一本の足だった。ISの専用スーツで太ももを露出した足先が彩夏の後頭部を蹴ったのである。

「テメェらなにしゃがるッ！！」

仁もベンチから立ちあがった。

「邪魔よ、虫けら」

そうゴミを見るような目で二人を見下ろす操縦者の一人に彩夏はキレそうになった。

「ッ！」

彩夏は、そんな傲慢なISの女達を嫌な目で睨みつける。こいつ等されいなければと、家族の死を思い出してしまふ。

「働きアリはアリらしく私達の足元で地を這いながら作業していればいいの」

「男のくせに粹がるのもいい加減にしないさい」

「フン！ アジア人の分際で——」

そんな警備隊の青年たちに対する軽蔑に仁も怒りが頂点に達した。

「ふざけんな！ 男だアジアだとか下らねえこと言いやがって!!！」

彩夏よりもキレそうになっていたのは仁だったが、互いは一触即発になる。

——が、

「おうおうどうしたよ！」

すると、タンクトップからでもわかる鍛え上げられた肉体にタトゥーが彩る何人かの警備兵たちが彩夏たちの後ろから来た。

「さっきのは聞き間違いじゃないよな。誰が俺たちのことを『働きアリ』だってえ？」

ボキボキと両手を鳴らす、怖い形相をした警備兵たちを前に、まだ二十歳前後の彼女たちはビクビクと怯えだしてしまった。

「こ、こないで！ こっちにはISがあるのよ!!！」

そういって、待機状態のブレスレットを一人が見せつけたが、
「やってみろよ？」

気迫と殺意を向きだしたタトゥーの一人が鬼のような形相で睨みつけた。

「ひっ——」

それに怯えた彼女立に向けて、

「他者を尊重できねえ醜い豚共はとっとと軍から抜けろ！」

「くう——！」

そう言われた彼女たちは苦虫を噛み潰したように悔し気な顔を浮かべて彼らに背を向けていった。

「ケツ！ 青っ白いケツを見せつけられるぜ！！」

背を向ける、ISのスーツを纏った彼女立の尻の割れ目を指しながらそう言い捨てると、目の前の若い彩夏たちへ視線を向けた。

「大丈夫か？ ああいうガキどもに構うこたあねえぜ」

「あ、ありがとうございます！ 貴方達は——03部隊の？」

「おう、覚えててくれたか！」

嬉しそうに彩夏の両肩をバンと叩いた。

警備兵たちは基本全員仲がいい。ISの女達の権力に屈しないよう互いに協力し合っているのだ。この前、女性兵士に絡まれているところを彼らに助けられた。

「あいつらは自分が身に着けている武器に精神が負いついていけねえだけの悪ガキだ」

「本当にありがとうございます！ この前だって——」

「ははは！ 水くせえこたあ言いっこなしだ。それよりも今晚一緒に飲みに行かねえか？」

その時だった。

内部からでも聞こえる巨大な爆発音と、激しい地響きが基地内を駆け巡った。その揺れに彩夏達は膝をついた状態で衝撃に耐える。

「な、なんだ!？」

「これは——」

突然外部からの爆発音と地響きに彩夏達は何が起こったのがすぐに気づいた。

「――襲撃だ！」

「かもしれねえ！」

彼らはその場から立ち上がったてすぐさま外に向かって走り出した。そんな矢先、自分たちよりも冷静になる警備兵達をみて通路に立ち止まっていたIS側も我先にとデッキへ走り出した。

「しゅ、出撃するわ！ 私達の足を引っ張らないことね」

そう言い捨てて彼女たちはすぐにもISのデッキへと駆けていく。

「彩夏！」

「ああ、俺たちも外へ行こう」

二人も後に続いて基地の外へ飛び出していった。

格納デッキ付近の外部より突然数発の爆発音と激しい揺れが響いた。

「うわッ――！」

その揺れはハイペリオンが配備されている彼らのデッキにも響き渡り、リフトの手すりへ必死にしがみつくキースがいた。

上空からはいくつかの小型な機影が空気を裂く音、それはこちらへ近づくにつれて次々と基地各地で爆発が生じた。

近くの格納施設が爆発し、路上に停車されていた軍用のジープが炎に包まれながら宙を舞う。

「な、なんだッ!？」

それは奇襲であった。訓練ではなく紛れもない実戦が始まっていたのだ。基地上空からいくつものミサイルが施設中へ降り注がれ、配置されていた米軍のIS部隊が直ちにスクランブルで滑走路から飛びだって、上空の敵とドッグファイトを繰り広げていた。

地上にいる兵士たちの上空でいくつもの閃光が飛び交った。

『キース中尉、例のISのテロリストよ！ 直ちにその場から非難してください』

「了解——！」

通信から聞こえる女性士官の声に返答し、大声で自分が乗るリフトを地上へ戻そうと操作するのであるが、

「ぐあぁッ——！」

リフト近くで誘爆が起こり、リフトは半壊して巻き込まれた彼はリフトから地上数メートルの地面に落とされてしまった。

「ぐっ、うう……ッ！」

「大尉！」

その痛みに呻きながらも、骨折した片足を引きずりながら、生存していた整備班たちに担がれて地下シェルターへと避難を急いだ。

一方、第04部隊に戻った彩夏たちはその場で手短な説明を受けた後に、各自武器を下げて隊列の中に加わって例のISテロ機体の元へ向かっていた。

「敵の数は！？」

第04警備部隊の面々はデジタルスコープから除く視界より敵ISの正体を特定した。

「先日、米軍から盗まれた双発の可動翼機ファイメール・キャットだ！ 数は5機」

「コイツなら——！」

各自ロケットランチャーを肩に、一機の目標へ照準を定めるが——

そのとき、彼らの頭上にもう一つの機影がレーダーに映っていたのだが、それに気づくのが遅すぎた。

「う、上からも！？」

しかし、目の前の一機よりも上空から支援に回っていた二機目の機体から既に捕捉されてしまった。

「死んじゃえ♪」

桃色の髪をなびかせるISの一機が舌なめずり、真下からこちらに気づいた警備兵に向けて容赦なく引き金を引いた。

全体紫という毒々しいイメージに塗装された、その元米軍の強奪機は両手に装備する20ミリビーム機関砲を上空から乱射して、警備部隊の兵士らを虫けらのように呆気なく蹴散らしていくではないか。

爆風と共に消し去られた部隊の中では多くの肉片が転がったという惨状が広がり、それはまさに一方的な虐殺であった。

「く、くそっ——」

気づくと、爆発の勢いで瓦礫の影まで飛ばされた彩夏は、全身に擦り傷や火傷を負いながらも、どうにか自身が五体満足で生きていることを知ってホッとした。

「ジ、仁！ 生きてるか？」

「ああ、お互い様のように——」

一方の仁であるが、しかし彼とは違って瓦礫に下半身が埋められて動けずにいる状態だった。

「敵は行っちゃまったようだな」

「脱出できるか？」

「無理だ。鉄骨やコンクリートに足が挟まって動けねえ」

「無理をするな、応援を呼んでくる！」

しかし、所持している無線は先ほどの先手を突かれた際に故障して使えなくなっていた。

立ち上がった彩夏は、そのままマシンガンを肩かけなおして弾薬を確認する。

「弾はまだあるか——」

もっとも、ロケットランチャーやナパーム、手榴弾のような装備が無ければ心細い。マシンガン一つなんて単なる気休め程度だ。

「無いよりはましだが……」

「仁、お前はここで隠れてろ」

「お前も隠れていたほうがいい、また見つかったら今度こそ死ぬぞ！」

「このまま——いいようにされてたまるかッ！」

男を甘く見るなど闘志を燃やし、彩夏は戦場と化したトリントンの外施設を駆けていった。

「別動隊はいないか!?!」

マシンガンを下げて必死に崩壊した外の施設内を走り回った。何処もかしこも多くの滑走路や格納庫、専用道路が破壊され、建物の天井がむき出しにされたり、原型を留めないぐらいに溶解した車両、そして迎撃にあたっていたいた兵士の死体など、ひどい惨状が続いているばかりだ。

上空には先ほど出撃したと思われる米軍のISクイーン・バイパー数機がなおも敵のフィーメール・キャットとドックファイトの戦況が続いていた。しかし、

「た、助けてえッ!!」

その悲鳴は地上のここからでも響いてきた。一機のクイーン・バイパーが自身の防御シールドを貫かれ、腹部を至近距離で20ミリビーム機関砲で貫かれ、上下に分離した死体と残骸が羽を聳られた蝶のように彩夏の目の前に振ってきた。

「あぶなッ!!」

間一髪、墜落から逃れられたが、その撃墜によって生じる爆発は相当なもので、再び彼の体は飛ばされて滑走路の地面に転がってし

まった。

「くう——！」

早く応援を呼びに行かないと、仁が危ない！

袖を捲った両肘や頬をひどくすりむいて、大きな切り傷から血をながしがながらも痛みを耐えながら立ち上がった彩夏であるが——

「ッ!？」

何者かが彼を呼んでいる——そんな気がしてならなかった。

誰かが俺を呼んでいる？

誰かは知らない。それは呼ぶ、というよりも彼を導くように「この場へ来い」というような、彼を呼び出そうとしているようで、その気配に導かれるように自然と彩夏の足は自分と呼ぶその場所まで駆けていった。

「こ、ここは——！」

幾つもの半壊した倉庫や建物を抜けてたどり着いたそこは、とある格納庫の施設であった。しかし、見覚えがある。この倉庫は襲撃にあう前に自分と仁がいた例のソードが配備されていたはずの場所ではないか？

倉庫は半分が破壊され、内部が外から露出していた。

「これって——まさか！」

背後の気配に振り返ると、そこには仰向けに倒れている一機の人型起動兵器が誰かを待つように頭部のツインアイカメラの瞳で、露出した戦場の空を見つめ続けていたのだ。

——お前が、俺を呼んだのか？

あり得ない事だった。もちろん、そんなのは自身の勝手な妄想だろうとさえいえる。しかし、その導きの声が無事にここまで辿り着かせてくれたことに関しては何かの意味があるのではないかという信憑性も疑えなかった。

混乱する彼を、さらに焦らすかのように再び近くでクイーン・パイパーの一機が墜落して火柱を起こす光景が見える。

味方のISの半分以上がやられているのか？

先ほどまで彼ら警備兵を「働きアリ」という蔑称を言っておきながら、テロリスト相手に劣勢になってどうするんだ！

当てにできない航空戦力を前にどうすればいいのか——今の自分を、この機体が此処まで呼び出してきたと想定するのなら、考える方法は万に一つかもしれない。

無謀だという事はわかっている。軍法会議に駆けられることだつて覚悟の上だ。このまま此処にいても死ぬだけなんだ。仁を助けることもできない！

「くっ！」

——やってやるッ！

彩夏は、仰向けに倒れた機体の腹部までよじ登り始める。途中で再び起こった爆発と地響きの揺れで機体から落ちそうになるも、必死に個所へ掴まりながらどうにか胸辺りのコックピットと思われるハッチ部分まで登り切ることができた。

「ここが——コックピット？」

*

「敵の特定は——なに、例のテロリストだと！？」

指令室より指揮を執るハワード中将であるが、そんな彼の元へソードの開発責任者である女史、ネイナ・ラフィット・ファルム開発主任がこの場へ駆け込んできた。

「中将！ ハワード中将は居られますか！？」

白衣を着た、三十路半ばの彼女は本来なら民間人として立ち入る

ことを禁じられているこの場へ足を踏み入れたにはハワード中将へ折り入って話があったのだ。

「中将ッ！」

「ネイナ博士、今は戦闘中だ！ 地下シェルターへ避難しているんだ」

「お願いです。この状況を打破するためにもハイペリオンの仕様をお願いします！」

「しかし——その肝心の機体は戦闘に巻き込まれて無事であるかどうか……」

「自動的にSEフィールドを展開するよう施してあります」

「だが、肝心のキース大尉が負傷している今、誰があの機体を？」

「それなら、この私にハイペリオンの操縦を託していただけませんか」

「無茶を言うな！ 今、貴女にもしものことがあったらどうするんだ」

「量産型ソードの設計データなら既に私達の手元にあります。私に何かあっても、そのデータさえあれば——」

「馬鹿者！ 民間人である貴女を戦闘へ参加させるわけにはいかんと言っておるんだ」

「しかしッ——」

「ひいひい！！」

とたん、オペレーターの一人が恐怖で顔を歪ませた。

司令室の窓側前方よりテロリスト機である紫のIS、桃色の髪をしたパイロットが駆るファイメール・キャットが20ミリビーム機関砲の両腕を浮上していた。

「しまったッ——」

護衛のクイーン・バイパーの防衛網が突破されてしまったという

のか。

——キースッ……!!

死の間際、ネイナは思い人である彼の姿が頭をよぎった。

しかし、

「あれえ？ 一人女の子がいるや——っけていてもオバサンだしっか」

そして、彼女の両手から20ミリの銃口が向けられる。

「死んじゃえ——っん？」

フィーメール・キャットを纏うISテロはレーダーより何かの巨大な機影に自機を補足されたことに気づいた。

突如、桃色髪の彼女を真横から襲う幾つもの閃光の雨が降り注がれ、フィーメール・キャットの全体を貫通していくではないか。

「うぐっ——!!」

一瞬でハチの巣状態になっていく桃色髪の彼女は肉片に変わり、上空で爆散してしまった。

「な、なにが起こった!？」

ハワードが状況の確認を急がせると、閃光が放たれた方向より一機のブルーで彩られた巨大な人型兵器が司令室にいる彼らの目の前を通過した。

「は、ハイオペリオン・ソード!？」

中将は叫んだ。

「キース!？」

救いに来たその機体に取り込めるパイロットは彼しかない。しかし、何故だろう。彼女はそんなハイペリオンの動きから生じる過剰な高出力で飛ぶ飛行体制は、キースの的確かつ適度な出力調整とは違っていた。

そして、彼女は気づいた。

「違う——あれに乗っているのはキースじゃないわッ！」

「何だと!？」

中将も目を丸く見開いて、目の前の窓越しから移っている飛行中のハイオペリオンを見た。

*

そう、そのハイペリオンのコックピットに身を収めているパイロットはキース・マクレガー大尉ではなく、第04警備部隊に属するあの日本人の青年だった。

「SEシステム及びジェネレーター機能正常、各部バーニアを出力最大に！ 各兵装機能、異常なし！ SEフィールド全開で突っ走れええッ!!！」

両肩部に取り付けられたシールド装甲兼大型ブースターの噴射口から青い火柱が立つ。

腕部内より収納されていた筒状が右手の中へ流れ渡ると、その筒の先から高出力のエネルギーが放出し、それはたちまちに光の剣へと姿を変えた。

その光の剣、ビームサーベルを握りしめ、高出力によって自身よりも小型なISの数機へ突っ込んでいく。

「なんだあれは!？」

「巨大な人型兵器だと!？」

「一機がやられた——アマランダの機体だ！」

「ひるむな！ 相手は凶体がデカいだけで的にすぎな——」

刹那、彼女たちフィーマイル・キャットの間合いにその巨体はいた。

「うおおおッ!!!」

額の汗を散らしながら、彩夏のハイペリオンはビームサーベルを振りかざして突っ込む。

各機はSEフィールドを纏った巨大な装甲と、一振りの巨大なビームサーベルの刃によって、内二機の銀髪の指揮官と金髪の機体が衝突して大破、もう残りのブラウンと赤毛の二機はビームサーベルの一振りで上半身と下半身を失ったままヒラヒラと地上へと落ちていった。

「馬鹿なツ——相手はたった一機でISを一度に二機も!？」
大破した内のリーダー機はもう片方の大破した一機を呼ぶ。

「た、退却だッ!　なんて予想外なことに——そっちは飛べるか？」

「予備ブースターで何とか……」
二機のフィールド・キャットはボロボロに大破しつつもかろうじて飛行継続は可能であった。

二人はそのまま目の前の巨大な人型へ背を向けて戦前を離脱しようとしていた。

「逃がすかあ!」

お前たちに殺された仲間の仇だ!

ハイペリオンのブースターバックパックユニットよりから展開される二門のSEジェネレーター式ビームガトリングカノンの束なつた各砲口が離脱を図る二機を捉えた。

「いっけええッー!!」

双方の砲口より連射されたエネルギー弾の群れは容赦なく二機のフィールド・キャットへ迫った。

「あれがソードの力だというのか——」

この言葉を最後に、上空より二つの爆散した黒煙が浮かんだ。

「いったい、誰があの機体を……？」

司令部より、ハワード一同はそのサイズとは対照的に圧倒的な機動力と火力で五機のISを殲滅した、ソードと呼ばれる機動兵器のすさまじさに度肝を抜かされていた。

「じ、上空周辺より敵 I S 部隊の機影無し！ 終わりました——」
オペレーターも自分が今こうして生き延びていることに奇跡を感じ、ホッと胸をなでおろすように体の力がどっと抜けて、立っていた者も思わず席へ脱力する形で腰を掛けた。

「生き残った味方の I S 部隊は？」

「……残存、3機です」

「なんてことだ——」

まさか、我が軍の最新鋭機であったクイーン・バイパー十機が五機の先代機体のフィーメール・キャットにここまで追い込まれるとは、空軍の女達はメンツが丸つぶれだと嘆くことだろう。

一方、地上へ着地したハイペリオンは握りしめていたビームサーベルの刃を収めたまま目の前にそびえる指令室の窓を見上げた。

SCENE 2 「ソード、日本へ」

サイレンが鳴り渡る半壊したトリントン基地にようやくレスキュー部隊が駆けつけに現れ、消防車が直ちに消火へと取り掛かる中、瓦礫に埋もれていた織部彩夏の親友、五反田仁は無事に救出され、片足を骨折というダメージを負うも、人体に大きな後遺症などの影響は皆無で済んだ。

彼も、あと少し遅かったらテロのフィーマイル・キャットらに見つかってしまうところだったが、間一髪のところまでハイペリオンが現れたことにより、そちらに目が行ったことから瓦礫に埋もれた彼は何とか助かったのだ。これも、違反を覚悟でハイペリオンに搭乗してくれた彩夏に感謝である。

さて、その肝心の彩夏であるが……

「こいつは、軍法会議だな」

最低でも軍法会議にかけられるだろう。ただの警備兵の端くれがソードの試作二号機を勝手に起動させた挙句、独断で好き勝手に暴れたんだから無理もない。

そんなこなんをしている考えている間にコックピットの無線から通信がとどいた。目の前の司令部からである。

『こちら司令部、ハイペリオン応答せよ！』

「――ハッ！ こちら、ハイペリオン」

すると、彼が身を収める球状の全面180度スクリーンの一部に画面枠が現れ、そこにあのハワード中将がこちらを厳つく覗いて、彩夏はとっさに敬礼した。

『パイロットは誰か？』

初めて問われる中將の声に緊張しながらも彩夏は敬礼と共に答えた。

「だ、第04警備部隊所属サイカ・オリベ二等兵であります！」

「なに？ 貴様、警備隊の者か！？」

驚く顔を見せる中將に、彩夏は動揺しながらも恐る恐る答えた。

「は、はい——それで、あります……」

『うむ——』

「も、申し訳ございません！ 勝手に本機体を起動させてしまったことには処罰を受けます」

『——とりあえず、機体から降りてくるんだ』

そう言うと、通信画面は途絶えた。

「やっぱり、軍法会議モノだよな。大切なソードを荒っぽく使っちゃまったせいで——」

と、言いつつも彩夏は「でも——」と言いかけて、

「——これが、憧れのソードか……」

今でも自分が、あのソードのコックピットに座っていることが信じられずに全体が震えて興奮気味であった。

——この機体を、俺が動かしたんだよな……

満足げにしたった後で彩夏は覚悟を決めて機体からケーブルリフトにぶら下がっておりてきた。

地面に着いた時は、さきほどの興奮が残っていたのかふらつきが止まらない。

すると、彼の元へ一人が兵士が恐る恐る近づいてきた。

「あ！ お前——」

ライフルを持った状態で声をかけられたのか、彩夏は振り返ってビクツとする。

「！？」

同じ警備隊の同僚だ。よかった、無事だったのかと言おうとしたとき、

「このソードでISのテロ共をやっつけたのはお前か？」

「あ、ああ——うん」

恐る恐る答えた途端、その兵士は大声で後ろにいる仲間たちを呼び出した。

「おおーい！ ヒーローが戻ってきたぜえ！！」

すると、周囲から生き残っていた警備兵の仲間たちが大勢こちらへ駆け出していくではないか。

全員が、自分たちと基地を救ってくれた彩夏を称え、全員が彼を囲いだした。

「すげえーよお前ッ！ あの機体で連中を返り討ちにしたんだろ」

「仇を取ってくれてサンキューな！」

そうして、歓喜に満ちる仲間たちを見て、彩夏もまた涙ぐんだ。

その中には03部隊の兵士たちも加わっていた。

「み、皆さん——無事だったんですね！」

「お前のおかげで命拾いしたぜ」

と、タトゥーの03部隊の面々は彩夏を肩車で持ち上げてた。

「今日のヒーローはコイツだあ！！」

そうやって大はしゃぎしている中、

「静まれえ！」

その声は大円満の外から響いて、この一声が興奮気味であった彼らを静まりさせた。

「ちゅ、中将！？」

一人が叫ぶと、一斉に彼を通す道を開けた。向かい先は当然彩夏の元である。

肩車から降ろされた彩夏も先ほどの覚悟を思い出して、ハワード

中将に全員が敬礼した。

「まずは、今回の一件に関しては大変苦勞だったなオリベ二等兵」

「ハッ！」

「本来ならば軍法会議の監禁処分に処されるか、軍を解職のどちらかだろう――が、今回は貴様の活躍で基地が救われ、我々も命拾いしたために今回ばかりは特別に目をつむってやろう。」

しかし、貴様は完全に無実とはいえん。少なくとも無許可でソードを起動したことには非がある。今後の指示があるまで謹慎処分だ。以上！」

それを言い渡すと、中将は彼に背を向けて去って行った。するとすぐさま歓声が再開して、それを中将に同行していた士官が大尉に止めるも、背を向ける中将はニヤツと微笑んだ。

その夜は、外れのバーで包帯だらけの兵士たちが大宴会を開いて主役の彩夏を持ち上げていた。

「俺たちと基地を救ったヒーローと、この戦いで死んでいった多くのヒーローたちに乾杯ッ！」

03部隊のリーダー格がそれを合図に面々は一齐に酒を飲みだした。

未成年である彩夏であるが、こっそりと酒を飲んで顔を赤くしては03部隊の面々と楽し気に飲酒を堪能した。

「俺はよう〜！ こいつが入ったとき、やるときはやるような奴だっただって感じてたんだよう〜！！」

片足にギプスを付けた仁も真っ赤になって他の部隊と盛り上がっている。

「ははは、本当に無事でよかったよ仁。お前が死んだら寝坊助の俺を誰も叩き起こしてくれないんだからさ」

同じように酔って赤くなる彩夏がいた。

「へへーん！ さすがの俺も死神からトコトン嫌われちゃったよ
うだぜ」

そういって、こっちに來た仁が彩夏の肩に片手を絡めて騒ぎ続けた。

それから明け方近くまで飲み明かした後、ペロンペロンに酔っぱらったまま寮のベッドへ勢いよく身を投げてから泥酔したまま深い眠りについてしまった。

鼾と一緒に酒の臭いが部屋中に充満し、汗臭さの染み渡ったベッドの上で彩夏はふと目を覚ました。

「うう……」

頭痛と吐き気のダブルパンチですぐにもトイレへ駆け込みたくなかった。これは人生で初である完璧な二日酔いである。

「頭いてえ気持ちわりい……」

重い足取りでトイレへ駆け込んでいき、思い切って昨晚飲んだ物を全部便器の底へ戻してしまったのである。

当分は酒を見たくないというトラウマを抱えながら、長い苦痛を得てようやくトイレから戻ってきた矢先に玄関からインターホンが聞こえた。

「ああ？」

口をゆすぎ終えてからもう一寝入りしたかったのだがと、こんな朝から——いや、もうお昼過ぎであるが、いったい誰だろう？

「はい——？」

「おはよう。お目覚めはいかが？」

そこには、白いスーツを着た三十路半ばほどの女性が笑顔で立っている。彼女が、彼の部屋を訪ねてきた来客だ。

「その、どちら様ですか？」

低姿勢な物言いで訊ねる彩夏に、

「ふふふ、日本人の男性は二日酔いの状態でも礼儀正しいのね。感心するわ」

「ど、どうも……えっと?」

「申し送れたわ。私、ネオファリアのネイナ・ラフィット・ファーム開発主任です。彼方が大好きなソードの開発者でもあるのよ?」

「ソード——そ、そ、そ……ソードの!? あああゝッ!!!」

とたん、彩夏は肝がひっくり返るほどに仰天して腰を抜かしそうになりつつも、昨日のことも踏まえて深々と頭を下げて真っ先に謝罪を始めた。

「も、申し訳ありませんでした! 自分のせいで大切なソードを

——」

「あらあら、別にいいのよ。私も危ないところを貴方に助けてもらったんだし、命の恩人よ。今日わね、そのお礼も兼ねて貴方をスカウトしに来たの」

「す、スカウト? って……」

「もちろん——サイカ・オリベ二等兵ッ!」

「は、ハッ!」

いきなりの彼女の大声に彩夏はシャキッと立った。

「今日付けで、彼方をSSEプロジェクトのテストパイロットへ任命します。今日からハイペリオンのパイロット、頼んだわよ♪」

「は、ハイペリオン?」

「ハイペリオン・ソード、昨日あなたが乗りこなしたあのソードよ。ハイペリオンって、結構ジャジャ馬な子だから、多少荒っぽく使ってあげないと振り回されちゃうわよ」

「えっと——へ?」

「どういうこと? この人はいったい何を言っているんだ? 自分は単なる警備兵の端くれで二等兵のペーパー新米で、士官学校とか

の訓練性や卒業生でもない。家は土器にでもある一般の家庭で、軍属の名門家でもない。

そんな自分が、「ソード」を？ これは何かの間違いじゃないか？

「あの……今日はエイプリルフルではありません、よね？」

「そうじゃなかったら、彼方をハイペリオンのパイロットになんて選んだりしないわ」

「……」

彩夏は、その場で膠着状態に陥った。

「あら、警備兵君？」

ツンツンと、人差し指で動かなくなった彼の肩をつつくと――
バタンッ！

と、彩夏の膠着した身がバタリと仰向けに倒れてしまった。

「ちょ、ちょっと君！ 大丈夫！？ だ、誰かぁーッ！！」

最期に聞こえたのはネイナ主任の声で意識を失ってしまった。

「う、うう……」

次に気づくと、基地内に設けられたラウンジあり、そのベンチに彼は横たわっていた。

「ああ、やっと起きたか！」

目覚めたばかりの彩夏の視界へ真っ先に入ってきた顔は見覚えのあるあの男の顔であった。

「あ、あなたは……うう」

まだ残っている二日酔いに唸りながら起き上がった彩夏は改めて男を見た。

「覚えているか？ 俺のこと」

「えっと――たしか、ソードの格納庫でお会いした」

「ああ。あの時は俺のハイペリオンが随分と世話になったじゃね

えか。それと、ネイナ主任や中将達を助けてくれてありがとうな」

「いいえ、兵士として当然のことです。えっと——」

「キース・マクレガー大尉だ」

「ああ、そうでした。大尉、もしかして自分をここまで？」

「ははは、背負うまでに随分と苦勞したぜ。ネイナから連絡があったな、二日酔いの上にハイペリオンのパイロットに選ばれた衝撃で気絶しちまうんだからさ」

「ああ——そうだった！」

つかさず、さらに迷惑をかけてしまったと彩夏は深々と詫び入れた。

「申し訳ありません！ 自分としたことが……」

「気にすんな。これから同じ釜の飯を食う仲間だ、よろしくな織部准尉」

「は、はい！ こちらこそ——って、自分はまだ二等兵ですが？」

キースの差し伸べた握手を両手で丁寧に握りしめる彩夏は、自身の階級に首を傾げた。

「無断でソードを起動させたとはいえ、ISを撃墜して司令部を救った功績はデカかったらしくてな、お前は今日付けで二等兵から准尉だ」

「そ、そうなのか——」

昇進できるとはいえ、なんか実感がわかない彼であった。

「あら、もう気づいたのね？」

すると、キースの後ろから歩いてくるネイナに気づいた。

「ね、ネイナ主任！」

パッと敬礼して、彼女にも詫び入れる。

「主任にも大変ご迷惑をおかけして——」

「いいって、もう。それよりもネオファリアの一因になった気

分はどう？」

「はい——本当に夢みたいで、いや夢を見ているんじゃないかって——これがもし夢だったら本当にどうしようもなく怖くて震えが止まりませんよ」

「大丈夫よ」

そういって、ネイナは彼のもとへ近くに迫ってきた。

「しゅ、主任？」

三十路半の彼女とは言え顔は実の整った美人であり、そんな彼女に見つめられると彩夏も顔を真っ赤にする——が、

「いててっ！」

思いつきりネイナの片手が彼の頬を抓り上げた。

「ねっ、夢じゃないでしょ？」

「ははは——そ、そうですね」

苦笑いして真っ赤に晴れた頬を摩り彼を見て、隣で見えていたキースは、まさかあったばかりの新米にキスで証明するんじゃないだろうな？ と、反面心配していたが彼女のお茶目な行動を見てホッと胸をなでおろした。

「当然、聞くまでもないけど」

「はい！ 是非とも喜んでハイペリオンのパイロットに——あしかし、ふとキースの方を見て彩夏は表情を曇らせた。

「お？ どうした」

こちらを見て顔を暗くする彩夏にキースは首を傾げた。

「し、しかし——自分がパイロットになると大尉はどうなさるんですか？」

「ああ、そいつなら心配ねえ。俺はお古の機体を使ってお前のサポートをさせてもらうつもりだ。コーチとしてビシバシ鍛えてやるから覚悟しておけ？」

ニヤニヤと笑むキースに、彩夏は笑顔が戻って「はい！」と答えた。

「それじゃきまりね！ ささ、織部准尉も荷造りの支度をして一緒に行きましょうか？」

「行くって、どこへですか？」

両手を合わせて、はしゃぎだすネイナに何処へ向かうのか彩夏は首を傾げた。

「日本よー！ 日本！！ 貴方の母国よね、私実は前から日本の伝統技術とかに少し興味があるのよ」

「ネイナ主任、遊びに行くんじゃないんだぜ？」

「てへへ……」

「し、しかし——何故日本で？」

「それは当然！ ソードの実技試験を始めるのにはうってつけの場所なんだから」

「えっと、その場所で自分がパイロットになって試験を行うんですか？」

「そうね。今回君の初陣を見て私確信しちゃったんだもの、ソードなら『IS』にも余裕で勝てるんじゃないかってね♪」

「へえ——えっ？」

「どういうことだ？ ソードでISをとって——
「先方にはもう確認と許可は取ってあるわ。あとは准尉の荷造りを済ませるだけよ」

「でも、本当自分でいいんですか？」

「いいに決まってるじゃない？ 仮に断っていたら脅迫や洗脳しなくても貴方を連れ去っていくつもりだけどね……」

「あ、あははは」

彩夏の多くの苦笑いを浮かべることになった。

それから後日、彩夏は荷造りを終えて旅立つ日に滑走路で警備兵の仲間たちから涙を惜しみながら見送られることになった。

「元気でやれよ！」

「毎日三食飯はしっかり食うんだぞ？」

「体に気をつけてな？」

ほかの隊や03部隊の面々が次々に彼と握手を交わしては全員が男泣きで見送る中、

「彩夏ーッ！」

「仁！」

警備隊たちが群がる奥から、ギブスをしながらこっちへ歩み寄る仁のもとへ彩夏は駆け寄った。

「ソードのパイロット、おめでどう！」

「ありがとう！ 本当に——本当に夢みたいだよ」

「彩夏、俺も後からこっちへ行くよ」

「仁もか？」

「ネイナ主任に頼まれてな。俺がいねえと誰が寝坊助のお前を叩き起こしてやれるんだ？」

「仁、先に待ってるぞ！」

「ああ、俺もこの足が治ったらすぐに行く！」

仁達に見送られながら、彩夏はネオファリアのメンバーと共に輸送機に乗り込んでオーストラリア・トリントン基地を出ていった。

*

日本へ着いたのは、ちょうど夕日がかかってきたころだ。

国連の在日基地へ着陸した輸送機から、彩夏は降り立って久しぶりに故郷の地面に足を付けて夕日の空を見上げた。

「ああ——やっぱり日本の夕日はいいなあ」

やっぱり祖国が一番だ！ 久しぶりに日本の大地を踏みしめて満
足げに彩夏はネオファリアのメンバーと共に基地に向かって、着任
の挨拶をしに本基地の司令官の元へ向かった。

「緊張するな——」

夕暮れの日差しが窓辺から指し照らす通路を、歩いている彩夏と
キースがいた。

「ははは、リラックスだぞ彩夏」

「二等兵の自分にとって、司令官なんて雲の上の存在ですし……」

「そうか？ 命令違反ばかりやってる俺にしちゃあなじみ深い相
手に見えるんだがな」

——この人、そういう人だったのか！？

国連軍の暴れん坊という異名は、もしや彼のことでは？

「まあ、一樣俺もこの基地の指令とは知人でな。緊張するな」

「大尉は緊張しませんけど、自分は初対面ですし……」

「さて、そう言っている間にも着いたぞ」

司令室の扉をノックして、キースは口を開いた。

「キース・マクレガー大尉、織部彩夏准尉、兩名入ります！」

すると、彼の声に返答して「入れ」と、扉の向こうから冷徹な女
の声が聞こえた。

——司令官は女性か？

彩夏は、意外と思いながらもキースと共に司令室へ足を踏み入れ
た。司令室には初めて入るのだから緊張が止まらない。

威厳ある机に椅子、左右の棚にはいくつもの勲章が飾られており、
さらに天上付近の壁際には多くの賞状が額縁に……

——先ほどから冷や汗が止まらない！

いったい、司令官はどういう女性なのだろうか——

しかし、目の前の机からこちらを見つめる司令官の容子を前に、先ほどまで続いた彩夏の緊張は心臓が止まるかのような衝撃と共にピタリと止み終わった。

「ネオファリア所属パイロット、キース・マクレガー大尉他一名、只今着任いたしました！」

「うむ、長旅ご苦労であった。私が在日国連軍基地司令の篠ノ之慈（しののの・めぐみ）だ。移動中疲れただろう、二人とも休め」
背まで伸ばした黒髪を白い紐で束ねた、清楚で武人肌が漂う美しい女性が目の前でキリっとした瞳をこちらに向けていた。

「ハッ！」

「……」

そんな彼女に見とれてついついボーっとしてしまった。

「どうした、貴様？」

そんな若い兵士に訊ねる司令官と、

「准尉！」

キースの声にハッと彩夏は我に返る。

「え——ハッ！ 失礼しました」

——ほうく、コイツは……

キースは、そんな慈司令に見とれてしまった彩夏を見て笑いをこらえた。

「長旅、苦労であったな。さて——大尉、例のハイペリオンのパイロットは？」

「こちらの織部彩夏准尉です」

と、キースの手が隣に立つ彩夏に向けられた。

「お、織部彩夏准尉であります！」

「うむ、貴様には期待しておるぞ。准尉」

そう言うと、彼女はまた凜と笑顔で微笑んだ。

——女神、観音様だ……

再び、彩夏がボーっとしてしまう。

すると、

「おいおい慈めぐみ、そろそろ堅ッ苦しい挨拶はその辺で終いにしないか？」

「え？」

突然の指令に対するため口を叩いたキースに彩夏はあっけにとられた。

「やれやれ——・・・親しき中にも礼儀あり・・・という言葉をお前は知らんのかキース大尉」

ため息をついて、席から立ち上がって、その軍服越しのスタイルの効いた身体を表して歩み寄った。

——わうああ……

スリムで、制服から盛り上がった胸元が異常にデカくて胸元のポタンがはちきれそうだ。おまけにスカートからむき出した、ストッキングに包まれた太もも……

い、いかんいかん！ 今は勤務中だぞ織部彩夏！！

妄想を振り払って、勤務に集中するがどうも頭から彼女のストッキングの太ももと胸元が離れられない。

「どうした准尉？ 先ほどから視点をずらし続けて居るが」

ぐわいでも悪いのかと聞こうとしたが、それをキースが察したのか彼女の耳元でささやいた。

「慈、こいつはな……」

「え、いやはやこれは——」

赤くなった慈司令は、すぐさま彩夏に申し訳なく話した。

「それは気を使わせてしまったな、織部准尉。何分内勤は性に合わず現場肌でな、常に動きやすいようにスカートの丈をやや一段小

さいサイズに替えているのだ。上着に関しては生憎、ちょうどいいサイズが見つからなくてね——」

しかし、今更女性の体を男性が気にするのなんて当たり前のことだと慈は思った。

学生の頃から、よく異性から自身の体を見られているのには慣れている。それは生物学的に男性だから仕方がないのだ。それに、彼らは内勤とはちがって外の現場で日々汗を流して勤務してくれる兵士ゆえにストレスは自分よりも重かるう。

世の女尊男卑に被れた低能極まりない女共は、そんな男性達を犯罪予備軍と貶しているが、自分たちよりも一段と辛い仕事を続けて、その女尊男卑の社会を支えている男達を何だと思っているのやら。同じ女性として実に恥ずかしい。

だが、そんな彼女に彩夏は、

「い、いえ！ 自分のほうこそ申し訳ありません。以後心身共に気を付けます」

彼女から彩夏の純粹が見て取れた。

「ん、そうか——」

——准尉は見てはならぬと紳士的に気を使ってくれたのか、……アイツ……もそうだったな……

『ごめん！ 姉さん、見るつもりはなかったんだよ——』

「……」

ふと、あの時の懐かしい思い出が蘇った。アイツもそうやって体を見ないようにと気を使ってくれたものだ。

「まあよい、気にするな」

目の前の二人に向けて彼女は今後の予定を伝えた。

「今日は明日に備えてゆっくりと休むといい。翌日からはネオフアリアでソードの準備を整えておくように。その間に私が『I S学

園』へ連絡して明後日から始まる貴様たちの試験運用等及び模擬戦闘のカリキュラムの最終調整を確認しておこう」

「やれやれ、IS学園にねえ」

「あ、IS学園っ——!?」

実をいうと、彩夏は次の運用場所を詳しく聞かされていなかったのだ。

IS学園、それはすなわちIS操縦者育成を主とする女子高であり女尊男卑の巣窟でもある学園施設ではないか。まさか、そこを次の試験運用場にするつもりじゃ……

「IS委員会の連中からして、今回の共同訓練ではすんなりと許可を下したが、おそらくソードが目当てだということは想定できる。嚴重なシステムガードが必要のようだ」

「そのへんは心配いらん。ネイナ主任が腕によりを振るって最強のセーフティシステムやブラックボックスを用意してくれたんだ。そう簡単にSEシステムの技術はわされることはない」

「それなら安心だが、しかしソードよりも二人も自身の気を付けるんだ。連中は女だ、男に対して弱みに付け込んでくる可能性だって十分ある。命令まがいであるが、IS学園では常に冷徹に振る舞え、相手に自分の心を許すんじゃない。暴力的な女には暴力で対応せよ、女尊男卑を掲げて男性を見下す女がいれば拳で殴り倒しても構わん、好戦的な女は精神に異常をきたすまで完膚なきまでに打ちのめせ、スパイに関しては捕縛して死と隣り合わせの拷問を浴びせろ、軍の先鋭が学園に来たら迷わず殺しても構わん。色仕掛けしてくる愚かな女がいれば即処刑しろ、これらの対処に関しては護身として携帯しているSEシステムをつかっても良い」

「慈、お前の方がよっぽど冷徹だよ」

彼女の言う命令にはさすがの二人も顔を青くした。

「当然だ！ IS学園の連中やISかぶれの女、女尊男卑に毒された女など、女としての特権や人権など無い。デリカシーやらレディーファーストなんぞ一滴も与えるな！」

——この人、IS関連の人が嫌いなんだな……

何となく、共感してしまう彩夏は、

「ハッ！ 粉骨碎身で努めます！！」

「お前まで何言ってるんだ——」

額を抱えてためキースがため息を漏らした。

「うふふっ……」

そんな彩夏を、微笑みながら慈は見つめていた。

——やっぱり、あいつにそっくりだな……

まだ会ったばかりというのに准尉の面影がアイツと重なってしまっってしまった。もし生きていたら、今頃准尉ぐらいの年だろうか。

「——？」

そんな視線に気づいた彩夏はふと慈司令の方へ振り向いたが、彼女は同時にソッポを向いていた。

司令から視線を感じたような——しかし、こんな下っ端の自分を司令官たる上の者が気にするわけないだろう。

「……」

しかし、司令の視線が徐々に准尉の方へ注がれているのをキースは気づいていた。

——確かに、似てるわな。

考えてみれば准尉はアイツにそっくりだ。しかし、目の前にいる准尉は慈の知っているアイツじゃない。赤の他人だ。これ以上彼女が深く関わらなければいいのだが。

「やれやれだぜ……」

ため息をつくキースは苦勞しそうな予感を感じた。

「では、健闘を祈るぞネオファリアのソードパイロット諸君」

「ハッ！ キース・マクレガー准尉、他一名これにて失礼します！」

「失礼します！」

「うむ、准尉も気を付けてな」

その視線を、彩夏に向けて彼女は再び微笑んだ。二度の微笑みに見惚れて再びボーっとなりそうな彩夏は危ういこと振り払いながら、キースと共に敬礼をして司令と別れた。

「その、大尉？」

「お？」

通路を行く道中、彩夏はキースに、

「この基地の司令官は、大変美しい方ですね」

「そうかあ？ 面倒だし男口調で、堅苦しいわで俺にとっちゃ恋愛対象外だな」

「そうですか——」

「なんだ、ひとめ惚れか？」

意地悪そうに隣を歩く彼の凶星な顔を覗き込んだ。

「ち、ちがいますよ！ 自分はその——憧れです」

「ほう？ まあいい——ああそうだ、今後の仕事に関してこれだけはやっておく」

「はい」

視点を前に戻すと、キースは真剣な表情をして彩夏にこれだけとは言い聞かせた。

「あいつの言ったことは大方間違っただけねえ。いいか、お前は俺が見るに——童貞だろ？」

「な、何ですかいきなり！？」

「童貞か卒業したか答えろ」

真顔な口調で聞いてくる彼に、少しビクツとした彩夏は恥ずかし

くもきっぱり答えた。

「――童貞です」

「だろうな、いいか俺たちは今からIS学園の敷地を借りて、ここでISとの模擬試験を行うことは司令から聞いているな。いくら女子高とはいえ女だらけの場所だ。教員から用務員まで女だらけってことは肝に銘じておけ、そしてソードの仮想対象がISだってことも忘れるな。」

連中は、SEシステムの情報を欲しているのは間違いない。そのためならどんなことだってしてくるに違いない。色仕掛けうんぬんのハニートラップとかな。俺も十分気を付けるが、何よりも一番気を付けなきゃならねえのは童貞のお前だ。いいな？」

「は、ハッ！ 気を付けます」

「まあ、慈の言ったような冷徹スタイルを貫き通すのが理想だけど、無理は――」

「あのスタイルか、よし！」

「言うんじゃなかった……」

とはいえ、あまりにも冷徹態度に奮闘する彼を見て、キースはさらに先が思いやられそうな気がしてならなかった。

ちなみに、会話中に慈が言っていた携帯用SEシステムとは、ソードのパイロットに与えられた護身機能であり、パイロットはそれを随時身に着けているため小型のSEシステムを使用して、生身でもISに対処出来たりもすることが可能なのだ。

二人は、ネオファリア部署の部屋へ戻ってネイナから今後の予定について詳しい説明を受けた。

とりあえず、今日は持ってきた私物を新しい寮へ運んで整理するようにとのことだ。明日からソードの準備をして機体の歩行と飛行の動作確認を行い、明後日のIS学園までに万全の準備を整えてお

くようにこのことであつた。

「さて、これで今日は終いか——」

一通りの説明を受けた後、部署から出てきた彼は私物の荷物を背負って基地内の寮へ向かおうとした。トリントンとよりも設備は従事していると聞いているため、窮屈なプライベートが若干軽減されると嬉しい。

「おう、彩夏！」

そこへ、あとから部署の部屋から出てきたキースに呼び止められた。

「大尉？」

「准尉、これから予定とかあるか？」

「いえ、自分は特に——」

「なら、居酒屋つてとこに行かないか？」

「ああ、飲みに行かれるんですね」

「とはいえ、二日酔いになったばかりだしどうしようか——」

「すみません、自分昨日二日酔いになったばかりで……」

「そんなことじゃ何時まで経ったっていっぱしのパイロットに慣れねえぞ？ いいか、男つてのはまず酒に強くならなくちゃならねえ。二日酔いの一回や二回がなんだ！ 酒を強くならねえよソードの操縦もおろそかになる原因にもつながるんだぞ」

「え！ そうなんですか？」

しかし、ソードがらみになると彩夏はうっかり信じてしまう青年であつた。

「そうだ！ そこでどうよ、ソードをうまく扱えるために練習として酒も強くならなきゃならねえ。ソードにはかなりのGもかかるときがある。それも踏まえて酒の酔いにも慣れておく必要もあるのさ。素人のお前を鍛えるには打ってつけなんだ」

「それじゃあ——是非」

ソードに關係するのなら、自分の操縦が上達することにつながるのならば、彩夏は迷わず彼の誘いを受けた。

その後、彼はキースと共に東京のとある飲み屋街に足を運んだ。そこで適当に立ち寄った店先で梯子を続けながら、気づけば彼は案の情にもベロンベロンに酔っぱらってしまった。

「うーい……ヒック、准尉！ もう一軒はしごすんぞ！！」

「りよ、了解であります！」

夜の飲み屋街で、多くのサラリーマンが行きか人ごみに流されながら次の目についた店へと寄っていく。

女尊男卑になってもスーツを着た人は男性が多くてOLの人は少なかった。結局、女共はあくまでも男性を労働力として働かせては、自分たちにとって都合のいい社会を作っているにすぎないのだ。

女尊男卑になったことで女性は同権を得たというものの、女性の就職率は下がりって男性の多くが働き、代わりに多くの女性は上手い理由を付けて生活保護とかを受け取っては遊んで暮らしているのだ。そんな世界を嫌っている慈司令は、同性でも誇りを重んじているのだから立派だすぎる。

居酒屋の席でも、近くでゲラゲラ笑いながら楽しく飲んでいる女性たちも、所詮は遊んで暮らしている人間なんだろう。あるいはスーツ姿で店員の男性に酷く絡んでいる女は働いている女性で、自分が男性よりも一番権利が高いと勘違いしているバカ女なのだ。

「彩夏よお！ 近頃のおんなどもってのはなあく！！」

「大尉！ 聞こえてますよ！？」

酔っぱらったキースを止めながらも、居づらくなった店では彩夏が店員に勘定を頼んでは大尉を担いで店を出た。

自分も酔っているっていうのに、その倍も酔っているキースには

あきれながら、ここからそう遠くない公園の敷地に入ると、近くのベンチに彼を寝かしつけた。

「大丈夫ですか？ 大尉」

「おう、どうってこたあゝ……」

「自分、水を持ってきますのでそれまでここで待っていてくださいね」

「ああ、すまねえ——」

——これって、本当にソードに関係したことなのか？

次第に疑い出す彩夏は、とりあえずキースをそのベンチに横たわらせてから近くのコンビニへ水を買いに走った。

「キース大尉は、本当に人騒がせだよ——」

運よく近場にコンビニを見つけたことができた。そこで500のミネラルウォーターの一本を手に入れた彼は急いでキースの寝転がる公園のベンチへ向かうべく急ぎ足でコンビニから出たのだが――

ドンッと、入り口付近で誰かと当たってしまい、ぶつかった相手は尻もちをついてしまった。彩夏は酔っぱらっているとはいえ軍人として鍛え上げた肉体から尻もちをつくようなさまにはならなかった。

「あ、すみません！ お怪我はありませんか？」

見た限り、自分よりも年下の少女と見た。見る限りかなりの美少女である。

「い、いえ——こちらこそよそ見をしていたのもので……」

そういって、少女はポニーテールの結んだ髪を揺らしながら起き上がってこちらを見ると、

「……一夏？」

「——？」

突然、こちらを強い視線で見つめてくる少女に彩夏は苦笑いして、
「どうしました？」

そう問うと突然にも少女がつかみかかってきたではないか。

「一夏！ お前、一夏なのか！？ どうしてここに――」

突然両肩を掴まれて激しく揺さぶられるのだから、何が何だかわからずに混乱してしまう。

「どうして一度たりとも連絡してくれなかったんだ！ 長い間心配だったんだぞ！」

「ち、違います！ 人違いですって！！」

「え――？」

人違いという言葉に少女も気づいたのか、ぱっと両手を話した。

「うう――アルコールがさらに回る……」

あんなだけ揺さぶれたら、吐き気で飲んだ物が口から戻してしまいそうになった。

「あの、織斑一夏という人物では？」

少女が冷静に問うと、

「すみませんが、自分は、織部……という者です」

「ッ！」

それを知ってか、人違いで取り乱してしまったことに少女は顔を真っ赤にしてしまった。

「す、すみませんっ！」

深々と頭を下げて彩夏に詫びた少女は、彼が自分が知っている一夏という人物ではないことを認めた。

しかし、少女からして本当によく似ていると思ったのだろう。

――確かに、見る限り年上の年代に見える。一夏じゃない……

「取り乱いしてしまい大変申し訳ありません」

律儀に謝罪する彼女を見て、誰かと面影が重なった。

黒い髪を結んだ、凜とした女性像、それは紛れもなく在日国連基地の慈司令官の容子や雰囲気と重なってしまった。

——慈司令？

いや、しかし違う。年下に見えるし、司令はもっと落ち着いてキラッとした美しい女性だ。目の前の彼女も可愛いが、慈司令官よりかは遠くに及ばない。

「——その、失礼します！」

人違いだと知ったのか、恥ずかしそうに走り去っていく少女を見て、彩夏は首を傾げたままとんだ災難に遭ったとため息をついた。

「あ、大尉が待ってるんだった！」

こちら側も本来の目的を思い出して、泥酔しきっているキース大尉のもとへ、酔いが悪化するのもお構いなく大尉が待つ公園に向かって駆け足で戻って行った。

一方、キースが酔っぱらったしがない外国人とみられてパトロール中の警官に職務質問されてしまったのは言うまでもない……

SCENE 3 「IS学園」

朝起きると、二度目の二日酔いに苛まされていた。そんな二日酔いに苦しむ自分をとば対照的に酒を飲んだとは思えないほどにピンピンしているキースには驚かされる。

キースとは長年付き合いが長いネイナは、彼が無理やり彩夏を飲み突き合わせたんだなという予想を当てたようだ。

「うう……」

「准尉、その程度じゃまだまだだな？」

滑走路をふらつきながら歩く彩夏に余裕の笑みを見せるキースであるが、

「何を言ってるのよ！ どうせ、うまい口車に乗せて織部准尉を飲みに誘ったんでしょ？」

そんなキースの後ろから呆れた顔をしてネイナが突っ込んだ。

「あ、バレた？」

「まったく、何件もはしごを続けた挙句に泥酔状態になった貴方を准尉が寮まで送り届けてあげたっていうのに、日常で迷惑かけているのだけは変わらないのね！」

「あはは……」

そう思うと、少なからずに彩夏に対して罪悪感を持つキースであった。確かに昨夜は誰かに担がれたような感覚を覚えている。

「ところで、大尉が乗る機体は？」

「おお、それならあれだ——」

といってキースは目の前に立ち聳える白い機体を見つけた。

その白い機体

「これって!？」

白騎士事件で活躍し、後に自分の命を救ってくれたあの機体——青と白で彩られ、後方にはブースター兼SEジェネレーター式ビームカノンを取り付けたソードのプロトタイプ機「タイラント」ではないか！

「す、すごい——本物のタイラント・ソードだ！」
はしゃぎながらタイラントの足元まで駆けよると、あとから歩み寄るネイナたちが彼にこの機体についての解説を聞かせた。

「この機体は『タイラント改』って言って、旧タイラントにハイペリオンの最新機能を取り付けた、いわゆるバージョンアップ機ってところよ？」

と、嬉しそうに説明するネイナに無我夢中で彼女の話に耳を傾ける彩夏を見て、キースは熱の出た二人の会話についていけなくなつた。

「パイロットはもちろんキース大尉よ」

「大尉が、この機体を？」

「ほかに誰がいるのさ」

そんな苦笑いするキースを見て彩夏は、

——もしかして、大尉があのとときの……？

白騎士事件で雄々しい初陣を飾り、後に空港襲撃時に自分を助けてくれた、あのタイラントのパイロットが——？

「……」

——しかし、正直言うともあまりイメージがわからない。それに大尉は自分と同じテストパイロットなんだし、きっと当時は違うパイロットがこの機体に乗っていたんだろう。

「さて、二人の機体も準備が整ったことだし、そろそろ動かしてちょうだい」

そういうと、ネイナは格納庫から彩夏が乗るハイペリオンの青い

機体を運ばせるよう整備班へ指示を送った。

「えーっとー」

タイラントの隣に立ち並ぶハイペリオンのコックピットの球状内部にて彩夏は、ハイペリオンの操縦マニュアルに目を通しておさらいをしていた。マニュアルの内容は全部空いた時間に覚えてしまった。よっぽどソードが大好きでなければできない集中力だろう。

「坊主！」

すると、コックピットのハッチからひょっこりと中年の男が顔を出した。

「ボブ整備長？」

トリントン基地から整備班の班長としてネオファリアに加わっている中高年の整備士、ボブはハイペリオンのパイロットがキースよりも若いパイロットになったと知って、すぐにも顔を覗きに来たのだ。

「操縦に関してわからんところはないか？」

「特に今のところは——あ、この出力の調整とかなんですけど」

「おうおう、ここはなあ」

ボブは親身になって彩夏に細かい操縦部分を教えた。そんな二人のやり取りを見て親子のようだと地上で待っている整備班達が微笑んでいた。

「あのおやっさんがねえ〜？」

「おやっさん、独り身だから嬉しいんだろうなあ」

その後、最終確認を終えると、ネイナの合図でタイラント改から先にその巨大な足をズンと滑走路へ一歩踏み込んだ。

『機体の状況はどうかしら？』

コックピット周辺を囲う球状内部の全面スクリーンからモニター枠が表示されて、ネイナの画面がパイロットのキースへ訊ねると、

「どこも異常はない。いつも以上にピーキーで俺好みの馴染みが残っていて助かるぜ」

『久しぶりの機体だからって無理はしないでね』

「おう、それより彩夏の方はどうだ？」

すると、彩夏の球状スクリーンにもネイナからの通信画面が入った。

『彩夏准尉、二度目の操縦になるけどわからないところはないかしら？』

「マニュアルの基本操作は全部覚えましたので、今のところは——」

『あら、あのマニュアルを全部覚えたの？』

半分独学で覚えたキースとは違ってマニュアルの大半を記憶した彩夏にはさすがのネイナも驚いた。

『ならあとは、実際に操縦して経験を積むだけね』

「はい、よろしくお願いします！」

そして、タイラント改に続いてハイペリオンも前に一歩足を踏み出した。目の前を行くタイラント改はネイナの指示で上空へ浮上していった。

『准尉、次は貴方の番よ』

「は、はい！——織部彩夏准尉、飛びます」

スラストアーを上げてゆっくり足の両フットレバーを踏み込んで、キース機よりかはいかなくとも、少しゆっくりな動作で上空へ浮上していき、上空で待機しているタイラント改の後ろに出た。

——しかし、本当に驚いた。

彩夏は、シミュレーションも受けなままぶっつけ本番で二度目のソードを操縦させて貰っているのだ。それも、始めてから今に至るまで操縦桿が自身の体と馴染んでしまっているようにも思える。不

思議な事だが、次にどうすればいいのかが次々に頭の中から浮かび上がってくる。マニュアルを読んでイメージトレーニングをするよりもスムーズ過ぎて、逆に怖かった。

「初めてにしては中々だな。やはり、コイツが例の――？」

コックピットの全面スクリーンにうつるハイペリオンを見て、キースはふとそう呟いた。

『准尉、今のところ分からないとことか不安な面はないかしら？』

「はい、大丈夫です。えっと――機体状況両行、SEシステム可動状況も異常なし」

「うん丁寧ね、どっかの誰かさんと違って雑じゃないから立派立派♪」

「おいおい、そこは雑じゃなくてベテランって言ってもらいたくない？」

上空へ上がった二機のソードは、ネイナの指示に従って上空を飛び交った。垂直上昇から降下まで、限られた飛行範囲の中で飛行を続ける二機であった。

そして、最後の課題としてISに似せた無人ドローン機を地上から飛ばしての模擬戦闘を行うことになった。

「いいか准尉、ISとソードの大きさは目に見えているだろうが、ソードがサイズで不利なわけでは決していない。音速を超える高機動で小さい目標をロックオンすることが十分に可能だ。ダメージもSEフィールドで十分に防げるが、システムに頼っているパイロットは務まらない。極力、敵のダメージを回避しながら無傷で目標を仕留めることに専念しろ」

「りよ、了解！」

確かに、SEフィールドで外部からの攻撃を完全に防がれるが、そればかりに頼ってばかりいてはパイロットとしての腕が上達しな

い。

「敵は小回りが利くが、俺たちはそれ以上に早い速度をもって飛行できる」

「よし——やってやるッ」

訓練開始の合図と共に、二機は目の前十機の小型の無人ドローンとのドッグファイトを行った。

ドローンの速度はISの最高速度と同じで小回りもIS同様だ。ソード二機に対してレーザーライトを照射してくるため、それをソйдаが掻い潜るように避けて無人機にロックオンしなくてはならない。

「す、すごい早さだ——！」

SEシステムのおかげでGは感じないが、それでも疑似IS型のドローン数機がこちらをしつこく追い回している。

『准尉、もっと速度を上げろ！』

通信から大尉の叫びが聞こえた。

「了解ッ！」

もっと早く、恐れずに機体を信じて速度をさらに上げた。

「ッ——！」

途端、後方のドローンは一斉にこちらから遠ざかっていくではないか。そのまま速度を保ちつつ旋回してドローン五機の後方へ回り込み、五機のうち二機をロックオンした。

すると、残り三機は小回りの利く身のこなしでこちらの後方へ周りこみ、レーザーライトを機種半球レンズから照射を始めるのだが、

そのレーザーの閃光を寸前で交わしたハイペリオンは、先ほどと同じように速度を上げて次は急上昇で上空へと駆け上った。成層圏に出た俺は、その降下しつつ旋回をして、まだ上空へ上り続けているドローン三機の後方を取った。

二機をロックオンして、残り一機を追い回してロックオン、まるで相手が止まっているように見えたのは言うまでもない。

「こちら織部、ドローン五機撃墜完了しました」

『お疲れ様、結構派手に飛んだわね』

帰投中、ネイナ主任の通信画面が入った。

「申し訳ございません」

少し勝手すぎただろうか――

『別にいいわよ。それよりも、成層圏は綺麗だったでしょ？』

「はい、とても絶景でした」

『成層圏到達までわずか4秒――良いデータが取れたわ。さ、帰ってきなさい』

「了解」

ハイペリオンが地上へ降り立ったころには、すでにタイラント改が戻っており、キースが地上へ降りてい来るハイペリオンを見上げていた。

――でも、大尉は怒ってるかな？

パイロットとして厳しいことを言われるのを覚悟でハイペリオンを地上へ着地させてリフトから降りてきた彩夏はこちらへ歩み寄ってくるキースへ敬礼して待っていた。

「准尉！」

「ハッ！」

「最初に二機撃を墜したのはよかったが、最後の成層圏まで垂直上昇という手段に関しては少し派手過ぎだ。序盤のように必要最低限の動きと限られた範囲でターゲットのロックオンに徹底したほうがいい。ネイナは喜んでいたが、指示がない限りパイロットたるもの無駄な動きは避けるようにな」

「注意しますッ！」

怒鳴られずには済んだが、口調を替えてもその言葉は身に染みてくる。

「まあ、先輩の言葉を親身に受け取ってくれるのならこちらも嬉しいからな」

注意というよりもアドバイスのように、こちらの性質に合わせて口調を変えたのかもしれない。ああ見えて、面倒見のいいひとなのだろう。

その後、休憩をはさんでは対IS級サイズとの模擬ドッグファイトを夕暮れ時まで続けた。

彩夏は無我夢中でハイペリオンと共に空を飛んで、気づけば勤務の終了時間を告げられていた。

『お疲れ様。今日はここらにしておいて、明日の本番に備えて体を休めてね』

ネイナ主任の通信画面に「了解」と返して、ハイペリオンは地上へと降り立った。

「お疲れだな准尉！」

「はい、お疲れ様です大尉」

「意外とやるじゃないか。この調子だと俺もうかうかとしておれんな」

「いえ、自分なんてまだまだ未熟者ですよ」

今日のフライトを終えて、シャワーを浴びに向かおうとした矢先、

「ご苦労だ二人とも」

慈司令が二人の前に現れ、歩み寄ってきた。

「し、司令！」

今日も来たのかと、突然の来訪に彩夏はピシッと敬礼して再びあの時のきんちゅが蘇ってきた。

「固くならず休め」

「ハッ！」

二人は両手を後ろにつけると、慈は彼らにソードの状況を尋ねた。

「どうだ、ソードの状況は？」

「ハッ、すこぶる快調であります！」

と、キースが答えると、次に司令は彩夏へ振り向いた。

「貴様の機体も中々のものだな准尉」

「あ、ありがとうございます！」

「ふふっ」

そして、あの笑顔が彩夏に微笑みかけた。

——やっぱり綺麗だな、司令は……

赤くなる彩夏と彼に微笑む指令を見て、キースは確信した。

——慈の奴、本気か？

本当にこの先変な展開にならないければいいのだがと、キースはまたもや不安を抱えたのであった。

「ベテランのキース大尉は大丈夫だが、まだソードに不慣れた准尉はパイロットとして馴染めぬことも多いだろう。無理はしないようにな」

「はい！」

慈は、最後まで彩夏に微笑んでいた。

その夜、寮のベッドで天井を見上げている彩夏は、今日も微笑んでくれた慈司令について余計気になり始めてしまった。

「司令、厳格に見えるけど——本当は、寂しい、人なのかな？」

何故か確信はないのに、そう思えてしまう。いや、今日彼がハイペリオンに搭乗した際にも操縦桿を握りしめた途端に、まるでハイペリオンが自分が乗り込んだこととても喜んでるように感じてしまった。飛んでいるときでもハイペリオンは上機嫌にもっと飛ばしてくれと言っているようにも思えてしまう。そして、機械以外に

も今回慈司令といった人間からはオーラのような気配を感じた。とても寂しい故に、優しくしてくれる、そんな感じがした。

「おかしいな、最近は——」

ソードに出会うまでそんな第六感的センスはなかったのに、トリントンでソードに乗って以降に薄々と微かに、確信はないがそんな気になってしまった。

「疲れてるんだよ、きっと……」

今は明日に備えてもう寝ようとし、彼は瞼を閉じた。

*

翌朝、国連軍の艦艇でネオファリアの隊員たちはIS学園の人工島へと向かった。

艦艇の甲板から波に揺られている彩夏は、手すりから学園周辺を囲い停泊、警護している海上自衛隊の護衛艦の群れを見渡していた。

「すげえ——」

甲板に吹き荒れる潮風に前髪を揺らしながら、その艦隊景色を宥めた。

IS学園という軍事組織が警護に着くほどに、世界で最も警備の固い施設である。もちろんその防衛費は各国からの支援金で賄っているのだ。

「大尉！　すごい光景ですよ」

と、船内にいるキースへ顔を除いたが、

「うぷっ——うう……」

あいにく、大尉は船の揺れには弱いようであり、しばらくは声をかけない方がいいようだ。

「まったく、めったに見られない光景かもしれないのに、もった

「いないわね？」

「そう言ってる、ネイナが隣の手すりを持って一緒に学園を警護しているイージス艦が浮かぶ海上風景を見渡した。」

「いよいよこの時が来たわね。私達の苦勞が試される時が——」

「主任、その……」

「しかし、今更であるが彩夏には一つ不安があった。」

「ソードでISに敵うどうかの不安である。彼は、そう思いながら手首につけられたブレスレットを見つめる。これは、ソードの待機状態である。皮肉にも、このアイデアだけはISの収納技術を流用させてもらっているのだ。」

「大丈夫よ！ 貴方とハイペリオンの腕なら、きっと上手く行くわ」

「ウインクを向ける彼女を見て、何故か自然と自信がわいてきた。」

「主任、ひとつよろしいですか？」

「なら、ここらで彼女に相談があった。」

「何かしら？」

「……自分、思い込みだろうと思うんですけど——ハイペリオンの意思があるんじゃないかって昨日何となく感じたような気がするんです」

「ハイペリオンの？」

「興味深そうな顔で彼女は准尉の言葉に耳を傾けた。」

「最近疲れているんでしょうか——」

「ねえ、准尉？」

「はい？」

「君、『ネクストワン』って聞いたことある？」

「いいえ」

「宇宙開拓時代にね、まだISが宇宙開発に携わっていた頃の話」

よ」

白騎士事件が起こるまで、ISは宇宙開発に向けて開発される予定であった作業用パワーダスーツだったのだ。それがどうやって白騎士事件後にこのような展開に変わってしまったのかが謎である。

「人類が、長年も宇宙での開拓生活を続けていくうちに何人かの人間が後に『ニュータイプ』と呼ばれる優れた直観能力と洞察力を持った、明確には公表されなかったけど、そういったエスパー的な能力を持ったクルーが発見されたのよ。そして、当時白騎士事件に参戦した元タイラント・ソードのパイロットでニュータイプの素質を持っていた彼はその戦闘でソードとかかわるにつれてニュータイプの変種・亜種ともいえる『ネクストワン』の力に目覚めてしまったの」

「ネクストワン——」

「ネクストワンは、ニュータイプのような人間同士と心を通わせる能力とは対照的に、機械と心を通わすことのできる特殊能力を持っているの。ネクストワンは、ソードと共に戦えば恐ろしいほどの力を発揮できるとデータに出たわ。」

「——どうか彼が、その道を踏み外さないためにも私がついていてあげなくちゃね……」

「その、彼というのが元タイラントのパイロットなんですか？」

「そうよ、それは——」

しかし、その続きを話そうとする前に一行を乗せる船はイージス艦が停泊している学園の港施設に到着した。

「あら、もう着いたようね。キースを起こしてちょうだい。って
いうか、一緒に彼を担ぐのを手伝ってもらえるかしら？」

船内で酔いバテているキースを見て彩夏は苦笑いした。

二人でキースの両肩を担ぎながらえっちらと船から港へ降りると、

先に来ていた慈司令が彼らの到着を待っていた。

「うむ、移動中苦勞であったな。特に大尉は」

「ね、ネオファリア部隊ただいま到着いたし——うっ」

キースの酷い酔い様に慈はあきれて、

「誰も見ていないうちに海面へ戻しておけ」

ため息をついて言った直後にキースはすぐさま港の海面へドバっという水しぶきと激しいうめき声を轟かせた。

そんな彼を後ろに、慈は代わりに彩夏へ指示を出した。

「今日からネオファリアには約三週間をこの学園施設で実技試験を行ってもらう。勤務に至っては、一日をこの学園内で務めてもらうことになる。年頃の娘たちが大勢いるが、変に誤解を招くような行動は慎め、軍人たるもの常に厳格かつ冷徹を貫いて小娘共をづかさせるな！」

そう険しい表情で言い終えた後に、「わかったな？ 准尉」と彩夏に向けて彼女はそう念を押して問う。

「ハッ！ 承知いたしました」

——相変わらず殺意むんむんね……

余程ISか同性が嫌いなのかしらないが、妙に近寄りがたいとネイナは思った。

「以上、質問はないか？」

そういう指令に、

「あの、篠ノ之司令？」

と、ネイナが片手を上げた。

「どうしました、ネイナ女史」

「その、そろそろあちら側の教員が訪ねに来られると思うのですが——ネオファリアの代表として、入校前に許可証を見せるようにと言われました」

「妙だな、ネオファリアに関しては軍の申請書に含めてあることを私が承諾させたのだが――」

顎を抱えて、何かの手違いかと思ったのだが、

「すみませ〜ん！」

すると、後方から黄色いワンピースを来た眼鏡の女性が豊かな胸元を揺らしながら息を荒くして駆け寄ってきた。

「貴女は？」

おそらく、教員だと思われるが風格的に事務員の女性かもしれないと慈は思ったのだろう。

「遅れてすみません！ 予定では皆さんの元へ来ることになっていました織斑先生は少し遅れるとのこととで代わりに着ました。副担任の山田と申します」

「副担任？ ああ、それで一つ聞きたいことがあるのですが」

鋭い視線を向けて、慈は山田教員へネオファリアに関しての入校関連を尋ねた。

「申請書に含めておいたはずですが？」

ゴゴゴーと、背後から迫りくるオーラを前に、山田は蛇に睨まれた蛙状態になった。

「ももも、申し訳ありません！ 織斑先生からの指示でして……」

――うゝこの人、織斑先生より厳つそう……

「織斑――やはり奴かッ」

「――？」

本当に呆れるという顔で、不愉快な顔をした慈を目に彩夏は何となく、彼女が誰かを酷く嫌っているように感じ取れた。

「じゃあ、コレ」

そういって、ネイナはひょいっと首にかけた許可証を山田に見せた。

「あ、はい！ 確かに」

「では、代わりに貴女が案内をするのですね？」

「はい、それでは皆さんを校内へご案内しまーす♪」

山田を先頭にネオファリアの面々はさっそくIS学園の敷地内へ足を踏み入れた。

敷地内は広大で、歩道にはホログラムの立体表示版は看板があり、主役の校舎は、先端の鋭い渦を描くような巨大な塔をオブジェが中央に聳えたとつ、近未来な芸術的建築デザインが広がる校舎施設が出迎えてくれた。

校舎に飾られた、白い四枚の翼を持つ校章が実に印象的である。

校舎に続く低い段差を登っていくと、ふと校舎一体を囲うリング状の巨大なモニターからは「招かれざる来客」と表示されたデジタルが移し流れていた。

「大層な御歓迎の仕方だな」

皮肉を言うキースの隣に行く彩夏は、周囲を行き交う生徒たちから様々なオーラを拾い続けた。物珍しそうに見える人以外にも歓迎しない人や敵視を持つ人も中にはちらりほらりと見える。とはいえ、ソードに関しては無知な人が多いだろうから、そこまで歓迎されていないわけではない。

——苦労しそうだな……

とはいえ、今後自分もいろんなことに巻き込まれそうでならない予感がしてしまう。

「えっと、ここは……それで……」

校舎に入ってから山田がいろいろと学園に関して詳しく説明を続けながら学園長室に向かった。当然この学園は約99パーセントが女性で締めくくられているため、学園長も女性であった。

「生徒たちにもよい経験ができるでしょう。私共はネオファリア

の皆様を心より歓迎いたします」

学園長は若い女性であった。推定二十代後半ほどだろうか、若さゆえか口では言いうも、内心では歓迎していない様に見られた。彩夏以外の面々も彼女の不愛想な顔を見ればわかる。

「――それでは、学園の敷地内に専用の勤務施設を設けましたの
での御準備等の方はよろしくお願いします」

「失礼します！」

慈司令の言葉を最後に、ネオファリアを代表するキースと彩夏、
ネイナの四名は学園長室を出ていった。

彼らが出ていったあと、学園長の彼女はようやく本音を吐き出した。

「厄介連中が来たものね――」

「IS委員会の指示に従われますか？」

隣から若い教頭の女性が訊ねた。

「そうね、仮施設には初めから監視カメラが仕掛けられているか
ら、滞在期間まで気づかれなければいいけれどね――」

「ソード――かつて、あの白騎士を撃墜寸前までに追い詰めた驚
異の人型機動兵器、その悪夢が再びこのIS学園に現れるなんて：

…」

「そうならないためにも、我々がどうにかするよりほかあるまい？」
頬杖をついて、学園長は深くため息をついた。

*

「なるほどなるほど」

ネイナは二手三手も先を呼んでいたのだ。小型のマイクロドロー
ンをあらかじめ学園長室の外部へ取り付けて、室内の会話を盗聴し

たのである。

「どうやら歓迎されていないようね……」

外の勤務施設へ行く途中、通路を歩きながらネイナはふと呟いた。後で、部署内部に忍ばせているという監視カメラにハッキングしてダミーの映像でも流して誤魔化そう。

校舎の隣に建てられた仮設部署には他のネオファリア隊員がPCや他の荷物を次々に運んでおり、彩夏達が戻ってきたころにはいつでも作業を行える環境に整えられていた。

そして、ネイナの支持の元仕掛けられたカメラの数を書いたメモを主任の彼女へ手渡すと、ネイナはニヤニヤと良からぬ悪だくみを考え出す。

——コイツも慈のことを言えないな……

そんなキースに彩夏は、

「すみません大尉」

「おう？」

「お手洗いに行ってもよろしいですか？」

「ああ、行ってこいよ。仮設トイレの場所とかわかるか？」

「はい、此処に来るまでの途中に見つけましたので」

「十五分で済ませられるか？」

「はい、それだけあれば」

そういうと、彩夏は部署を後にしてトイレへ駆け足で向かった。

「えっと——このあたりだったよな？」

どうして部署の隣に仮設トイレを設置してくれないのだろうか、これはある意味で意図的にとしか思えない。

「あ、あった！」

急いで仮設トイレへかけよってドアへ手を付けようとした途端、
バシンッ！

勢いよく何かの角っこが後頭部を直撃した。その激しい激痛に頭を抱えて呻く彩夏の後方から慈とは似つかない厳格過ぎる女の声が聞こえた。

「一夏！ 貴様という奴は、もうじきホームルームが始まろうとしているというのにこんなところで何をしている！？」

「い、いちか——？」

また聞きおぼのある名前だ。咄嗟に彼は人違いだと訴えるが、

「人違いです！ 自分は織部といまして——」

「ふざけるな！ まったく、随分と見ないうちに図体だけはデカくても頭の中はまだまだ未熟なままだな」

「ッ！」

見ず知らずの他人にそこまで言われると、さすがの彩夏も頭にきて慈に教わった通りの態度を取り出した。

「いい加減にしろ！ 自分は貴様などは知らんと言っているだろうが！！」

「姉に対してなんだその口の利き方は——」

と、さらに喧嘩が激しくなりそうなところで、

「いい加減にするのはお前だ千冬！」

「ッ！？」

次に気づくと、千冬と呼ばれる彩夏の後頭部を殴りつけた女は草原の地面に頬を押し付けられたまま、片手を背中の中の後ろ手に回されて激しく抑え込まれていた。

「な、なに——貴様は！」

自分を押さえつけているのは、己のと同じ風格をした幼馴染の女性であった。

「篠ノ之慈……お前かッ？」

「私の部下に蛮行を振るうとはいい度胸だな、教員風情め」

「お前の部下だと？」

「自分の身内と私の部下の見分けもつかないほど単細胞なのか貴様は！」

「わかった———すまない、とりあえずその手を放せ」

「フンッ！」

千冬を拘束しているその両手を話して、彼女を解いてやった。

「……確かに、人違いのようだったな」

「だったら言うべきことがあるのではないか？」

「———すまない、人違いだった許してくれ」

「本当に偉そうな態度だけは昔から変わらん」

「ッ！」

千冬はキリッと慈を睨みつけると、そそくさと校舎へ戻って行った。

「怪我はないか？」

と、口調をやわらげて問う慈に、

「少し腫れてしまいましたが任務に支障はありません」

「いいや、部署へ戻って手当しよう。内部出血とかあったら大変だ」

そういうと、彼女はなんと彩夏の手を引いて共に部署へ入っていくではないか。この至近距離で彼女の温もりと香りが漂う中、興奮を紛らわすように彩夏は先ほどの件について尋ねた。

「———あの、先ほど自分を人違いしていた方をご存じなのですか？」

「ああ……奴とは幼馴染というか、単なる腐れ縁だ。まったく、天下のブリュンヒルデとやらが聞いてあきれる！」

———ブリュンヒルデ？

どこかで聞いたことのある響きだが、IS関連に至っては全くの

無知である彩夏にはどうでもいい事である。

その後、慈と共に部署へ戻った彩夏を見てキースは慈から事情を聴かされた。

「ああ、そういう事か――」

さすがはブリュンヒルデ、誰に対しても容赦しない徹底ぶりにはあきれる。

「いちよう大した怪我はないようね？」

スキャン装置でネイナは彩夏の状態を見てホッとした。

「いいや、腫れが目立つ手当をしよう。准尉、こっちに顔を向けろ」

そういうと、救急箱を膝にのせて、慈は彩夏の額周りにシップと包帯を巻きつけて聞く。

「し、司令？」

急にそんな事をされるのでまたもや顔を赤くする彩夏だが、

「これでもあ奴から蛮行を受けたのだ。ケガを負わしたという罪悪感を与えてやらなくては私の気が済まん！」

「は、はい……」

――慈と千冬は犬猿の仲だからなあ……

そんなやり取りを見ていてキースは改めて慈と千冬が水と油だという事を知った。

「まあ、なにはともかく今後の訓練に協力してくれる一年一組の教室へ挨拶へ行く予があるから准尉も来いよ。気分が好かんかもしれんが、一様建前としてでもな――もちろんネイナ主任も頼む」

「え、どうして？」

「ソードを作った人が女性だっという事を公表すればこちらに向けられる生徒たちの敵視の数が幾分減るだろ」

「そうまでしないとイケないの？ 本当、同性の女ってめんどく

さいわよね〜」

「まあ、そういうことだから——いいな」

「はいはい」

「では私も——」

と、同行を求む慈だったが、

「おっと、お前は此処にいる」

そうキースが止めに入った。

「何故だ？」

「まーた千冬と喧嘩したいのか？」

「うむ……わかった」

中学生のころから千冬とは顔を合わすとよく喧嘩したものだ。その癖は今も治っていないらしい。下手に出れば学園側の迷惑につながるか。

「じゃあ、行こうぜ」

キースは彩夏とネイナを引き連れて教室へ向かった。

再び校内に入ってハイテクかつ小娘達には贅沢過ぎるつくりの校舎を歩いて一年一組の教室へ教室の前まで行くと、外には事前に山田が彼らが来るのを待っており、彼女はさっそく教卓に立っている千冬へ知らせた。

一組の教室から突然軍人らしき大人たちが入ってきたことで生徒一同は騒めきだした。

「静かにしろ！ 今日から三週間——あっ……」

そのとき、千冬の視界にはキースの姿が映った。

——キース！？

「……」

しかし、驚く彼女を見ているキースは何も動じなかった。そんな彼を前に我に返った彼女は慌てて言い直した。

「――失礼。今日から三週間、我が一組と共同で実技に当たることになった国連軍のソード開発部署『ネオファリア』の皆様方だ」

「――？」

すると、教室の中からあの時の夜に出会った慈司令そっくりの少女の姿を見つけ、彼女と一瞬目が合った。

「あ――！」

しかし、少女は顔を赤くしてこちらから目をそらした。

――あの子も、この学園の生徒だったのか。

……そのときであった。

「――ああ〜！ お、織斑君！？」

一人の生徒が立ち上がって、仰天しながらキースの隣に立つ彩夏へ指を向けた。

「本当だ――あの人、織斑君に凄いそっくりじゃない！！」

「すごい！ まるで双子みたいに滅茶苦茶似てる！！」

そんな突然参りこんだ騒ぎのように彩夏はたじろいってしまった。

「な、なんだ？」

「ええい、静かにせんかッ！」

騒ぎを静めさせる千冬に徐々に騒めきは途絶えていったが、

「さ、彩夏ッ！ 准尉、あの生徒を見ろ」

キースは突然顔を青ざめたかのように彩夏の肩を激しく叩きながら女子生徒たちの中にいる中で黒一点の存在へ指をさした。

「な、なんですか！？」

そこには、もう一人の彩夏が前側の席について此方を驚いた様子で見つめていた。

目つきや風格はやや異なるも、まるでお互い生き写しのように瓜二つの青年を前に、キースやネイナは混乱しだした。

「そんな――彩夏が、二人！？」

SCENE 4 「二人の彩夏」

「ネオファリアのソード開発主任のネイナ・ラフィット・ファルムです。趣味は機械いじりかしら」

「タイラント改・ソードのテストパイロットをしているキース・マクレガーだ。趣味はラグビーだ」

突然目の前に現れた鏡写しのように現れたもう一人の彩夏、しかし彼は織斑千冬の弟であり、名を織斑一夏というらしく、そんなそっくりさん登場による騒ぎも徐々に引いたところで彼らネオファリアの自己紹介が始まり、最後に彩夏の番が回ってきた。

「ハイペリオン・ソードのテストパイロットをしている織部彩夏です。趣味はバイクです」

すると、彩夏の自己紹介で再び周囲が盛り上がった。

「織部さんっていうんだ！ 所々織斑君の名前と被ってる」

「趣味がバイクなんだ——」

「かっこいい〜！」

そんな生徒たちはまた千冬が叫んで静めさせたところで一時間目に向けて休憩時間が入った。

「あの——」

「——？」

ホームルームの説明を後ろで聞いていたネオファリアの彩夏は休憩中に後ろから自分よりも年下と思われる青年の声に呼び止められた。

「どうも！ 俺、織斑一夏っていいいます」

「ああ、織部彩夏だ」

「なんだか……すみません」

「何で謝るんだい？」

「だってそれは——」

チラリと一夏が後方を見た途端、教室の入り口から女子生徒たちの黄色い歓声が飛び交ってきた。

「あの子よ！ 世界で始めてISを動かしたっていう」

「ねえねえ、織部さんもいっしょだよ」

「織斑君もカッコいいけど、あっちの織部さんも超イケメン！」
つづいて、クラス内の子達に二人は瞬く間に包囲されてしまった。
一夏だけにかまわず、彩夏まで質問攻めにされる羽目になる。

「織斑君〜！」

「織部さん〜！」

一方、彩夏にも一夏に負けないぐらいに大勢の女子が群がってきた。
た。

「え、いや——その」

生徒たちからして、彩夏は年上のお兄さんキャラっていう位置づけで多くの生徒たちが魅了されてしまった。

さらに、来ている制服も軍服からして一軍人である彼の姿に多くの女子がノックアウトだ。特に彼の腰につけてあるホルダーに納らえた拳銃を見てはキュンキュンである。

「——すまない、道を通してくれないか？ 自分は遊びで来ている訳じゃないんだ」

慈司令に言われたことを思い出して、真剣な眼差しで口調を強めで発言したのだが、それが逆に軍人らしい〜！ と逆効果に繋がった。

「ほんとうに織部さんって織斑君のそっくりさんだ！ もっと、その軍人らしい威厳ある美声を聞かせてくださ〜い」

「そんな私達にもっと厳格な声で怒ってえ〜！」

——な、何なんだこの子たちは!?

「い、いい加減にしろ! 俺は君たちと慣れ合うつもりはない」

「織部さん、自分の一人称が『俺』なんですネッ!」

「それよりも、今度織部さんのバイクみせてください!!」

「なんのオートバイのってるんですか!？」

「そんなクールで強がっているところがステキい!!!!」

——何なんだ此処……

「……」

顔を青ざめて、彩夏は兎に角もと両手で女子の人ごみを掻き分けて外へ出ようとするも、

「キヤーッ! 私の肩を触ってくれた〜!!」

「ずる〜い! 私もボディータッチされたい〜!!」

大声でどなれば逆効果、乱暴に振りほどくとさらに逆効果になるかもしれない——

「准尉! お前そこで何してんだ!？」

さっきから帰りが遅いと思っけてきたらと、キースが呆れて一組の教室へ入って行った。

「仮設部署からメモパネルを持って一組に戻っているってネイナからの指示を聞かなかったのか？」

「そうですね、この子たちに引き留められて身動きがとれないんです!」

「あのなあ、ガキなんてたかが——」
すると、

「あ、キースさんだ!!」

「近くで見ると超ワイルド系!!」

「あのお名前教えてくださ〜い!」

と、隣のクラスからも群がってきた。

すると、彩夏と一夏を囲っていた女子の半数はキースの所へ集まりました。

——占めた！ 大半の日本人女子は白人に弱いんだッ

その弱点を突いて、彩夏は素早くその場から突破して仮設部署へと駆け足で戻ろうとしたとき、

「准尉？」

すると、運悪くネイナ主任とバッタリ会ってしまった。

「は、ハッ！」

主任に敬礼すると、彼女は帰りの遅い彩夏のために持ってきたメモパネルを彼に手渡した。

そして主任はメガホンを片手に——

「何やっとうるじゃ己あゝッ！！！」

キーンという響きで生徒とキース、そして隣の彩夏は必死に両耳を塞いだ。

「は、はい……」

低姿勢で、ペコペコしながら怖気づいた女子たちの間を潜ってネイナの元へ行ったキースは、彼女の表情を恐る恐る見た。

「大尉、慈司令の指示をお忘れですか？」

そういうと、彼女は静かに眼鏡をかけた。

「はい——い、いいえ……」

その後、一時間目の授業は早々に開始しされ、ネオファリアを代表するキースと彩夏、ネイナの三名は教室の後ろからパイプ椅子に座りながらメモパッドを片手に織斑教員や山田副担任の説明をメモすることになった。

二人の教員の説明を次から次へとメモする彼らであるが、そんな中で、

「えっと、今のところわからないところなどはありますか？」

と、山田が生徒たちへ言うのと、気まずそうに手を上げた織斑一夏が一人、

「どうしました？ 織斑君」

「その——全部わかりません！」

その一言に教室中は呆気にとられた。

「織斑！ 入学前に呼んでおけと言っておいた教本はどうした？」
姉の千冬担任が問うと、

「教本……あ、ひょっとして捨てたかも——」

返答の代わりに出席簿の角っこが彼の頭上へ振り落とされた。なるほど、仮設トイレへ向かう際に彩夏の後頭部を押さったのもあの出席簿の角っこだったのか。

「あとで発行してある。一日で覚えろ！」

「だ、だってあんな分厚いの——ぐへっ！」

再び角っこが振り下ろされる。

「私に意見するな！ そもそも貴様が教本を間違えて捨てたのが悪いんだろ——！」

——ま、そうだろうな。

確かに捨てるべきじゃなかったと思う彩夏は、次にふたたび山田先生の「ほかに居ませんか？」

という声に手を上げさせてもらった。

「あら、へっと——織部さん」

「唐突に訊ねますが、ISの弱点や戦闘中に気を付けなくてはならない個所などいあったら教えていただきたいんですが——」

「あ、ISの？」

「従来は防衛フィールドで守られているISであります、それを一発で貫かれたらの場合や、ましてや一撃でフィールドを破られる術などはございますか？」

「えっと——申し訳ありませんが、私は競技用専属なので定められた仕様火器の範囲しか、ちょっと……」

「ええ、それでもかまいませんので教えてきただけですか？」

「でしたら……」

と、彩夏はメモを取る中でもっとも思い切った質問をしたことで目立ってしまうかとおもったが、彼の質問に対して生徒たちは特に気にするようなそぶりを見せることはしなかったので、ネイナやキースはホッと胸をなでおろすのだ。

一時間目の授業を終え、メモでまとめ上げた文章をパッドで書き直していると、

「彩夏、かなり思い切った質問をしたようだな。幸い生徒の子達から険しい顔をされずに済んだようだが、今後は気を付けた方がいい」

そんな大尉からの中尉についつい口が滑ったと赤くなる彩夏だが、
「この私を知らないのですか？ イギリス代表候補性のセシリア・オルコットを！？」

——なんだ？

すると、何の騒ぎだと一夏の席へ視線を移してみれば、一人の女子生徒が一夏に何か訴えているのか？

「誰あの娘？」

キースがネイナに問うと、彼女も首を横に振った。

「さっき、代表だか候補だかって聞きましたけど——」

彩夏は、その代表だか候補だかと言っている金髪に縦ロールの横髪をした少女とのやり取りをしていると、困った顔をしている一夏が心配になり、その場を離れて彼らの元へ行ってみることにした。

「彩夏、あまり面倒なことを起こすな」

と不安になるキースも下手に割り込むことなんて出来なかった。

「どうした、一夏？」

「あ、えっと——」

助け船に振り返った一夏はまだ、彼の名前を聞いていなかった。

「織部彩夏だ」

といって、この場を仲裁しようとした彼は金髪立てロールの少女へ視線を向けた。

「何かあったのか？」

両腕を組んで、慈から教えられた態度を向ける彩夏に、後のキースたちはハラハラしだした。

「ちょっとあなた！ そっちこそ何様のつもりですよ！？」

「軍人様だ」

「っ——！」

堂々言い張ってくる姿勢に少女は言葉が詰まるも、それでも自身のプライドで突き通した。

「軍人ごときが何ですよ！ この私を、イギリスの代表候補性であるセシリア・オルコットとしてのことではないか！」

「あの織部さん」

と、そこで一夏が聞いてきた。

「その、この人が言っている『代表候補』ってなんですか？」

そんな一夏の質問に、彩夏は場の空気も読めずに即答してしまった。

「何なんだ？ 代表候補っていうのは。知らんな」

その一声に周囲の生徒たちはぎゃふんと滑り落ちた。

「あいつ——もっとマシな言い回しができねえのかよ」

片手を額を当ててため息をつくキースの隣で、

「代表候補って何よ、キース？」

と、ネイナ。

そんな代表候補という名前は知らんと言いつけてた彩夏にセシリアはわなわなと両手を震わせて二人を愚民と見下すような目つきで説明に入った。

「いいですか？ 代表候補というのは、国家の代表生の候補に選ばれたエリート中のエリートのことですわよ！」

「——つまり、『代表生（仮）』というわけか？」

「か、かっこ……」

そのたとえに、セシリアの思考は一時停止した。それくらいに、自分に対する蔑称だったのだろう。そんなこともしらずに、天然極まりない彩夏は気にせず続ける。

「それで、その『仮代表生』の貴様が一夏に何の用だったんだ。もし邪魔したようだったならすぐにも引くが——」

「か、かりだいひょう……」

ついに、怒りの頂点を超えて放心状態に陥ってしまった。その後、その場に立ち止まり続ける彼女の頭上に千冬の出席簿の角っこが振り下ろされたのは言うまでもない。

「彩夏、お前は相手を精神的に陥れることに関しては天才的だな」
教室のパイプ椅子で次の授業に備えてメモパッドを抱えているキースは、そう彩夏に呟いた。

「自分、何か言ったでしょうか？」

そうこうしている間に、千冬の説明が入った——が、どうやらこちらには関係ないらしい。

彼女は今後のクラス代表に関する説明をしているようだ。クラス代表、話を聞く限り学級委員のようなものだろう。

——まあ、こちらには関係ないか……

そう思いつつ、千冬の説明を聞き流していた。

「——と、自薦他薦は問わん。自ら志願してくれたら助かる」

という千冬にこたえて、一人の女子生徒が、

「はい！ 織斑君を推薦します」

「はい！ 私も」

「じゃあ私は織部さんを推薦します」

——って、俺は関係ないだろ！？

アホか！ と突っ込みたいほど俺は呆気にとられた。

「この人たちは関係ないだろ！ いい加減にせんか」

という千冬にたいし、

「千冬様——！ もっとお叱り下さい——！！」

「そして、その瞳で私たちにしつけの御言葉を——！！」

一部の千冬ファンが発狂する。

「やれやれ、まったく毎回こういう奴らが来るんだから本当に呆れる」

ため息をつく千冬にだが、そんな彼の視界に一人の女子生徒が席から立ち上がった。

「納得が行きませんわッ——！！」

それは、先ほど彩夏から精神的にコテンパンにされたセシリアという代表候補の生徒だった。

「男がクラスの代表なんていい恥さらしですわ！ そもそも、文化共に後進的な島国でI Sの授業を学びに来ること自体、イギリスの代表候補生であるこの私にとって耐えがたい苦痛だちうのに——！！」

——なんだ、コイツ？

最近海外のネットで見かける、日本に対してマウントを取りたがっている白人連中かと思って、そんな小者は無視に限ると彩夏は放っておいた。

しかし、そんなセシリアに対して思春期の若さゆえで一夏は席から立ち上がった。

「イギリスにだって、大したお国自慢は無いじゃないか？　まずいい料理で何年の覇者だよ」

男子である一夏が立ち上がったことでセシリアも怒りの感情に火が付いた。

「イギリスにだって美味しい料理はありますわ！　貴方、私の国を侮辱したわね！？」

「そっちだって人の国をバカにしたくせに何言ってんだよ！」
すると、セシリアはピシッと指先を彼に向けて、

「決闘ですわ！　もし負けたら私の奴隷、小間使いにしてさしあげますわよ！！」

「ああいいぜ。四の五の言うよりわかりやすい！」

そんなやり取りを見て騒然となるクラスだが、何よりも教卓に立つ千冬は面白いと口元を緩ませてこういいだす。

「では、一週間後のアリーナで決着を付ける。織斑とオルコットは各自準備だ」

――だが、

「はい！　ちょっとまってください！！」

教室の後ろでネイナの片手が上がった。

「博士、どうしたのですか？」

千冬が問うと、

「ここは、断然ソードとオルコットさんの機体を戦わせたいのですが」

「許可できん。いきなり調整も打ち合わせも――」

だが、首を横に振った。ネイナからして、彼女は自分の弟を優先させたい考えにあるのだろう。しかし、優先されるべきはこちら側だ。私闘なんていう学校としては理不尽極まりない行為を公式で行わせるよりも、もともとから訓練シナリオにあるソードとの模擬戦闘の

方が筋が通るはず。

「調整と打ち合わせなんて一週間もあれば大体終わらせることができると思いますけど?」

「ISとそちらのソードとやらでは互いに異なる面がある」

「調べましたが、そこまで対照的な違いはありませんよ。遅くても五日もすれば間に合いますし。それに決闘なんて、いわゆる『私闘』ですね? それを学園側が公式的に認めさせてしまっただけのことですか? 世間の目もありますよ。それならいっそのことソードとの模擬戦に変更すれば幾らかマシかと思いますが」

「……」

やはり、二十代半の彼女と三十路半のネイナとは考え方は違ったようだ。もちろん、副担任の山田も、ネイナの言っていることが正しいと口にしてしまう。

「織斑先生、最近だとマスコミも敏感になっておりますので――」

「うむ――」

本来なら、一夏を決闘でセシリアと戦わせてやりたかったが――ここで反対を突き通せば教員としての品格も堕ちかねない。仕方なく、千冬はネイナに従おうとしたが、

「待ってください! 私は、織斑一夏と戦いたいのです!!」

セシリアの方は一向に聞く耳を持たないようだ。そんな彼女にも千冬は「聞いての通りだぞ」というも、頭に血が上った彼女からして周りが見えていなかった。

「しかたないわねえ――じゃあ、うちの准尉が相手ならいかがかしら?」

ネイナがそう言いだすと、近くの彩夏は、

「じ、自分がですか!?!」

「当たり前でしょ? あの生徒さんに向かって結構なこと言っ

てたし」

「そうでしたっけ？」

キョトンと首を傾げる彩夏にキースが何度目かのため息をついた。

「お前、どんだけ天然なんだよ」

キースも彼の天然っぷりには呆れてしまう。

「その方——ええ、それでしたら構いませんでしてよ！ 男が何人掛かってこようと、私の敵ではありませんもの」

「あっそう——」

面倒くさそうな顔をする彩夏に、セシリアは堂々と涼しい顔をしながらこう続けた。

「そもそも、男なんて女性の足元で『働きアリ』のようにせっせと地を這いつくばっていればいいものを。そんな暇があれば、剣を意味するくだらない玩具なんて乗り回さずに女性のために尽くしたらどうですか？」

「今、何て言った……」

働きアリ？ ソードが玩具だって？ 幾ら年下の民間人とはいえそれだけは聞き捨てならない。

「兵器を、玩具呼ばわりか？ それに加えてISは何なんだよ」

「ISは競技、スポーツが主流ですよ。おわかりかしら？」

「どこの世にレーザーや実弾、ミサイルを用いた競技スポーツがあるっていうんだ！」

「はあ？」

民間人である彼女は、兵器がどれほどの威力を持ち、それを使って生じる代償について精神が追いついていないんだ。

こんな子に、武器を持たすのは危ない。いつか、必ずいつしか過ちを犯すぞ。

「そこの見習い代表生さん」

「み、見習いって——あなた！ つくづく重ね重ねに！！」

「いいよ、決闘を受けて立とうじゃないか。けど、勝敗後の約束も受け入れてくれるのなら君の私闘を受け入れるよ。どうだい？」

「あら、面白そうじゃありませんこと？ いいでしてよ、でも私がかつたら——」

「ああ、好きにすればいい」

「二言は無くて？」

「けど、俺が勝ったら……代表候補を辞退してもらおう」

「なっ！？」

さすがの予想外な条件にセシリアは目を丸くして驚いた。自分がどれほどの努力をもってして代表候補まで上り詰めたことか、この軍人はわかっていないようだ。感情的になって非難しだした。

「非常識ですわ！ この私に対して名誉を捨てろと！？」

「そればかりじゃない。君が負けたら、金輪際ISから手を引くんだ」

「な、何故そこまで——！」

ひどい仕打ちだと言うようにセシリアの顔からは焦りが見え始めた。

「代わりに俺が負けたら、君に命を差し出す覚悟を約束するよ」

「ッ！？」

本気の目をしていた彩夏の気迫に、セシリアは圧倒されてしまった。

つねに死と隣り合わせで生きてきた彩夏からして、命をかけて戦う事に躊躇なんてものはない。

「そ、そこまでするなんて——」

たかが、喧嘩というレベルだったはずが、こんな代償を求められる果し合いに変わってしまったことに、セシリアは反面後悔してし

まうことに。

「どうだ、オルコット。今ならこの決闘を取りやめても構わんぞ？」
静まり変えった教室で、千冬はそうセシリアへ問いかけた。

彼女も、彩夏が何を言いたいかは十分理解している。それゆえにセシリアへもう一度選択を呼びかけたのだ。

しかし、セシリアの心境は決闘を取りやめようとする意志を己がプライドが邪魔をして、言葉が言うことを聞いてくれなかった。

「い——いいですわ！ 織部彩夏、彼方からの決闘を受けて立ちましよう！！」

「本当に、いいんだな？」

「わ、私は本気でしてよ！ それよりも、自分の身を心配するのとね！！」

「……いいだろう、わかったよ」

「では、そうと決まれば一週間後、アリーナでオルコットと織部の決闘を始める。各自、万全の準備をしておくように！」

その後、休憩時間に大勢の女子が織部を心配する目で囲いだした。

「また、君達か——！」

呆れる顔をする織部に女子の一人が、

「ねえ織部さん、今からでも遅くないからセシリアさんにあやまりなよ！」

「どうして？」

「だって、代表候補だよ？ いくら軍人の織部さんでもISが相手なら勝てないよ？」

「それに、男が強かったのって随分昔の話だよ。男と女が戦ったら百パーセント女が勝つんだから——」

——こいつら、とんだ馬鹿か無知だな？

本当にIS学園の子達にはあきれてものが言えない。本当に倍率最高のIS学園を、よくそのオツムで入学できたものだ。

「君たちが言う女性が強いついていうのは、ISがあつたら話だろ？ 仮にISを所持していない女性が男性と戦ったらどうなるか知っているの？」

「それでも、女性が強いよ？ 権力とか法の力とかで」

「そんなの関係ないよ。殺すか殺されるかの瀬戸際で法だの何だのって関係ないって」

「そんな、大げさだよ〜！」

そういつて、周囲は冗談が過ぎると笑い飛ばしたが、一名だけ——当のセシリア本人は浮かない顔をしていた。

——やっぱり、後悔してんだな……

その後、これ以上IS関連の座学は終了し、一般学級の13教科が始まるとのこと。関係ないためにネオファリアの面々は仮設部署へ戻って各自の勤務につくことになった。

「あ、あの——？」

「——？」

通路の移動中に、あのポニーテールを揺らしながら、あの時の子が声をかけてきた。

「ああ、君はあの時の」

「その都度は失礼しました」

「ああ、別に皆同じ反応だったし君だけじゃないよ」

「ところでその——織部さんはよろしかったのですか？ あのような……」

「そうだね、常に命を懸けて働いているからそういうのが当たり前みたいになっているからさ」

「しかし、命までって——！」

「まあ、そこまで気にしないでもいいよ。セシリアっていう女の子だって本気じゃないんだしね」

「織部さーん！」

すると、彼の元へもう一人。箒の隣まで駆け寄ってきたその人物は、

「たしか、織斑君だったね？」

「はい、その——」

一夏は緊張したようすでこういう。

「もし、昼休みににそちらもお暇でしたらいいんですけど——ソードについてお聞きしたいと思って！」

すると、そんな彼とは反射的になった箒が、

「な、ならん！ お前は私と道場で共に竹刀を振るう約束をしているはずだぞ」

「え、ええ！？」

したはずなのに——そんな彼女をみる一夏を見て、隣にいたネイナは、

「だったら、あなたも一夏君と一緒に昼休み私達の所へ行ってみない？」

「え、い——いや！ 私は……」

赤くなる箒を見て、ネイナは直ぐに見抜いた。彼女は一夏に対してとても拘束の激しい少女であるようで、空いた時間は好きな一夏と二人きりでいたいという願望が強いのだ。

「お茶とか出すけど、どうかしら？」

「ああ……では、御言葉に甘えて」

その後、昼休みに一夏と箒がすぐにも仮設部署へと向かって足を運ばせていた。

「あ、あれだ！ 箒、早く早く！！」

一夏は大はしゃぎでネオファリアの仮設部署にむかって駆け出した。

「全く、ソードのどこがいいのだ……」

自分を一向に見てくれない彼にボソボソと愚痴りながら彼の後に続いて仮設部署の玄関前まで歩きつくと、

「ああ、いらっしやい」

と、キースが出迎えてくれた。

「ああ！ 確か、彼方もソードのパイロットで——キースさんでしたっけ？」

「ああ、彩夏から聞いたが、ソードが好きなんだって？」

「だって、あんなカッコいい人型兵器に乗って戦うって時点で惚れ惚れするっていうか、主役っていうか、ヒーローっていうか——」
そんな憧れで興奮する少年を見て、キースも悪い気はしないし、むしろ誇らしくなる。

「それなら、近いうちに実技講習でソードの実物を見せてやろう。今日は生憎だが、一通りのデータなら見せてやるよ」

「い、いいんですか！？ ありがとうございます！！」

「一夏——」

早いところ終わらせろというような目で彼を見る箒だが、キースのは「あがれあがれ！」っていう言葉に、

「んじゃ、お邪魔します！」

箒の片手を引っ張って、一緒に部署の室内へ入ったのだ。

「一夏、他の方々の邪魔にならない様はしゃぐんじゃない」

困った奴だと子供をあやす母のように、箒は興奮する一夏の後ろからため息を漏らした。

「あら来た来た！ 彩夏、ファンの子達が来てくれたわよ」

デスクから顔を覗かしたネイナは、彩夏がいる休憩室の方へ振り返って彼を呼び出した。

「あ、よく来たね」

「お忙しい時間帯に招待してもらってすみません」

と、箒がネイナに頭を下げるが、

「ああ、別に気にしなくてもいいのよ！ これも好きでやってる仕事なんだし、それよりもお目当てのソードのデータだったら――」

そういって、彼女は携帯端末を手に取ると、その画面からホログラム映像が表示され、二体の人型機動兵器が表示されたではないか。白と青で彩られた機体と、青で統一された機体、どれもヒロイック的デザインで一夏からすればドツボにハマったことだろう。

「すっげえ！ 本当にかっこいいな？ あ、これってパラメータ――と武装一覧のデータも表示されている！！」

ホログラムのデータにアップで迫る一夏を見て、純粹にソードが好きなんだとネイナは思った。

「ハイペリオンとタイラント改――このタイラントっていう機体は確か白騎士事件で、あの白騎士をあと一步まで追い込ませたっていう有名な機体ですよね！？」

「まあ、あと少しってところで機体とパイロットに異常が出ちゃったけどね」

「凄い、ISとは比べ物にならないくらいエネルギーゲインだ！ ハイペリオンっていうこの機体、タイラント改と比べて量産計画の試作機でしたよね？ エネルギーもタイラント改と比べて約3、6倍、両肩にあるSEジェネレーター式ビームガトリングカノン――ネイナさん、そういうえばハイペリオンの主要兵装ってもうそろそろできるんですよね？」

「主要兵装――ああ！ SE式ビームアックスのことかしら？」

SE式ビームアックス、それはハイペリオンの真の主要武器である。ハイペリオンは試作機とはいえ後方支援から、強襲、局地戦まであらゆる戦術に適した量産型試作機ならではの機体であり、特に接近戦を主要とする機体でもある。

よって、ビームサーベルが副兵装となり、後に装備されるSE式ビームアックスこそがハイペリオン本来の主要武装であるのだ。

「やけに、賑やかだな？」

すると、二階から此方へ階段を下りてくる篠ノ之慈司令の姿が見えた。先ほど、ようやく苦手なデスクでの書類整理を終えたところで一息つきに休憩室へ赴こうとしたところ、下から聞こえてくる声に反応して様子を窺いに来たのだが――

「ああ！ ほ、箒――こっちにいる箒よりも、でっかい箒が……」

と、一夏は慈のきつそうに張りつめた制服越しの胸元を見ながら、意味の分からないことを言うのと、

「なんだ一夏！ その訳の分からん言い回しは――あっ」

「ほ、箒――か？」

目を丸くして、自分とそっくりな容子の少女を見つめると、暫くして表情を険しくさせて、

「箒い〜？」

ゴゴゴゴゴゴと、どす黒いオーラと共に慈は両手の指をヴオキヴオキ！ っと鳴らしては彼女を蛇に睨まれた蛙状態にしてしまった。

SCENE 5 「蒼い雫」※修正

「ね、姉さま——！」

「箒、貴様あ何故この学園にいるのさあ？ 詳しく十文字以内で簡潔に説明いたせ！」

彼女が最も苦手とする身内に遭遇した箒は、

——やばい！

自身の第六感が身の危険を警告している。

「すみません！ 急用を思い出したのでお先に——」

そういうと、彼女は仮設部署から外へ飛び出すように走って出ていったのだ。

「待て箒ッ！」

部署から出た箒を、豹のごとく追い詰めて、部署手前でその後ろ襟をとっつかみ、こちらへ引き寄せると、

「この馬鹿者ガア——！」

と、彼女の脳天チョップが箒の頭上へ振り下ろされた。

「ッ——！！」

両手で頭を抱えながら、慈のチョップに苦しむ箒は恐る恐る慈を見上げた。

「ね、姉様……」

気まずそうにしている箒と両手を組んで立腹の慈司令の対峙に、慌てて部署から飛び出してきた彩夏たちは何があったのかわからず、遠くから見ていた。

「貴様、どういうつもりだ？」

「ど、どう言うつもりとは？」

「ふざけるな！ IS学園だけには決して入るなど、あれほど私

が注意したではないか」

「ね、姉さまこそ遠距離の別居生活でろくに連絡もしないし、それどころか二年前から突然行方を絶ってしまうので、心配したのですよ？」

そう言い返すも、慈は正当な理由で倍返しに言い返した。

「お前の入学先や安心して暮らせる地域を用意してやるのに多忙だったのだ！ それを貴様ときたら、勝手にIS学園なんぞに入りおって……」

「織斑先生が——千冬さんが、IS学園へ入れば安心だと入学させてもらったんです」

と、彼女から視線をそらしてボソッと箒が答えた。

IS学園にいる際、生徒や関係者は国家や組織などといった外部からの力や拘束からは一切受けけないという、学園の法で守られるのだ。

しかし、慈の言っていることはそこではなかった。

「私が言いたいのはそこではない！ 確かにIS学園へ行けば入学期間中、外部からの魔の手から身を凌げることができるかもしれないが、逆に、奴、から余計に目を付けられること請け合いだぞ」

「あの人とは関係ないじゃないですか……」

「あ奴の身勝手な行動で——父様がどれ程ご迷惑になられているのかわかっているのか？ そんな奴に肩入れするようなことをお前はしているのだぞ」

「ッ——！」

そこまで言われると、箒は慈に言い返せぬと目をそらしてしまった。

そんな妹を見て、慈はため息をついてから頭をボリボリかき回しつつことう続けた。

「——こうなってしまった以上は仕方がない。もう一度あ奴と行き会うことになると思うが、その覚悟も決めておくか……千冬なんぞは当てにならない。何か困ったことがあれば姉である私に相談しなさい」

そういうと、慈は箒を連れて部署へ戻ってきた。

「大変お見苦しいところお見せしたようだ。申し訳ない、実技中や一組と接する場合の際、何かと末の妹が迷惑をかけてしまうかもしれないが、その時はどうか……」

ネオファリアの面々に申し訳なく深々と頭を下げる慈を前に、一部始終を見た周囲は彼女を「怖あく！」的な顔で見ているのだが、その中で彩夏だけは、「司令は優しい人だな」という顔で彼女を見つめていた。確かに怒ると怖いのが、それでも彼女からはしっかりと箒に対する愛情が感じられていた。

「しかし、慈に末の妹がいるとはなあ？」

キースは彼女の下に三人目の姉妹がいるなんて初耳だった。

「別に隠しているつもりではなかったのだが」

「そうか……そうなのか」

「……ひょっとして、篠ノ之束のこと？」

ついネイナがその名を口から漏らしてしまった途端、

「違うッ！！」

「——？」

さっきまで大人しくしていた箒は急にその名前を否定しだしたではないか。

「私は違う！ 私とあの人とは関係ないんだッ！！」

そう発狂してしまう箒はついに耐えられず、その場から走り去ってしまった。

「こら箒ッ！」

呼び止める姉の声を振り払って彼女はそのまま校舎の角へ消えてしまった。

「まったく——本当にああいう愚妹で申し訳ない。アイツの話をすると、ついあぁなってしまっんだ」

「気持ちはわからんでもない。俺は別に気にしねえがな」

「あの——司令」

すると、キースの隣に立つネイナは彼女に訊ねた。

「どうしました、博士？」

いつも以上に真剣な表情を浮かべるネイナに、慈は目を見開いた。

「お尋ねします。司令の妹さん、次女の御方は……篠ノ之束というお名前で間違いないのですね？」

「ッ……」

彼女にそう問われた慈は、表情を暗くして俯いた。その顔からは罪を代わりに背負い続ける篠ノ之家長女の悲しい瞳が見える。

「ネイナ、お前さんの気持ちも十分わかるが、彼女の前でその名前はあまり言わないでやってくれ？」

前々から付き合い合の長いキースだからこそ篠ノ之家の詳細はちゃんと理解しており、同時にネイナについても彼女が篠ノ之束を激しく嫌っているのもわかる。

キースは、仲間の事情や過去を重んじて当たり障りのない接し方を大切にする下士官なのだ。

「そう——なの」

束のことを「酷く嫌っていても、さすがに司令の前では口と態度が過ぎたと思い、

「大変失礼しました。以後、気を付けます」

頭を下げるネイナだが、慈はそれを潔く受け入れてくれた。

「いや、当然言われてもおかしくないので、お気になさらず」

慈は笑んだまま気にしなかった。

篠ノ之家の長女として、篠ノ之束の罪を背負って生きていくことを受け入れるしかない。彼女はこれまで束の影響で多くの人々から憎まれながら生きてきた。

——そうなのか、この人がやっぱり……

司令が束というISの開発者の身内、彩夏は複雑な心境よりも実感がわかずにどうすればいいのかわからなかった。

ISに関しては軍事の講習を除いては知識等に一切興味が無いため、篠ノ之という苗字が単に珍しい姓だとしか思っていなかった。綺麗で憧れる司令官のお姉さんという見方だった相手が仇の身内とは……

「……」

少し、落ち着くために彼は先に休憩室へ入った。

「准尉？」

先に部署へ入っていく彼の様子が気になり、声をかけようとした慈だが、

「司令——慈、よせ」

と、キースが彼女の肩を掴んで止めに入る。

「具合でも悪いのか不安だ。ソードを駆る若手のパイロットだしな」

「それ、単なる言い訳だろ」

彼の視線が冷たく彼女を見た。その様子からしてこちらへ一言言おうとしている目つきだ。

「何が言いたい？」

険しい表情になる慈に、キースは彼女の心を読み当てるかのよう
に淡々と言いだした。

「准尉は、織部はな……」

*

「あんな兵器、非常識ですわッ！」

寮のPCから調べたソードの詳細な機体情報をくまなく調べていくと共に、代表候補生である彼女の経験と知識から出した結論としては、ソードは極めて恐ろしいハイスペックを所持したオーバークテクノロジーの塊であることを知った。

特にSEシステムと呼ばれる推進機能はパイロットの腕次第で時空を歪めてしまうほどの強大なエネルギーを有しており、それによって次元や時空を破壊しかねない恐るべき兵器——否、破壊兵器である。

これまで、ISが最強の兵器と思い込んでいた彼女からして、まさかの天敵が出現したことに心が絶叫してしまう。

「どうすれば——でも、ここで降参するわけには……」

どうすることもできずに、ただひたすら悩みこむ彼女であったが

——
コンコンッ——

彼女の寮の部屋をノックする音が扉から聞こえてきた。

「あら——誰ですの？」

席から立ち上がって、扉へと向かうが——

「……？」

一瞬、何かよからぬ予感が扉の向こうから漂い始めた。

——いったい誰ですの？

戸惑うも、再び扉のノックが聞こえてきた。

きっと、ソードのことで心配性になったからそう思ってしまうだけだと、彼女は思い込んで自身の感じる予感なんて振り払い、扉を

開けてしまった……

日にちは過ぎ去って、決闘当日を迎えた今日。

アリーナでは決闘相手の彩夏とハイペリオンを待ってカタパルト前から専用機ブルー・ティアーズが待っていたが、

「……」

無言無表情のままセシリアは立ち尽くしているだけだった。周囲の整備班の生徒らが気にかけて声をかけようとするも、彼女からは近寄りがたいオーラが漂い始めていたのだ。

「どうしたんだろう？ セシリアさん」

「本番前の精神統一かも？」

「でも、なんだか近寄りがたいオーラでいっぱいだよね」

「さすがは代表候補に選ばれた人だけあるよ！」

これなら、セシリアの勝利も過言ではないと思っており、彼女を後ろから機体の眼差しを向ける整備課の少女らであったが、そんな彼女たちの耳元へとソードの登場を知らせる放送が流れ出した。

彼女立は外を見上げると、上空には全長二十メートル近い巨大な人型兵器の姿が見えた。

「あれが、ソード？」

上空から地上へ飛来するその青で統一された機体は実に優雅で美しい姿だという印象をISの生徒たちにも印象付けたのである。

『最終調整、それでよろしいかしら？』

機内の全面スクリーンからネイナの姿が映し出される。

「はい、どこも異常はありません」

「ねえ……：：：：：准尉？」

「はい」

すると、不安な顔でネイナはこう尋ねる。

「セシリアさんに言った条件、本気なの？ もし勝ったらISから手を引けなんて言うから」

いくらISを敵視している彼女でも、十代後半の少女に代表候補を辞退してISもやめろと言われた彼女を見て、凄い動揺をしていたためにセシリアに対してわずかな同情が見られた。

「ああ、それですか？ すこし、反省してもらいたいために言っただけですよ。あの子に勝った後、容子を見て判断しようと思いませんので」

「彼方が負けたらどうするの？」

「負けませんよ。ネイナ博士のソードを信じてますんで」

「ふふ、そうよね？」

すると、しばらくしてアリーナのフィールド上空にブルーティアーズという青と白で分けられた彼女の専用機が現れた。

「あれがブルーティアーズ（青い雫）か……」

データを見たが、ビットと呼ばれる浮遊砲台を用いたオールレンジ攻撃と、スナイパーライフル「スターライトマークⅢ」を用いた遠距離射撃という、重兵器を用いたタイプの機体だ。

「やっと、現れましたわね——」

しかし、彼女のその声はいたって冷静沈着そのものであった。さすがは、代表候補とだけあってエリート風格はしている。

——しかし、どこが妙だと彩夏は思った。様子からしてそう思われるが、どこか強い邪に近いオーラがあふれ出ているように感じられる。

「この気配、ただ物じゃない——？」

それを感じた彩夏は全出力を最大限にして取り掛かった。

「あれが、ソードか——！」

観客席からあふれかえる女子生徒たちに交じって、箒と共に観戦

している一夏は、その雄々しい巨大ロボットの姿に惚れ惚れしていた。

そんなI Sとソードが対峙する緊迫した状況下で、彩夏の元へセシリアの通信が入ってきた。

「いま此処で許しを請うなら全て許して差し上げてよろしくですよ？」

「……」

だが、その呼びかけを無視した彩夏は「ネイナ博士！」と、ネイナへ通信を入れた。

『ええ、ちょうどアップロードできたわ。受け取って！』

ハイペリオンの右手に転送された武装が握られる。巨大なビーム状の刃をはやした斧であり、それを両手でぎっしりと構えだした。

ハイペリオンの主要兵装、SE式ビームアックスがそれである。

アックスを構えるそのハイペリオンの姿がセシリアに対する答えであった。

「そう——では、容赦はしませんわよ！」

ブルーティアーズから大型スナイパーライフル、スターライトマークⅢの銃口が向けられる。

「いくぞ、ハイペリオン！」

低空で浮上したハイペリオンは、そのまま高速でセシリアが纏うブルーティアーズへ突っ込んでいった。

「踊りなさい！ブルーティアーズが奏でる美しき円舞曲で！！」
スターライトマークⅢの銃口から凶太いビームの柱が放たれた。

「くっ！」

それを予測して交わした彩夏は、ブルーティアーズの周りを散開する形で徐々に距離を縮めていこうとするが、それをさせまいとス

ターライトマークⅢに加えて浮遊砲台のビットの群れのオールレンジ戦術がハイペリオンの行く手を阻んだ。

「もう少し、速度を上げて——！」

はならかされたハイペリオンは、さらに質力を上げて、地を這うように超低空で加速を始めた。早めた、ハイペリオンが行き去った地面からビームで直撃した激しい土煙が次々に立ち上がって行くも、その照準は未だ定まらないままハイペリオンを捉えられないでいた。

「凶体のでかいわりにちょこまかと——！」

そのとき、スターライトマークⅢの段数が一時的に止まった。

「今か！」

リロードする時間を見計らってスラストを最大限にし、ビットの弾幕を一瞬で追い越して、ブルーティアーズの直前まで攻め入った。

「くらえっ！」

「まだですわ！」

そのとき、ブルーティアーズの機体から二発のミサイルが放たれる。この至近距離では、お互い爆発に巻き込まれるのを承知なのか？

上空に黒煙が広がった。

「これで、ダメージを……！」

ブルーティアーズの防衛シールドは約半数を削られた。しかし、これであの人型兵器にも重傷を負わせられたはず——

「ッ——！」

しかし、黒煙を切り裂く二つの眼光が彼女を睨みつけた。消え去った煙から姿を現したハイペリオンは頭部のビームバルカンで反撃に出る。

彼女の悲鳴がアリーナに響き渡ると同時に、ヒラヒラとブルーデイズが地面へと墜落した。

セシリアのシールドはビームバルカンの至近距離射撃によってゼ口にまで削られてしまった。

これで、彼女の敗退は呆気なくも勝負がついたのである。

「す、すごいですね——織斑先生」

管制室の内部より、山田は驚いた様子で千冬へ訊ねた。仮に自分だったらソードを敵に回したくはないという顔をしている。

「うむ、しかしあと少し射撃が長引いたらセシリアは完全にミンチになっていたことだ。それをうまく調節できたのはパイロットの技量のような。恐ろしすぎる力だ、ソードとは……」

腕を組んで、ソードを睨む千冬はアイツの標的、目の敵にされないことを祈るばかりだ。

「こ、こんなところで——！」

それでも立ち上がる彼女は、ふたたび手元から地面に転がるスタ—ライトマークⅢへ手を伸ばそうとするが、

「もうやめろ。お前は十分に戦ったんだ。それでいいじゃないか？」

地に降り立ったハイペリオンから彩夏の声が聞こえた。

「認めません——認めませんわ！　こうも、あっけなくこの私が敗退を喫するなんて……」

これじゃダメだ。もっと、自分に力が欲しい……！！

——もっと……！！

自分に残されたものはISに乗ることだけ！　それを取られたら、他に残る者なんてない！　これまでの全てをISに捧げてきた自分にとって、これ以上大切なものが取りあげられるのだけは嫌だ！

幼い頃に父を亡くし、母を亡くし、次に唯一の心のよりどころであったISをなくすのだけは絶対に——！！

「これ以上大切な物を取られたくないのおーッ！！！！」

怒り悔しさに叫びあげる彼女であったが——

ドクンッ——

「ッ!?!」

突然、心臓の鼓動が高まりだした。それは緊張によって生じる者よりも体内から湧き上がる熱い何かのエネルギーが自身の心臓を高鳴らせている。

——な、何ですの!?!

それは突然起こった激しい鼓動と共に体内をとてつもない強い何かの感覚が駆け巡りだすのだ。

そんな状態を抑えきれないことはできない。この感覚は何なのか、突然起きたの自身の身の異常に恐怖を覚えた。

「い、いや——!」

それはついにブルーティアーズにも異変が生じてしまう。その白と青の色合いは黒く変色し、ISという輪郭が粘土のように崩れ落ちて、装着者であるセシリアへ波のように襲い掛かったではないか。

「い、いや——たすけっ」

「セシリア!」

とっさに、ハイペリオンの片手が彼女へ手を近づけさせようとするが、それも遅かった。

彼女を飲み込み、粘土のように変異したブルーティアーズはその姿を変え始めたのである。

巨大な翼、に爬虫類を思わす生命体を象ったその姿に再び青と白の色合いが復活する。

青と白で彩られたドラゴンの姿へ変わっていた。それも大きさをハイペリオンに近い身長を誇っている。

「な、何だコイツは!?!」

別の管制室から見ていたキースとネイナはブルーティアーズの豹変に酷く驚かされた。

「ブルーティアイズにISとは違う未知のエネルギーが集結している!？」

それは、全くもって彼女からも見覚えのないエネルギーであった。

「例のVTシステムってやつじゃないのか!？」

「違う、それよりもさらに恐ろしいほどの強大なエネルギーよ!

このままじゃ、セシリアさんが危ないわ!！」

「彩夏! 彼女を無力化できないか!？」

キースが無線からハイペリオンへ叫んだ。

「し、しかし——どうすれば!？」

此方と対峙するドラゴンを前にどうやって——

「解析終わったわ——准尉、ドラゴンの腹部が見えるかしら!？」

「腹部——あれは!？」

ドラゴンの腹部には黄色い半球の埋め込まれており、そこにセシリアが蹲っている。

——まさか、セシリアはISに取り込まれてしまったのか!？」

途端、ドラゴンに変異を遂げたブルーティアイズからは、どす黒い独占欲と凶暴な殺意を感じ取った。

そんな気配が敏感になる彩夏からして、まるで今のブルーティアイズは、セシリアの欲望が具現化し、その力が自身の合理的判断によってさらなる力のために主であるセシリアを取り込んでしまったのだと確信した。

「……よし、やってみます!」

彩夏は返答後、ドラゴンに向かってアックスを構えた。

「ギアアッー!!!」

叫ぶドラゴンは口内を開けて、青い光のブレスを吐き出した。

「ッ!」

ブレスは広範囲でハイペリオンへ襲い掛かる。これでは満足に近

づくこともできない。

ハイペリオンは、頭部よりビームバルカンを打ち放ったが、それを二枚の両翼を胸元前へ重ね構えると、その翼の翼面にビームバルカンの光弾は弾かれてしまう。

直をも襲い来るブレスを交わして、SEジェネレーター式ビームカノンで一気に決めようとしたが、

「威力が強すぎる——！」

このままではセシリアもろともドラゴンを撃破してしまう。

「——こっちについてこい！」

ハイペリオンはバーニアを全開に、高度上空へと垂直に上昇し始めていく。

「ギィ——！」

ドラゴンも、逃すまいと上空へ逃げたハイペリオンを追って、その巨大な二枚の翼を羽ばたかせながら上空に向かってとびだった。

上空から何発ものブレスを吐き散らすドラゴンであるが、アリーナと比べて範囲の限られていない空なら思う存分ソードのドッグフアイトを生かせられる。

「やめるんだっ、セシリア！」

ブレスを交わしながらドラゴンの周りを旋回し、必死に彩夏はドラゴンの腹部の中で蹲る彼女へ呼びかける。

「こんなの、人のする戦いかたじゃないよ！ もう、こんなことはやめるんだ——！」

しかし、一向にブレスを吐き続けるドラゴンは、彼に聞く耳を持つてくれない。

「織斑先生！ あれって——」

「ああ、しかしVTシステムよりも強いエネルギーだ。これは一体？」

ISに携わる彼女たちでさえもこの現象に関しては理解できなかった。

そして、そのアリーナより離れた学園のオブジェである鋭い塔の周りから、こちらの状況を宥める一人の人影が。

それは、黒いフードを被った一人の少年であった。

「やっぱり単純だな——あのセシリアっていうの、代表候補って意気ってるわりには呆気なく、『オリジス』のシステムに取り込まれてんじゃない。ザコ感ありすぎ」

だが、続けて「でもまあ——」と少年は続けた。

「例の組織共にコイツの実験台になってもらうのが楽しみだな。

どんな醜い姿に化けるのか、さぞ見物だねえ」

と、言い残して彼はアリーナから背を向けると最後に、

「それまでの間は、あのソードとやたらに頑張ってもおうか」

少年の身はその場からフツと消え去った。

セシリアのドラゴンは、今もなおブレスを吐きながらこちらへ近づけ冴えまいとしている。速度を上げて背後へ回り込もうとすると、とっさにこちらへ腹部を向けてくるではないか。

「目を覚ませセシリア！ その機体はISの影も形もないただの化け物だ」

「ッ！」

一瞬、ドラゴンの動きが鈍った。

「動きが鈍った——？」

先ほどの言葉に反応したのか？

——やってみるか……

彩夏は意を決した。ハイペリオンはアックスを構える両手を下ろすと、無抵抗のままドラゴンへ近づく。

「あいつ！ 何やってんだ!？」

キースが咄嗟に攻撃しろと彩夏へ通信を取るが、
「待って！」

ネイナに止められ、彼女のPCに映るドラゴンの体内エネルギー
反応の映像を見させた。

「これを見て、ドラゴンのエネルギーが徐々に低下しているの」

「どうして——？ これは……まさかネクストワンのちからか？」

キースは、忘れかけていたあの力の存在に気付いた。

「ニュータイプの力とネクストワンの力が中和しているのかもしれない——准尉を、信じましょう」

二人は管制室から彩夏のハイペリオンを見守った。

「——いまのコイツは、お前を単なる動力源として利用しているだけの化け物なんだ」

徐々に距離を近づけるハイペリオンに対し、ドラゴンはひるみ始めたではないか、それは腹部に封じ込まれているセシリアのドラゴンに対する必死の抵抗かもしれなかった。

「人を利用するだけの心無いマシンに、これいじょう取り込まれ続けていたら、本当に人じゃなくなってしまう」

すると、自然と彼の心から誰かの声が響いてきた。頭の中から響いてくるように聞こえるその声は、セシリアだった。

『この子は私、私もこの子、この子はもう一人の私——』

「ちがう！ そいつはもう一人のお前なんかじゃない。お前をただの部品、道具として利用しているだけの残忍で冷酷な機械だ！
それは、人と共に歩むはずの機械なんかじゃ決してない！！」

『あの子が——ちがう！ あの子はもう一人の私、私の唯一の家族なの！！ この子には私が必要なんです』

「お前を必要としてくれる本当の家族は他にもいるはずだよ。今は一人だったとしても、あきらめない限り絶対に人は孤独なんかじ

やない。今までISだけで生きてきたわけじゃないだろ？」

『ですけど——！』

「……執事やメイドの人たちも、生きてくれていた大切な家族として君を見ているはずだよ——」

『どうして——？』

両親は鉄道の事故に遭い死んだ。それまでのあいだ、自分は孤独だった。家にいる家中の人間達も信用できず、唯一の心のよりどころがISだった——

「わかるよ、君には両親がいない。俺も君と同じで両親がいないんだ——それでも、あきらめずに前へ歩き続けていけば、自分は孤独じゃないことに気づくことができるよ。何よりも、セシリアの周りにはまだ大切な人たちがこんなにもいてくれるんだ。冷酷なマシンに心を預けずに本当の自分の居場所へ戻るんだ！」

「さい、か……さんっ」

ドラゴンの半球に蹲る彼女は、俯かせていた顔をゆっくりとあげて彩夏の名を唱えた。その瞳には大粒の涙が頬を伝わり、両ひざを抱える両手の片方がハイペリオンへ伸ばした。

「たす、けてえ……」

「ギャアアアア——！！！」

ドラゴンは、目覚めたセシリアの意識によって激しく呻き苦しみだした。

「今だッ！」

再びアックスを掲げると、そのビーム状の刃がドラゴンの両翼と斬り裂き、トドメにその頭部を斬り飛ばした。

飛行能力を失ったドラゴンの体は、そのまま重力に引かれるがまま落下し続ける。

「セシリアア——！！！」

落下するドラゴンの体を受け止めるハイペリオンの姿を最後に、意識を取り戻したセシリアは、再び深い眠りについた。

*

それから数日後、セシリアは無事に復帰できたことで再び教室へ戻ってこることができた。

何はともあれ一件落着と思われる中、昼休憩にアリーナでソードを展開して整備に入っている彩夏達のところへ彼女が訪ねに来た。

「お忙しいところ、申し訳ありません——」

「セシリア？」

ハイペリオンの足元まで歩み寄ってきた彼女をコックピットから見下ろす彼は、リフトで彼女の立つ地上まで降りた。

「どうしたんだい？」

「この前、助けていただいたお礼を申し上げたくて——それと、失礼な態度を取ってしまったことに対しての謝罪も……」

「ああ、別に気にしてないからいいって」

「ですが……」

「それよりも、これからどうするんだ？」

ブルーティアーズは彩夏のハイペリオンが容赦なく壊してしまっ
たし、今後はセシリアの母国であるイギリスも彼女に関してテンテ
コマイになるだろう。

「もう一度、真剣に自分と向き合ってみようかと思うんです。そ
のためにも、一度イギリスの実家へ帰ろうかと」

「そうか——とりあえずはしばらくのお別れか」

「ですが、もう一度彩夏さんの元へ戻ってきたいと思います……
それと、本当に危ないところを、ありがとうございました」

「気にするな。それよりもせっかくここまで来てくれたのに――
部署へ行くかい？」

そこならセシリアの好きな紅茶もある。

「いいえ、今日はその――お礼を言いたくて」

「また、日本へ遊びにおいでよ。いつでも歓迎するし、俺の所へ
訊ねてくれたなら観光案内ぐらいするよ」

優しく彩夏が微笑むと、そんな彼に顔を赤くしたセシリアは、

「ありがとうございます！ あ、あの――あのお方にもお礼を言
ってもよろしいですか？」

と、セシリアはスツとハイペリオンへ掌を向けた。

「ああ、そう言ってくれるとハイペリオンも喜ぶよ」

すると、セシリアはハイペリオンの足元まで歩み寄ってくと、そ
の白い両手でハイペリオンの踝の部位へそっと両手を添え、

「助けていただき、ありがとうございます。ハイペリオン様――」
彼女の唇が、ハイペリオンの踝にそっと触れた。

するとどうだろうか、突如ハイペリオンの機体に備えられた各ダ
クトの穴から機体の熱した蒸気が勢いよく噴射されたではないか。

ちなみに彩夏はコックピットには載っていない。

「あ、あれ！？ ハイペリオンがオーバーヒートしちゃった！？」

近くでPCをいじるネイナは仰天した顔でハイペリオンへ振り返
った。

SCENE 6 「慈」

セシリアの一件からしばらく経った後、ネオファリアの面々……
といっても、主任と二人のパイロットとが歓迎会が開かれた。その
他の整備班のパイロットは定時になったらすぐに帰宅してしまっ
たり拒否したため、しかたなく主な三人が呼ばれたのだ。

「きょうは、ネオファリアさんたちの歓迎会なんですから！ 思
う存分楽しんでくださいね？」

「あ、ああ——」

キースはあまり乗り気じゃなかった。夕飯や菓子を食いながらキ
ャッキャツするのはまるで女子会同様、ネイナは同姓ゆえに皆に合
わせて楽しんでいる。しかし、一方の彩夏と隣に座る一夏ははじめ
てなのか少し緊張気味であった。

「そういや、セシリアの奴どうしたんだ？」

一夏は今日からいなくなった彼女の姿をこの中から目で追って
いた。

「セシリアなら国へ帰ったそうだ」

と、キースの発言に一夏は驚いた。

「え！？ どうして——」

「いろいろとな？ まあ、いづれはこっちに帰ってくるだろうけ
ど」

そんな二人の前から一瞬の眩いフラッシュがたかれる。

「どうも、新聞部の黛薫子まゆずみです！ インタビューとかよろしいで
すか？」

「ああ、どうぞ——って、新聞部？」

隣の一夏は首を傾げた。

「記事のタイトルは、『IS学園にソード飛来！』っていう名前で書かせてもらうんですけど」

「ああ、別に構わないけど——」

彩夏が思うに黛っていう子は中立的な子のようだな。

「ところで、ソードについて聞きたいこととかあるんですけど？」

と、薫子が質問攻めで迫ってくるが、それだけは勘弁してくれと彩夏達は断った。

「すまないな、ソードに関しては公式範囲じゃないと答えられないんだ」

苦笑いしたままキースが言うと、

「一夏！」

不機嫌な足取りで箒が歩み寄ってきた。

「箒、どうした？」

周囲からチャホヤされているのを見て、焼きもちを焼いたのだろうと近くで見えていたネイナは察した。

「お前の専用機が明日にも来るそうさ。早いところ、それ関連の準備をしておけと」

「そうか！ それじゃ——ごめん、俺先に失礼するよ」

そういうと、一夏は箒と一緒に寮へ戻って行った。

「そういえば、織斑君のISって何なんだろう？」

一人の女子がそう言った。彩夏達は、一夏が専用機を与えられるなんて話は聞いたことがない。おそらく、男子専用機に調整された機体であろう。

「お、そうさ！ 言い忘れていたが——ってか、言おうか言わまいか迷うところだったんだな彩夏」

と、キースがここらで重要な話を持ち出してきた。

「別に仕事上の話じゃないから安心して聞いてくれ」

「はい、なんでしよう？」

「とりあえず、ここじゃないんだ——ネイナ、あとのことは頼むぜ？」

「ええ……司令のこと？」

「司令——」

その言葉にまた彩夏はうつむいた。

彩夏は、キースに連れられたその場を後にし、ちがうフロントへと移動して二人だけになった頃で、彼が話を始めた。

夕暮れ時の景色が一望できるフロアで、キースは彩夏が最近になって思い悩んでいることに関して話始める。

「——慈司令の件だが、言っただけの通りだが……わかっているな？」
背景の窓越しを背にキースは問う。

「はい——」

「俺も、言ったらいいのか迷ったが——お前のために言わせてもらう。篠ノ之慈、彼女は俺たちの御上であり、あの篠ノ之束を妹に持つ人でもある」

「やはり、そうなんですな」

しかし、そんな彩夏の顔は少し気が楽になった感じが見て取れた。セシリアとの戦いが切欠になったのだろう。

「司令は、今も悩んでいる。ハッキリ言って……彼女はお前のことが好きだよ」

「——へ？」

突然の衝撃に、彩夏は咄然となって、その口をポカンと開け続けた。

「何度でも言おう。慈教官は、お前のことが好きだよなのだ。
理由付きでな」

「――聞き間違いでは？」

「本人から直接聞きだした」

「そ、そんな――」

まさか、あの指令が自分のことを機になっていたなんて……

「しかし、お前の過去を知った途端に心が少し病んでな。とはいえ、お前を忘れることなんてできやしないとも言いだす。彼女も必死に悩んだ末……」

と、そこでキースは言い掛けた。

「どうしたんですか？ 大尉」

しかし、今からいう現実を彼が受け入れてくれるのならいいのだが……

「覚悟はできているか？」

と、彼は確認を求めた

「は、はい！」

どんな結末が待って言おうとも決して恐れないと、彩夏は覚悟を決めた。

「……織部彩夏准尉、この後貴様には慈の自宅へ行ってもらおう」

「……？」

その言葉は、さらに彩夏を唾然とさせてしまう。

「それは――どういうことですか？」

「彼女は彼女なりにお前さんと向き合いたいのだ。お前のことが好きだからこそ、一人の部下として、償いをしたいって言っていたんだ」

「そんな、必要なって――ないのに」

しかし、それを彩夏は否定した。

「確かに最初は心の整理がつくのに大変でした。けど、あの人も自分の身内のせいで数えきれない苦しみを抱えているのかもしれないな

いって気がするんです。

オーラが、あの人からそういった感じを受けてしまっています。確信っていうか、感といいますか、うまくは言えませんけど……」

そんな、根拠なんてないけどもそう感じてしまう。そんな曖昧でもあるも半信半疑でいる彩夏の言い分にキースは驚くように彼を見た。

——こいつ、まさか……

キースは驚く視線で彩夏を見た。正直言って彼にはネクストワンとしての要素が強く感じられるとネイナから聞かされたが、同時にニュータイプの素質も一層強く感じられる。

二つの力を持ち合わせているというのか——？

機械と人の両方と心を通わせることできる新種の存在……

キースはそんな彩夏の感知能力を恐る恐るであるが信じるとして、彼に次の話を語りだした。

「——准尉、お前のその感知能力を信じる上で話すがな。確かにお前さんの言ったように慈が学生の頃から多くの苦しみを背負ってきたのは『事実』なんだ。悔しいことだが、その時にはあの場に俺は居てやれることはできなかったよ」

今思い出しても本当に悔やんでしまう事だ。あの時早く送還指示が下されてもなお、断り続けながら長期滞在を継続していれば、彼女と『彼』のことは守れたのかもしれない。

「大尉？」

キース大尉は慈司令と昔からのなじみと聞いたが、それはずいぶん昔からの関係なのだろうか？ 彩夏は気になる耳元をキースの話へ傾けた。

「学生の頃からの馴染みでな、日本に越してきたところにジュニアハイスクールで、彼女達……と出会ったが、それからしばらくして白騎士事件が起きた。その後は、俺の家族あてに本国から帰国の

指示がきてね、仕方なくも心残りのまま国に帰った。その後から、ISの復旧と共に女尊男卑の風習が流れてきてな。多くの男たちが退職や差別による弾圧、自殺へと追い込まれていった。それによって、憎しみの矛先は篠ノ之束の姉である彼女に対して向けられていった。

酷いいじめを受けたそうだな。女尊男卑によって父親や兄弟を失った多くのクラスメイト達に囲まれて――口では言えないが、性的暴行や殺人まがいの行為などによる蛮行を毎日受け、精神が不安定な状態が続いた。それでも、唯一心の支えであったのが俺との手紙のやり取りと、親戚の少年が心の支えになってな、その子とはいくつか歳が離れていたがそれでも彼女の心を救ってくれる天使だったよ。うだ。それからお互いの離れた恋が始まって、俺も一旦は日本に戻って会いに行ったさ。親戚の子は棗なつめって言ってな、今生きているならちよūdお前ぐらいの年になっているだろうな。俺にも懐いた良い弟分だった。芯も強くて、コイツなら俺がいなくても慈を守ってくれるかもしれない。そう信じて母国のハイスクールへ帰ったが……そのあと悲劇が起こった」

キースは表情を曇らせては、その続きを話した。

「……慈がISのテロリストに巻き込まれた際、棗は彼女を庇おうとして死んだ」

「ッ！」

そこで彼は思った。自分に対して微笑んでくれる慈の眼差し、それは自分を棗と重ねているのだと。そして、彼女が自身に依存しかけていることを、

「それからISによって大切な人を奪われた彼女は、国連軍へ入隊後司令官までに上り詰めた。棗の分まで強くならなくてならないと、無理にでも自分を強がらせてな」

キースはここまでで慈の顔を語り終えた。

——そうだったのか……

お互い、ISの被害者なんだ。そのとき、複雑な心境を抱えていた自分が何とも情けなく思ってしまった。

「そんな日々が続いていた所で、お前とばったり出会ったんだ。彼女がお前を嘗ての棗と重ねて愛しく思っていることには変わりないだろう。しかし、お前もまた家族をISによって失っている被害者の一人だ。

ゆえに、恨まれる側である自分であれども、好きになった部下を相手にどうすればいいかと悩み抜いた末に、お前と真剣に向き合いたいと踏み込んだ考えをしゃがった。しかし、俺から言わせてもらうと、この誘いは乗るも乗らないもお前が決めればいい」

「自分が、ですか？」

「そうだ、お前が彼女のことを許せないっていうなら彼女の家へ行かなくてもいい。部下と上司という立場を割り切って仕事をするだけだ。しかし、それ以外の艦上があるなら好きにしろ。彼女の家へ向かうのもいい。すべては、お前次第だ」

「自分、次第——」

「話はそれだけだ。そら、パーティーに戻るぞ。パーティーが終わったら考えて行動しろ」

「はい——」

そういって、二人はこの場のフロアから女子たちが待っている食堂のエリアへと戻った。

しかし、大尉が言っていた理由付とは何だろうか？

*

時刻は午後七時を迎えた。篠ノ之慈宅は東京のとある住宅地の一角に佇んでおり、この辺ではごく一般の住宅である。

そんな自宅の居間に置いて、目の前にラップをした夕食が並べられているテーブルに顔を伏せながら誰かを待っているようであるも、それに耐えきれず眠りこくっている慈がいたのだった。

「ううー」

唸りながらも、額には大量の汗が浮かび、明らかに悪夢でうなされてる光景であった。

夢の中で、ふたたび過去の自分に戻っていた。

当時、遡ること彼女が中学生だったころだ。クラスメイトらに囲まれた慈は、着こなすセーラー服をびりびりに大きく破り捨てられ、面積の狭すぎるセーラーを纏った、裸体に近い姿をクラスの大衆に晒されると、テープでその全身をぐるぐるに縛り上げられ、体を自由を奪われてしまう。そして、そんな無抵抗な彼女を周囲から憎しみにまみれた幾度もの罵声飛び交ってきた。

『お前のせいで、俺の父さんは会社をクビにされたんだぞ！ 父さんがクビにされると、母さんは知らない男と浮気して逃げて、父さんは蒸発しちまった。おかげで俺は一人ぼっちだよ！！』

『――あんたのせいで、私のお父さんは空自をクビにされたのよ！ 誇りだった仕事を奪われたお父さんは、家で首をつって自殺したの。私の大好きなお父さんを返してよ！！ 人殺し！！！！』

『お前達のせいで、みんなの家族が滅茶苦茶にされたんだぞ！ 俺の兄貴だって、あんなに一生懸命に大学の受験頑張ってたのに、女子を優先するって言うバカげた理由で兄貴は合格を辞退させられちまったんだ！ お袋は俺たちを見捨てて父さんと離婚して、その父さんも仕事を解雇されちまったんだ。兄貴は自殺して、親父も兄貴の死で後を追うように死にしまった。親戚の少ない俺は中卒で生

きていくはめになったんだ……どうしてくれんだよこのアマア！！！！』

大勢からおびただしいの蹴りや暴行が拘束された彼女へ襲い掛かった。その痛みと悲しみは今も忘れはしない。

男女から乳房や下半身を火で炙られ、鈍器で体中を浴びるように殴られ、体中をおびただしく傷つけられた。それにたいして言える言葉は「ごめん——」の一言だけだった。

自分のせいで、自分の家族のせいでこんなにも多くの人たちを不幸にしてしまった。友人から大切な人達を大勢奪い、幸せを奪い、人生すらも奪い狂わせてしまった大罪を、妹に代わって姉である自分が泣きながらも償わなければいけなかった。

しかし、そんな生きる希望も失った自分にでも一筋が光を照らしてくれる人がいてくれた……

「ッ!？」

気が付くと、夕食が乗せられたテーブルの上で頬をつけながら眠っていた。起き上がって壁際の時計を見れば、とっくに夜の九時を過ぎていたのだ。

——結局、彼は来なかったか……

二人分の夕食をそろえておいたのが無駄になってしまったようだ。ラップで覆われた夕食の列を見るたびに、彼女は本当にバカげたことをしてしまったと自ら恥じだして、目頭を熱くさせてしまう。

「はははっ、本当に私は勘違いもいいバカな女だ」

彼も、かつての同級生と同じI Sの被害者だ。自分を憎んでいるに違いない——

知らずの間に彼女は涙ぐんでしまっていた。

「ッ?」

だが、そんな慈の耳元からは室内にわたって玄関から鳴り響くインターホンが聞こえてきた。

「——こんな遅くに？」

とっさに目に浮かんだ涙を拭いて、食卓を離れ、玄関へ向かった。やはり、キースが准尉は来ないと申し訳なさそうに伝えに来てくれたのだろうか。それなら、彼を誘ってヤケ酒でも飲むとしよう。

吹っ切れた彼女は、胸元のボタンをいくつも開けた状態で堂々と玄関の前に姿を見せたのだが——

「司令——」

「じ、准尉！？」

玄関には、来ないだろうと思っていたあの織部彩夏が経っていた。「夜分、大変申し訳ありません。できるならもっと早い時間帯へくるよう努力したのですが」

「い、いや——構わん。突然呼び出した私に非があ——きゃッ！」突然、女性らしい声を挙げた彼女は、自身のボタンが空きっぱなしだったのを忘れ、シャツから見える胸の谷間を彼の前にさらけ出していたのだ。

「す、すみません！」

「謝るな！ 私が悪い！！」

幾ら相手に悪気が無くても、見た男が悪いと決めつける、近頃の馬鹿な女を軽蔑する彼女は、とっさにそうムキに言いだしてはボタンをかいはじめた。

「失礼した。その、上がってくれ」

「ハッ！ 失礼します——」

とはいえ、緊張しないといったら嘘になる。彼は、ぎくしゃくした動作でありながらも、彼女に連れられて今のソファへ腰をおろさせてもらい、隣に彼女が座った。

「お席、失礼します」

「遠慮するな」

「大尉からお話は一通り聞きました」

「そうか——その、先に言っておかなくてはならないことがある。お前にも詫びなくていけない。知らなかったとはいえ、篠ノ之家の者がお前から大切な家族を奪ってしまったことについて、心よりお詫び申し上げます……」

こちらへ身を向けて深々と頭を下げだした。しかし、そんな彼女に彩夏も伝えたいことがあった。

「頭をお上げください司令、自分も司令にお伝えしたいことがあって参りました」

「准尉も？」

「……司令」

彩夏は、膝の上に両手を添いながら伝えた。

「——自分はISを憎んではおります。しかし、それが理由で司令に対して何らマイナスになるイメージなんてございません」

「しかし、私は同じ血統を持っている者なんだぞ？」

「……関係ありません。貴女は篠ノ之慈という一個人である以上、自分はあなたを恨むつもりなどいっさいありません」

「准尉——」

「それなら私は准尉——いや、織部君に思い切って伝えたいことがある」

「伝えるとは？」

「織部彩夏」

真剣な真顔で見つめる彼女に、こちらもついピシッと背筋を伸ばした。「は、はい！」と答えると、慈は微笑んでこう言い渡した。

「現時刻を持って、貴様は——私だけの准尉になってもらいたい」顔を赤くしながらそう言い寄る彼女に彩夏は首を傾げたまま放心状態になりかけていた。

「は？ えっと——つまりその」

「お前は、私だけの部下だ」

そういうなり、彼女は自身が来ているそのシャツのボタンを外しだして、さらにはスカートも脱ぎだしてしまった。そこから見える白い柔肌が露わとなった。胸元からは白いブラが見え、ストッキングに包まれた美脚と同色のパンツが目立った。

「し、司令ッ!？」

それに対して顔を真っ赤にした彩夏は混乱状態に陥るが、そんな彼に迷いなくソファへ押し倒そた慈は、切なそうな瞳で彼の瞳へ迫った。

——司令、胸が俺の胸に押し付けられて……!!

「私はもう司令ではない」

「——？」

「実はな、今日から司令の任を下ろされてお前達ネオファリアを膝元に置く担当士官へ回されたのだ。これからは一々学園から基地までとんぼ返りせずとも楽な形になったんだ」

「担当主任、でありますか？」

「そうだ、だからこれからはいつまでもお前の近くにいることができる——迷惑か？」

「そ、そんな！ 迷惑だなんて……」

彼女のそのクールな顔が、次第にとろけた顔へなっていく。そんな彼女を見てパニックになっていた彩夏は途端に冷静さをとりもどした。そして、彼女に向かって申し訳ない顔を向けてしまう。

シャツの間から見える彼女の傷が彼の視線を引き付けたのだ。

「司令——じゃなくて……」

「篠ノ之慈担当主任士官、二人でいるときは下の名前を呼んでくれ」

そういうと、彼女は彩夏の上で跨る姿勢のままシャツを脱ぎ捨てた。これ以上の刺激は童貞の彩夏にはキツすぎるのであったが、しかしそんな彼の視線は慈を美しい体ではなく、彼女の体に刻まれたいくつもの傷のほうを釘づけにさせたのだ。

「司令——主任、その傷はやはり」

「ははは……醜いか？ 私が束の代わりに背負った代償だ」

「ッ!？」

——彼女は白騎士事件の後に……

いくつもの火傷の跡や縫い傷が体中に刻まれている。

「白騎士事件の後、私は父と共にそのままこの場所へ残り続けた。愚妹のやらかした罪を代わりに償うために、このまま東京へ残ったんだ。覚悟はしていたが、それは予想をはるかに超えていた。それほど、多くの人間達がI Sによって到来した女尊男卑の風潮によって人生を狂わされていたのだ」

「篠ノ之——さん」

「あの時も、このはだけた身形と同じ格好になるまで制服を引き裂かれ、露わに近い私の身体をクラスメイト達が容赦なく縛り上げた。全身を縛られ、床に転がされた私は無抵抗のまま露出した肌を火で炙られ、鈍器で殴られ、刃物で切り付けられた——」

　　といって、ストックキングを膝まで降ろすと、その白いムッチリした美脚にも多くの縫い傷や火傷の跡が広がっており、さらには前髪で隠れていた額の切り傷も片手ですくって見せてくれた。その姿に、彩夏は絶句するとともに、両目から大粒の涙が浮かんできた。

「自宅にいるときも、二階の自室の窓を突き破った石が入ってきたり、扉に罵声を落書きされたり、本当に心が折れた。しかし、そんな私にとって唯一の心のよりどころが棗という親戚の子だった。年下なのに勇敢で、怖いもの知らずなわんぱく坊主だったが、そん

な彼が私を実の姉のように懐いてくれてな。私もそんな棗を弟のように可愛がった。棗の笑顔に私は何度も救われた。

私と高校の三年に上がり、棗は中学に上がったころには互い異性として認識しあうようになり、年の離れた恋愛が始まった。中学の時よりかは虐めは和らいだが、それでも私に対する陰湿な行為は続いたがな。それでも私には棗がいてくれるならどんな苦しいことも平気だった。私にとって、棗が全てだった。

けど、そんな日常が突如終わりを告げてしまったんだ……」

彩夏の頬に彼女の涙がこぼれ落ちた。涙でうるう両目はこれ以上の自分を保ち続けなくなっている。

「期末テストの勉強を手伝っているとき——平均点を超えたらデートしてやるって約束したんだ。棗の奴、奮闘の限りを尽くしてテストでオール平均点を越える点数をたたき出してな、褒美のデートへ連れて行ってやることにしたんだが……デートの最中、突然ISのテロに巻き込まれてしまって。棗は、殺されそう……になった私を、庇って——死んで……」

両手で涙をぬぐいだす彼女を見たと同時に、彩夏の両目も涙であふれていた。

「大尉からそのお話も聞きました。しかし司令——主任」

「——？」

ゆっくり彼女の両肩を掴んだ彩夏は、そんな彼女の救済になりたかと思っただけ。しかし、これでは彼女のためにはならない。本当に彼女をこの苦しみと悲しみから救うためにも、彼は意を決してこう返した。

「自分は……棗さんの変わりにはなれません。自分は、ハイペリオン・ソードのテストパイロット織部彩夏准尉であります」

「ッ……!!」

そんな真剣な目で見つめられた慈は、泣き出したいのを堪えた。

「棗さんの代わりとして自分が好きなのですか？ それとも、私を織部彩夏一個人として好きでいてくれるんですか？」

「ッ！！」

慈は、もう耐え切れなかった。彼女は彩夏の胸元へ顔を埋めながら、涙で濡らした彼の胸を白くて細い握りこぶしが弱々しく叩き出した。

「わかっている——！ わかっているんだッ！！ 君は棗ではなく織部彩夏という一個人だというのを、それでも、私にはあの子との面影が君と重なって……！！」

「慈さん……」

そんな泣きじゃくる彼女を、彼はそっと両を背中へ回して、包み込むように胸に抱きしめてやった。ほのかな香りと温もりが全身に伝わってくる。

「慈さん！」

意を決した彼は、慈の両肩を再び掴んで胸から引き離すと、真剣な目で泣きじゃくって怯えた彼女を見つめた。

「彼方は、俺の士官になって、これからも一緒に居られることができるんですよ。なら、今一度——俺の事を織部彩夏のことを見ていてください！」

「彩夏、の？」

「はい！ 俺、貴女に好きになってもらうようにハイペリオンのテストパイロットとしてこれからも奮闘します。だから、織部彩夏という一個人をその瞳で見えてください」

「彩夏……」

「俺も慈さんが好きです。好きだからこそ、俺という一個人を好きになってもらいたいんです！」

「何を申すか——そんなこと言われたら、ますますお前を大好きでなくてはいられなくなるではないか！」

とたん、再び抱き込まれて彼女から初めての唇を奪われた。彼女も初めてだったのだろうか？

——慈さん……！

何となくだが、わかった気がする。彼女は、棗という人物を彩夏と重なって好きでいる。だがそれゆえに悲しみから救われたいがために救済を求めてきたのだろう。彼女は、そのためにも彩夏を必要としている。その意は受け入れてやりたかった。

「約束してください。もう一度、俺を見つめなおしてくるって。俺もあなたと一緒に頑張りますから、織部彩夏という一人を見ていてください」

すると、抱き込まれていた彼はひょいっと起き上がると、泣きじやくって目を赤くしていた慈を軽々と抱き上げたではないか。

「彩夏、何を？」

「慈さん——主任士官も疲れているんでしょうし、おやすみください」

そういって、真っ赤になる顔を両手で隠す彼女を、ベッドへ寝かしつけたが——

そんな彼女の白い手が。彩夏の制服の袖をつかんで引き留めたのだ。

「——准尉、貴様明日は勤務か？」

「カレンダー通りらしいので、明日は日曜です」

「だったら命令だ！ 私と一緒に今夜ここに泊れ」

「え、ええ！？」

「お、お姫様抱っこなんぞしおって——いまさら何を驚く！」
ぷうっと頬を膨らます彼女に、困ったものだと思いきや彩夏

はため息をついた。

「では、毛布をお借りして自分は床にでも——」

「床は冷たくて固い！ 今後任務に支障をきたしてはならん。私と一緒にこのベッドの中に入れ！」

「——ですが」

「いいから早くっ！」

そう、甘えるようなしぐさを見せる彼女を見て、常にデスクに立つクールビューティな彼女とはかけ離れていた。本当は、これが本来あるべく彼女の姿なのだろう。部屋も可愛い雑貨やぬいぐるみもあるし、本当に女性らしい部屋だ。結構散らかってるけど。

「では、お前も制服を脱げ、汗臭くなっているだろうしシャワーを浴びてこい、制服は洗濯しておいてやろう」

そういうなり、ピツタリ付けた両足を天井へ突き出しながら尻までむき出すと、両手をヘソまで上がったストッキングを脱ぎ捨て、ポニーテールで結んでいる白い紐を解いて黒い清楚なロングヘアを両手でぱさぁっと持ち上げるように靡かせた。彼女の身体は白いブラとパンツを纏うだけの姿でベッドの上に横たわっている。

「別に、肉体的関係は省かれるのですよね——」

「……いいから」

——絶対何かあるな。

「はい——」

そういうと、彼は遠慮しつつもシャワーを借りるために制服を脱衣場で脱ぐが、天井に洗濯ばさみで吊るされた下着の群れを見て、童貞の体がさらに狂ってしまいそうになる。

「女性の自宅だからな——」

そのあと、シャワーで軽く体を洗い流して、トランクスと肌シャツだけになって彼女の寝室へ向かうと、まだ起きていたの「ほら、

入れ」と掛け布団をめくってきた。

すると――

「さ、彩夏――そんな風に抱きしめてきたら、私が身動きができないではないか？」

下着姿の彼女の上半身を両腕ごと、彩夏がぎゅっと捕まえるように抱きしめて放そうとしない。

「ダメです、トランクスの中へその手を忍び込まされたりでもしたらなりません。貴女が俺という一個人を好きになってくれるまではお預けですから。俺も貴女に変なことはしませんので」

やや、意地悪そうに笑む彩夏を見て、これは一枚上手だったかと慈も困ったように微笑んだ。

しかし、こうやって彼の両腕を後ろに回されて胸に抱かれるのも悪くはない。

慈は、彩夏のシャツ越しの胸に顔を埋めてゆっくりと可愛らしい寝息をたてて眠りについた。

――益々苦勞しそうだな……

彩夏は、自分の胸の中で眠る慈の寝顔を見てはため息をつきながら篠ノ之家宅の天井を見上げつつ、胸の鼓動を高鳴らせた。

SCENE 7 「大陸の猛者」

この日、IS学園の正門を一人の小柄な女子生徒が潜ってきた。転入生だろうか、彼女は背まで伸ばしたツインテールの髪を風に揺らしながら学園の事務室に向かって歩き進めているのだが――

「んもう！ この学園の敷地っていったいどうなってるのよ!？」
かれこれ一時間近く歩き続けているが、一向に広大なIS学園の施設内から事務室への道筋はつかめないままだった。

そうこうしている間に昼休みに入ってしまったそうだと、彼女は焦りを出しながら足を急がせながら今もなお、途方もなく学園敷地内をさまよっていた。

「まったくもう――ん？」

校舎らしき巨大な建築物の裏側へ出たところで、その敷地へポツリとたたずむ仮設の建物が見られた。

「なにかしら？」

少女は、恐る恐る足を進めながらその仮設所の元へ近づいていく。

「……ネオファリア？」

仮設所の入り口付近に立ってかけられた縦看板にそう書かれていた。

「ネオファリア――どっかで聞いた覚えが……」

「あれ？ 君、学園の生徒――だよね」

「――？」

その聞き覚えのありそうな声に振り返ろうとする少女、中国からの代表候補生である凰鈴音（ファン・リンイン）は自身に開けられた声の主へ振り帰ったのだが――

「い、一夏!？」

そこには小さいころから思いを寄せていた幼馴染の青年が、大人

びた容子でこちらに立っていたのだ。

「え？」

しかし、青年はきよとんと首をかしげる最中で風は当たり前のように馴れ馴れしい声を浴びせながらこちらへ駆け寄ってきた。

「あんた一夏？ 一夏よね」

「え、いや俺は——」

「よかった！ 実はあたしもこの学園へ転向してきたのよ。いやあ、施設がものすごい広くてさ、受付の事務室が何処へにあるかわからなかったのよね。あ、よかったら案内しなさいよ」

「だから、俺は——」

「んもう！ ドンくさいのは相変わらずね？ あたしよりも背がすごい伸びたからって言ったって、まだまだ頼りないんだから——」

——何だこの子？

次の講習へ向かおうとした矢先、突然見知らぬ少女に呼び止められて、さらにまたしても自分のことを「一夏」と勘違いしているのだ。挙句に事務室へ案内しろって——こっちは早くいかないと千冬がうるさいのなんのって……

「あの、君——」

「はやく、案内しなさいよ！」

強引にも、彼女は一夏と勘違いした彼、織部彩夏の片手を取っ掴んでここから校舎の表側へ連れ出した。

「ねえ、事務室はどこ？」

「あのなあ……」

——まあ、そんなに遠くないし、急げば間に合うか。

と、彩夏は自身の片手を握り掴んでいる彼女の片手を、握り返した。

「あっ……」

急に握り返されたのか、凰は途端に顔をポツと赤くし出した。

「付いてきてくれ、こっちだから」

「う、うん——」

一夏、なんかすっごいクールで大人って感じ——

急に見せた大人っぽい風格は、どこか彼の姉である千冬を思わせ
た。が、不器用すぎて優しさを表情に出さない千冬とは違って、こ
の……一夏……は彼の姉とは違って案内しようっていう親切心が顔
に出ている大人の顔であった。

「——ここだ。後はわかるか？」

「うん——あ、ありがとう」

「じゃあな」

そういつて彼は通路をかけて教室へ急いだ。

「あ、ちょっと——」

もう少し、大人びたイケメンクールな幼馴染をもう少し見続けて
いたかったんだが……

「あれ？ でも、あいつの着ていた制服ってウチの制服と違うよ
うな——」

青色の上着に灰色のズボンは、どう見てもIS学園の制服という
よりは国連軍兵士の制服と似ているような気がした。それに、腰に
つけている黒いホルダーの膨らみはひょっとして——

「ま、いっか！」

あの顔はどう見ても一夏なんだし、彼もIS学園に入る前はIS
の訓練のために軍へいたんでしよう、勝手に理由づけて事務室の
窓口で手続きを行った。

*

仮設部署の二階にて、彼らの担当を任せられた元司令官の篠ノ之

慈は今日もネオファリアのメンバーと共に苦手なデスクワークに奮闘していた。そう、今日はいつも以上に奮闘していたのだ。

「よし！ これもよし！」

そんな彼女のデスクに一杯のコーヒーが置かれた。

「主任士官、コーヒーよろしければ」

ネイナであった。白衣を羽織ったいつもの彼女がいた。たてのコーヒーを奮闘中の彼女にふるまった。ネイナ自身もこれまで博士兼任という両方二役を担わされていたために多忙であったが、こうして主任としての勤めを代わりに慈がしてくれるようになったので大好きなソードの研究開発に没頭することができる。それに関しては感謝していた。

「ああ、博士。お忙しいのにすみません——その……」

とはいえ、束を妹に持つ彼女からしてネイナは彼女を未だにどう思っているのか不安であった。

「確かに妹さんは嫌いです。でも、貴女のごことは好きよ慈主任」

そう笑顔で言った彼女は続けて、

「——准尉も、御両親をISのテロで亡くしているけど、だからと言ってもう貴方のことを憎んでいたりはないわ、当事者ではないもの。そりゃあ、誰だって真実を知ったら戸惑うわ。それをどう受け止めるかよ。准尉は、その迷いをネクストワンに加え『ニュータイプ』として目覚めた能力も働いて、主任も被害を受けた人間の一人って悟ったわ。後は、貴女があの子を好きになるだけよ」

そのとき、貰ったコーヒーを吹き出しそうになった慈は、とっさに誤魔化した。

「ち、ちがう！ その——」

顔を真っ赤にする慈に、ネイナは続けた。

「大丈夫。昨日の夜、准尉に一目惚れしたのよね」

「う、うむ……」

顔を赤くしながらも、静かに頷いた。周囲のメンバーは聞かぬふりをしつつもデスク作業をしながらそっと耳を傾けていた。

——織部、彩夏……

その名を心の中で唱えるたびに胸が苦しくなる。あのとき、過去の悲しみを引きずり続けていた自分の事を思い、過去の悲しみにすがり続ける自分のために彼を棗と重ねて愛すことをやめさせてくれた思いにこそ、彼女は心底惚れていたのだ。

『俺もあなたと一緒に頑張りますから、織部彩夏という一人を見ていてください』

あの夜に彼が行ってくれた言葉が、今も忘れずに根付いている。思い出すたびにあの時言ってくれた彼の真剣なまなざしを思い出してしまう。

——ニュータイプの方とやらは、女を心底虜にしてくるな……気づけば、自身の机の上に積み重なっていた書類はなくなっていた。彩夏との夜をきっかけに仕事にも熱が入って早急に終わらせてしまったのだ。

「あら、もうお仕事はないのかしら？」

「ああ——今日やるだけの仕事はもうないな。ほかのメンバーの手伝いでも……」

「主任、こちらは間に合っております」

と近くのデスクのメンバーが言い出した。

「こちらです」

「自分の方ももうじき終わります」

「え……？」

キョトンとする慈に、ネイナもこういいだした。

「ソードの視察といっても、今日はメンテの日じゃないから私の

方も間に合ってるわ主任」

「いや、それはだめだ！ 主任たるもの、何かないのか博士」

「じゃあ……准尉の視察でもどうかしら？」

「彩夏——准尉の！？」

一瞬名前で呼びそうになってしまうほど慈は取り乱してしまった。

「慣れない女子高での講習活動で気がめいってるかもしれないし、彼の心の状況を聞き出したり上司と部下という関係上のコミュニケーションを築くのも、主任としての御勤めよ。丁度お昼休みだから准尉だったら学食にいるんじゃない？」

「う、うむ——では……その、視察へ向かう！」

そういうなり、彼女はまじめな顔を保ちながら二階から一階へ降りてきた途端、仕事から一時の解放感を得たのように、可愛らしい声で鼻歌を口ずさみながら早歩きで一階のから仮設部署をでようとしたところ、

「——慈？」

一階で休憩をとっていたキースの存在に気付かないまま、彼にその鼻歌を聞かれていた。

「……」

無言のまま、きしむ音を立てながら恐る恐る彼の方へ振り向いた。

「おう——うん」

会釈をするキースだが、しばらく間を置いたところで。

ニヤッ——

「うわあああああゝ!!」

にやける大尉の顔を合図に彼女は恥じらいながら部署から飛び出してしまった。

「聞かれました——最も聞かれたくない奴に聞かれました……たあ……ううく」

恥じらいながら両手で顔を覆う彼女のもとへ、

「えっと、篠ノ之慈さん？」

そんな彼女の元へ怪訝な表情を浮かべて歩み寄ってくる一夏の姿が現れた。

「えっ？ あ、ああ——君か」

「あの、その都度はちゃんとした挨拶もないまま失礼しました。箒の幼馴染で織斑一夏っています！」

そう礼儀よく一夏は頭を下げて挨拶に来てくれた。やれやれ、姉弟でこの差とは……

「ああ、確か——箒の幼馴染だったな。千冬の弟君だね？」

何故、慈が一夏と出会わなかったかという点、それは当時束が必要以上に慈を嫌い続けていたのだ。それも殺意とっていいほどであった。

そんな束の危なさを見兼ねた父親が慈の身を案じて彼女を棗の居た親戚の家へ預けたのである。そこから同じ学校へ通っていた。学校では極力他人としての素振りを持続すれば束もこちらへ嫌悪感を抱かなかった。何より学園にいるときの束は、親友の千冬には異性と恋愛かというほどベタベタしていたからだ。見ていて気味が悪かったし、正直キモい。

よって、滅多なことでは自宅へ帰ることは出来なかったので当時の一夏と直接顔を合わす機会はなかったのだ。

「姉がいつも世話になってます。それと箒には世話になりました」

「うむ、千冬は堂々と世話になっておるな。箒は迷惑をかけてばかりだろう」

ついボソッと愚痴ってしまった。

「ははは、ウチの姉は鞭ばっかで飴の欠片もないような厳しい人ですからね」

と言って、一夏はついでにとうとう続けた。

「あ、そうそう！ 実は中国から俺の小学校からの幼馴染が転校してきたんですよ。そいつも代表候補らしいので、もしかしたら実技で彩夏さんと戦うかもしれませんよ？」

「そ、そうなのか――」

イギリスの次は中国か、面倒なことにならないと言いが……

「あ、その中国の代表候補ですけどあまり近づかない方がいいですよ。アイツは箒以上に凶暴で最凶な奴なんです」

「不良なのか？」

「不良以上におっかないですよ。まあ、中国人ってのもろ・・リアルゼントラーディ・・みたいに三国志いわく闘争本能半端ないから、うかうか近づいたらカンフー蹴り食らいますよ」

そう爽やかなスマイルで言ったのけた一夏を見て慈は苦笑いした。

「そ、そうか――」

中国以前にその幼馴染のことが単に嫌いなのか彼は。

しかし、中国と言えば最近ISの技術に力を入れてきた、「IS先進国」になりつつある国家だが、それ同様にソードや反IS思想の存在にはかなりの敵意を向けてくるとのことだ。

これは、あまりその幼馴染とやらとも接触は控えるようにしないといけない。うかうかしてたらソードの技術も盗まれるかもしれない。

「じゃあ、俺はこれで失礼します！」

「あ、ああ――」

――なるほど、中国の代表候補か……

これは、ネオファリア主任として目を光らせておいたほうがいい。

「あ、彩夏！」

とっさに思い出した彼女は昼休みが終わってしまいそうだと急い

で校舎の学食へ向かった。

そのころ、彩夏は学園内の食堂に居た。ネオファリアの面々も学食を使用できるが、使っているのは彩夏ぐらいしかいない。

とにかくも食堂へ顔を出せば真っ先に他の生徒たちに一夏同様声をかけられる。

「彩夏さーん！ こっちこっち！！」

「あ、ああ……」

そんな彩夏もIS学園の生徒たちへの接触は拒んでいなかった。仲良くしていればISに関して詳細な弱点を聞き出せるのではとも思っているため、それも意識して近づいているのだ。今はそのためにもコミュニケーションを深めておく必要もある。パイロット科以外にも整備科の生徒達から詳しい情報を掴もうとしていた。

「この前のセシリアさんの事件、大変でしたね？」

「ああ、まあね」

一人の生徒がさういう。何せ、セシリアのドラゴン事件でISを兵器として認識し始めた生徒たちも極一部であるが出てきた。

兎に角も、ISがあんなことになるなんてとこれでは欠陥品もいところだと言い出す生徒やISも十分な兵器だと肝に銘じる生徒たちが現れたのは確かである。

「一緒にお昼食べようよおオリベー」

余り過ぎた袖を振りながら一組の一人、布仏本音も声をかけた。

「じゃあ遠慮なく？」

彼女立の席に座って、唐揚げ定食を前に「いただきます」と手を合わせてから箸をつけた。

「ねえ、織部さん。結局クラスの代表はどうなったの？」

と、セシリアと決闘することになった際の切欠の落ちを訪ねてきた。結局、そのままオジャンな形になったので最終的に一組だけはまだ決まっていなかった。

「私達考えたんだけどさ、織部さんのソードっていうのめっちゃくちや強いでしょ？ だから、織部さんが一組の代表ならって」

「ああ、すまんが此方には期間内までしか滞在できないんだ。主にISとの模擬戦闘で得られたデータを取るための任務なんだ」

「え、じゃあ期間を過ぎたら軍へかえっちゃうんですか？」

「ああ、それまでの間はよろしく頼むよ？」

「やだやだあく！ オリベー行っちゃやあく！！」

そういうなり、駄々をこねて本音が彼の脇腹に抱き着いて泣きだした。

「こらこら、織部さんだって忙しいんだからわまままいわないの！」
そういつて隣にいた親友が呆れた顔で本音を見た。

「ははは……」

相変わらず女子生徒の輪に入るのだけは慣れないなど、絶えない苦笑いを続ける彩夏であったが、そんな彼を遠くのオブジェ裏から半身を出して見つめている一人の姿があった。

慈である。共に昼食を取りながら容態を聞くなりのコミュニケーションを図ろうと笑みを浮かべながら張り切って食堂まで足を運んだものの……

——あ、あ奴！ よりにもよってあんな子娘たちと楽しそうにしているではないか。

心配して損したという以前に、案外女子高を楽しんでいるという呆れと、大人げないが子供たちに対して嫉妬をしてしまう彼女がいた。

が、そんな心を女特有の悪い性分だとすぐさま気持ちを切り替えます。

——いやいや、ここで感情的になってはならん！ 断じてならん！！
勝手に決めつけて、感情的になるのは女という生き物の悪い癖だ。
大体、女という生き物は子宮でしか物事を語らぬ単純極まりない生き物だ。

賢い女というのは、常に冷静沈着に理性で物事を的確に判断し、誤解をせず感情的に突っ走らない女のことを言う。対して、感情的に突き動かされてすぐ行動に走ってしまう奴はただの馬鹿な女とよばれる存在であり、社会では鼻つまみものである。

かつて、恩師である軍の士官から「感情的に走るな」という教えを何度も厳しく言われた。特に軍人であれば常に冷静であれ。そして物事を感情論ではなく詳細な社会情勢と知識論、常識的理性論で答えろ。

そんな恩師の教えを守り抜いて彼女は司令官という座まで上り詰めた。彼女の貢献はミソジニーな軍人達からも認められ、人望も厚い。それは彼女は彼らも認める賢い女だからだ。

そして、そんな彼女だから今後の国連軍全体の命運を左右する人型機動兵器ソードの開発部門「ネオファリア」の担当主任という、司令官職以上の大役を任せられたのである。

……とはいえ、まだ若さゆえにその辺にいる年頃の娘と同じ中身故にまだまだ精進が必要でもあった。

「……准尉、そこにいたのか。食事中にすまない」
彼女はそのまま彼の元へ歩み寄った。

「あ、主任！ ちょうどよかったです」

彩夏は、慈がいいところに来てくれたと事で喜んでいた。何せ、詳しい情報も聞きだせないうえにどうでもいい話に理解を求められ

ながら聞き流すという絡まれごとから逃げ出したかったのだ。

うかうかと適当に女子生徒たちとの輪に首を突っ込むものではない。
い。

「そうか、実はこちらでも仕事面で貴様に急用がある」

「はい、あ——直ぐに済ませますので」

と、定食を見てから彩夏が言うのと、

「いや構わんよ。それよりも——貴様が良ければ一緒にどうだ？」

「是非！ ああ、ごめんな今から仕事の話をしてくるから」

そういって、本音たちを振り払って定食のトレーを抱えながら慈の元まで席から立ち上がった。

「では、あちらの席へ——少し待ってい居てくれ」

そういって、彼女も券売機へ向かった。彼に聞こえないように鼻歌を口ずさみながら。

ネオファリアの軍人にして、美女でもある篠ノ之慈が券売機へ近づくとつれて周囲の生徒からも彼女に向けた声が飛び交ってきた。

「うわあ〜すっごい綺麗——モデルさんかな？」

「でもあの制服は『国連軍』の人？」

「織部さんと仲良さそうにしてる——もしかして彼女さんかな？」

「うわあ〜追い越されたあ〜!!」

——わ、私達はそう思われているのか？

顔を赤くして、掛け蕎麦のトレーを恥ずかしそうに俯きながら彩夏の居る席まで運んできた。

慈も、両手を合わせて「いただきます」と言ってから割りばしを割った。

「して、先に准尉からの用件を聞こう——」

「まあ——その、先ほどの生徒たちにしつこくされてね、抜け出したいところへ丁度主任が来て下さったので助かりました。生

徒たちとうまく接触を図ってISに関する詳細な情報を聞き出せないかとコミュニケーションを取ろうにも、全然話にならなくて……」

「なるほど、大の大人が少女たちに絡まれていたのだな？」

「め、面目ありません——」

「まあよい、私も今後は准尉と仕事面でもうまくやっていけるようコミュニケーションを取りたいゆえ、こうして食堂まで足を運んだまでだ」

——なんだ、やっぱり私の思い込みではないか。

とっさに感情的になってしまった自分が実に恥ずかしい……

「して、ハイペリオンの状態はどうだ？」

「すこぶる快調です」

「それならいいが、パイロットである准尉のほうはいかがかな？」

「今のところ体調具合に支障はありませんよ。出撃となればいつでもスクランブルできる覚悟ですから」

「うむ、それを聞いて安心した——」

「一夏！」

そんな二人の元へ例の中国少女が駆け寄ってきた。

「またか……」

いい加減に俺は一夏じゃないと強めに言った方がよさそうである。

「探したわよ？ こんなところで——あれ？ 千冬さん——じゃ

ないわよね？ 誰よ！ その人」

少し、嫉妬したように感情的になる風を見て慈はため息をついた。

——こういう子娘が一番腹が立つ……

少女だからという理由で大目に見ろというが、こういう年頃から女というものは感情を抑える努力をしなくてはならないのだと、慈自身は思っている。

「君——」

そう言って、慈は凰へ振り返った。

「は、はい……」

そのクールビューティーな容子の女性にビクツとした凰は、一瞬で体がピシッと固まった。

「冷静に物事を理解しなさい。彼は、本当に君が知る一夏君かな？」

「えっと——」

そういって、凰はまじまじと彩夏を見ていると——

「何となく……違う？ でも、一夏よ！」

私は間違っていない！ の一点張りをする凰に慈は懲りない奴だとまたため息をついた。

「彩夏さん！ 慈さんも」

すると、ちょうどいいところで一夏が定食のトレーを持ってこちらへ来たではないか。そんな少年と凰がぼったり視線が合ってしまった。

「あ——」

一夏は、会いたくない人物とあってしまったことで膠着してしま

う。
「い、一夏！？ 一夏が……二人！？」

片手の指先が彩夏と一夏へ左右に行ったり来たりする。慌てふためいて動揺する彼女に慈がこう言い決めた。

「先ほども言ったが、よく考えて自身の誤りを認めないといかん。隣にいる彼は私の部下で織部彩夏准尉といい、君と目が合っている少年こそが君が会いたがっていた織斑一夏君だ」

「ま、まあいいわ！ 一夏、一緒に食べなさいよ！！」

気を取り直して、ご機嫌の様子で一夏の肩をつかむ凰だが、

「悪いが、俺は今日一人で食うから——」

「はあ！？ 何でよ、私が誘ってるのに！！」

と、肩を激しく揺さぶりだす。

「こら揺らすな！ 飯がこぼれるだろうが——」

「納得いかないわ！ どうしてなの！？」

「うぜえ——」

一夏はその場を後にして、そんな彼の後を追う鳳は食堂にその大声を張り上げた。

——中国の者は声が大きいな……

元気があっていいことだが、場所を選んでもらいたい。少しは静かにしてくれと思う慈であった。

「そうだ、この前はご自宅でももお世話になりました主任」

と、准尉の一言に慈は顔を真っ赤にしながら手元の定食の方へ俯いてしまった。

「い、いい。気にするな、私が誘ったのだから……」

「それで——今度、来週の金曜にでもご一緒に飲みへ行きませんか？」

「え、ええ——！？」

誘われた？ そんな衝動にかられる慈だが、

「し、しかし——准尉はまだ十九だったな？」

「ええ、実はその日に二十歳になるんですよ」

「そ、そうか！ なら祝ってやらないとな」

「別にいいですよ。今度は、大尉と博士も誘っていきませんか？」

「え！ ふ、二人も——か？」

途端、感情を制御しようと思死な彼女はついついしょんぼりとしてしまった。

「あれ？ 何か……」

「——い、いや！ うむ、飲むのは大勢のほうが楽しいからな、うむ——！」

「じゃあ、そろそろ休憩時間は終わるので自分はお先に失礼します！」

「あ、ああ——頑張れ」

結局、再び二人きりになれることは叶わなかったようで、それが顔に半分出てしまっていた。

——いかん、上に立つものとして抑えろ！

そう自身に言い聞かせ、彼女も食事を終えてから仮設部署へ戻った。

さて、午後の実技授業のためアリーナでは授業開始前に千冬から今後のトーナメント戦についての説明が始まった。

「今後のクラス戦についてだが、ネオファリアの方たちもソードで期間内にクラストーナメント戦へ参戦することにした。また、クラス代表に関してだが——結果的に織斑が自ら志願してくれたとのことだ」

クラス代表は一夏に決定した。彼が自ら志願したことに周囲はいくつか疑問を持った。

「しかし、一夏はまだ専用機を持っておりませんか？」

箒である。彼やたのクラスメイト達はこれまで一夏が一度もISに乗って実技に出てきたためしはないのだ。現に今日も制服姿で周辺に広がる観戦室の一つに座って手を振っている彼が見えた。「それに関してはシミュレーションをしているから問題ないそうだし」ちなみに、彼の初陣は次のクラス戦である。その時に彼専用の機体が到着するのであるが、本番ぶっつけで大丈夫かという周囲の不安もあった。

しかし、今の様子からして自信ありきなために大丈夫なのだろう。

「では、各自ISを展開！」

その後、生徒一同は慣れない手つきで次々に通常時間外でISを

展開しだした。本来、ISの展開時間た0、数表とのことだから恐れ入る。

「さて、御待てせしました。こちらは準備はできておりますのでネオファリアの皆さんもソードを展開してください」

千冬の言葉に彩夏とキースは右手首の腕輪から念じてソードを展開した。一瞬でアリーナの地に立った二体のソードの出現はIS並みの展開速度であった。

もちろん、展開した彼らは次に気づけばソードのコックピット内へ転送されているのだから、これは実に便利である。

「准尉、嬢ちゃんたちを踏んづけねえようにな？」

「了解」

足元からこちらを見下ろす、大勢の打鉄を装着した生徒たちを見て、いい気分だとキースは思ったことだろう。常に男がISを見お上げる立場だったのが一転という気分だ。それならそれで彩夏も気分がいい。

授業は開始された。内容は、生徒全員がソードと模擬戦闘をするという事だ。IS側にはセシリアはこの場には居ないことで専用機はない。ゆえに現存は打鉄のみである。

二機のソードはSEシステムの推進力によって砂煙も立てず低空へ浮上すると、地上の打鉄にむけてバルカンのペイントをバラまいた。

ハンデでSEフィールドは使わず、打鉄がブレードやライフルで攻撃して一撃でもソードへ命中させたら彼女たちの勝ちであるが――

次々に地上の生徒たちはペイントまみれにされていく。これではもう一方的な攻撃であった。

「やれやれ――山田先生」

そういって、これ以上は見てられんとスナイパー仕様の打鉄を装着した後の山田に命じた。

「は、はい！」

もと日本の代表候補生である山田は得意のライフルを構えた。

「嬢ちゃんたちだけが相手とは退屈だな」

「あれ？ 大尉！ 熱源が——」

「ああ——？」

とたん、タイラント改の目の前をギリギリでスナイパーのビームが通過したではないか。

「あぶなっ！ 誰だよ！？」

大尉がスクリーンを拡大すると、そこにはスナイパーを構えて、こちらへ銃口を向ける山田の姿があった。

「あの牛乳眼鏡の——ハンデを変えやがったな！」

大尉はすぐさま、僚機の准尉へ命じる。

「准尉、千冬の腰巾着が相手が出てきやがった。油断するなよ」

「は、はい——うわっ！」

今度は今度はハイペリオンにもビームが横切った。

「お次は教員相手かよ！」

そんなドッキリ展開に対応を焦らされる彩夏は、次々と撃つてくる山田のスナイパーライフルのビームを回避するのに必死だった。タイラント改も同様である。こんなアリーナという限られたフィールドで、低空での模擬戦だ、全長十八メートル程のソードには状況的に不利であった。

そして、二体のソードが追い詰められて互いの背中がぶつかり合った。

「じゅ、准尉！ 気を付けろ」

「す、すみません——」

お互い様である。彼らはままと山田の戦術によって追い込まれていたのだ。

「ソードは、低空での限られたフィールド内では不利というわけか」

そんな、地上から山田の戦術の姿を久しぶりに見上げている千冬はじつくりとソードに対して自己研究していた。頼りのSEフィールドも重火器を使えば敗れると思っっているのだろう。彼女立とて一方的にやられ続けるわけではない。学園の顔もあるため少しはソードの彼らへお灸をすえてやらねば学園側の職員、とくに学園長は納得いかないだろう。

「切り札を召喚させたというのか、卑怯者め」

そう千冬の背後から慈が歩み寄ってきた。

「――ネオファリア主任、此処は危ないので博士のいる観戦室内へお戻り願います」

不愛想に言い返す千冬に慈も、

「私は現場派の人間でな。主任たるもの間近でソードの状況を見定める義務がある」

と、言い返した。そして、慈は観戦室でハンデを付けられてウズウズしているネイナの元へ電話をかけた。

そして、本気の目を空に向けてこう命じる。

「ネイナ博士、直ちにSEフィールドの展開と全武装の使用を許可する。ソード二機のパイロット達へ全力の本気で戦うよう指示してくれ」

『待ってました、その言葉!!!』

ネイナはすぐさまソードの彩夏達へ伝えた。

「聞いての通りよ！」

「へへ、ありがたいぜ主任さんよ！」

そして、彼女の話を聞いていた彩夏も。

「主任——ありがとうございます！」

「ッ！！！」

そんな彼からの礼に慈はまたポツと顔を赤くして目を見開いてしまった。

ハイペリオンの両手には主要武装のSE式ビームアックスが転送、握りしめられた。タイラント改は両手にビームサーベルを二刀流で構える。

「相手が代表候補上がりの教員なら本気でいくぜ！」

そういうと、キースはビームを受けたりかわしたりを繰り返しながら上空へ逃げた山田機へその機体で躍り出た。

「え——？」

一寸で間合いに入ってきた巨体の振り下ろすビームサーベルに直撃。幸いネイナが威力を調節しているのでISのシールドを削るだけに過ぎないが、それでも威力は半端ない。

斬りつけられて地面へ低下する山田機を待ち構えるのはハイペリオンソードのビームアックスである。

「落ちろ！」

バットでボールを打つかのようにアックスの先端が山田機に直撃、そのままさらに高速で地面に直撃した。

アリーナの地面へ大の字になって「張り付いた山田機へハイペリオンがトドメのSE式ビームガトリングでアリーナにクレートを作らせた。

これまたオーバーキルでフルボッコにされた山田機は完全に戦闘不能であった。

「や、やりすぎですぞ篠ノ之主任！」

慌てて怒りに来る千冬に気持ちよさそうな顔をする慈は愉快に笑

っていた。

「はっはっは！ しかし、これで十分に良いデータが取れました。感謝しますよ織斑先生」

そして慈はハイペリオンの活躍を見て、

——さすがは私が見込んだ部下だけはある！

織部彩夏への第一歩の好意が進展した。

「すげえ！ やっぱ、ハイペリオンはマジツ半端ねえよ！！」

興奮気味の一夏は地面へ降り立つ二体のソードをみながら興奮が止まらずにいた。

その後、どちらが強いかと張り合っていたISの生徒たちもこの日だけは大人しく黙っていた。それと、ソードを決して本気にさせたいいけないという事も山田の最期を見て思い知ったことだろう。

そして、山田はしばしソード恐怖症になった。ハイペリオンのアックスでバッティングされたことがまだトラウマになっているのだろう。

「ふう〜今日はソードのど派手な戦闘が見れてよかった！」

今日はいい日だと一夏は満足げに放課後、寮へ帰った。

すると、

「い〜ちか！」

凰がルームメイトに変わっているという悪夢が目の前に。

「すみません、部屋を間違えました」

即答してクルッと背を向ける彼に凰は泣きついて引き留めてきた。

「まってよお！ 一夏あ！！」

「ってか、なんで俺の部屋にいるんだよ!？」

「ルームメイトだからよ！」

「俺のルームメイトは箒じゃ——」

「代わったのよ！ 千冬さんがこうしろって」

「ああ……あの糞姉貴、何が楽しくてこんなことすんだ！」

「ところで、あのときの約束覚えてる？」

「ああ？ 何のことだ？」

「って——忘れちゃったの!？」

「いやお前の約束なんて知らねえし——約束？」

約束なんて、帰り道が真反対なのに一緒に帰らなかったらぶっ飛ばすと脅迫されたことや、まずい中華料理を食べさせられて残したりしたらぶっ殺すと脅迫されたことか、遊ぶ誘いを断ったら拷問するという強迫しか思い出せないでいる。

「約束っつうか……脅迫じゃね？」

「脅迫言うな! あんたはアタシのことが好きなんですよ!？」

「え？」

そんな思い切った彼女の思い込みに一夏はきよとんと首を傾げた。

「えっと——勘違いじゃね？」

「んなわけないでしょ!？ あんた、あのときアタシのお店でアタシのこと好きって言ってたじゃない!？」

「店でって——あれ？ あ、ああ！」

思い出しようであるが、

「あれはお前じゃなくて風の伯母さんのことだよ」

「……へっ?」

突然頭が真っ白になるように風に一夏は続けた。

「お前のお母さんの妹さんも食堂で働いてたろ？ よくお前にいじめられては伯母さんに慰めてもらったよ。本当に優しくいい人だったなく今頃何してんだろ。会いに行けたら会いに行きたいよ」

「じゃあ、好きっていたのって——」

「ああ、お前の伯母さんのことを好きって言ったんだよ」

「……」

その後、突如カバンから青龍刀を片手にぶん回しながら暴れまわる風を静めさせるのに一夏は大層苦労した。

「覚悟しなさいよ！ 乙女の純情を踏みにじったこの大罪は明日の対抗戦で晴らしてやるんだから！！」

「大罪って——お前の一方的な思い込みだろ？」

「うるっさい！ そんなことよりも覚悟しなさいよね！？」

そういうと、彼女は寮から出ていった。

「おいおい何処へ行くんだよ？」

「今日はクラスメイトの部屋へ泊めてもらう！ ほっといて！！」

その一言で、今夜はラッキーと一夏は内心ガッツポーズをしたのは言うまでもない。

「明日、あんたのISをアタシのISでポッコポコにしてやるんだから！」

「へえ……俺の……IS……でね？」

一夏はにやっと笑って続けた。

「いいぜ、待ちわびた新型を扱えるんだ。初陣で負けるわけにはいかないよ。でも、俺ISは結構デカいんだぜ。あの……ソード……みたいにな」

SCENE 8 「飛来する一角獣」

「はぁ！？ そんなの聞いてないわよ！！」

早朝、仮設部署内より受話器を片手に叫ぶヒステリックなネイナがいた。

何事かと周囲は一斉に彼女へ視線を向けた。

「ネイナ博士、何事ですか？」

慈も、とっさに聞いてきた。彼女がここまで怒るとなると尋常な話ではない。

すると、ネイナは彼女の方へため息をつきながら振り返ると、

「それが……国連軍が新型の『ソード』をデータ収集のためにペンタゴンからこっちへ来るそうなんですよ」

「なに——？」

そうになると、今後の予定にも支障が出るし相手先との打ち合わせもあるから仕事量が倍になる可能性もある。

「今後も、次々に新しいソードがIS学園へやってくるんだそうですって」

「どうしてまた——」

「IS学園の連中の顔を本機で蒼白にさせるようね。面白そうだし私もやってみたいけど——よりもよって次来るのが強襲戦術に特化した『ユニコーン・ソード』なのが頭の痛いところ」

ユニコーン、それを聞いて周囲のメンバーはざわめきあった。

「おいマジかよ？」

「ユニコーンだって——？」

「やばい、『悪夢の一角獣』が来るのか……」

そんなメンバーの深刻な様子を見た慈は首をかしげるも、続けて

彼女に訊ねた。

「ユニコーン、そのソードはいったいつ来るのですか？」

「今日……」

「え？」

「今日よ！ 今日、それも来て早々に学園のクラス対抗戦に参戦するんですもの」

「それはいきなりですね——しかし、見たところ予定ではなくユニコーン事態に何か原因があるように思えますが、あの機体に何かあるんですか？」

「あの機体はネクストワン専用機として開発されたもので、IS同様に二次移行システムセカンドシフトが搭載されているのよ。それがパイロットであるネクストワンの意思と力で発動されて、目標を確実に破壊するまで暴れまわるといって、凶暴な野生本能を携えた機体よ」

「なるほど、一度激情を起こしたら相手が死ぬまで暴れまわるといってやつですな」

「二次移行の使用後は長時間の整備が求められるから嫌になっちゃうのよねえ……それと、例の事件……でトラウマになって誰もあの機体に近づきにくいのよ」

頬をペンの後ろ先でぼんぼんつつく彼女はやれやれというような顔でまた溜め息をついた。

「例の事件？」

それに慈は気にかかった。

「そう、前にペンタゴンが襲撃にあった際にユニコーンが迎撃に向かったのよ。それで——」

「失礼します。博士、そろそろアリーナでクラス対抗トーナメント戦が始まるぜ！」

部屋へボブ整備長が入ってきて、彼女へ知らせに来た。

「あ、じゃあそろそろ来る頃かしら？」

「ああ、着ちまうか——礼の暴れ馬が」

ボブ整備長も当然面識があるようだ。

「主任、貴女も今から一階のテレビで例のユニコーンを見ておいたほうがいいですよ」

と、ネイナは進めてきた。

「そりゃあいい、主任の嬢ちゃんも一緒に来な」

ボブからも言われ、もちろん慈は断る理由なんてなくそのまま彼らと共に一階のテレビへ向かった。

テレビ周辺はネオフアリア全メンバーでにぎわっていた。

「大尉と准尉は二回戦目に出ますね」

「そういえば、ユニコーンの初戦相手って誰ですか？」

「中国の代表候補生だと」

「ああ、中国か——スキャン盗撮されなければいいんですが」

「それやった時点でパイロットにキレられて瞬殺だぞ」

「えっと、ユニコーンのパイロットって誰だ？ あの機体、ネクストワンじゃないと癖が強いってことで結構テストパイロットの出入りが激しいだろ」

「確か——現パイロットがオリムラって言わなかったか？」

「なに？」

その苗字に彼女は当然引かかる。オリムラ——それは、織斑の姓か？

——オリムラ、何者なんだ？

険しい視線をテレビ画面へ向けつつもクラス対抗戦があと少しで始まるうとしていた。

*

アリーナには嵐の専用機、「甲龍」が既にカタパルトから発信後、フィールド内の低空へ浮上し続けていた。あれから、数分経っても一夏の機体は一向にカタパルトから現れようとしなないのだ。それに対して彼女は次第に苛立ちを募らせていった。

「んもう！ あいつ何やってんのよ!？」

男がIS乗りになったことで周囲は賛否両論の嵐であるが、本当に男がISを乗りこなすことができるのかと疑問抱き始めてしまう。まあ、どうせ男がISにのるってことだから最初は慣れない操縦でテンテコマイなはず。ここは幼馴染のよしみとして千冬さんが動くまでじっと待ってしよう。

一方の観戦室でも千冬は一夏が一向に彼専用のIS「白式」に搭乗して現れないことに怒りのいら立ちを感じていた。そんな彼女を横目で山田も焦ってしまう。

「あの馬鹿者！ いったいどこで何をしておる」

「やはり、シミュレーション通りにはいきませんか——」

「まったく、恥をかかせおって。山田先生、すこし席を外してくる」

「はい、何かあったらお知らせしますね」

「ああ、じゃあ行って——」

その時だった。千冬が席から立ち上がろうとしたところで山田はリーダーから何かの巨大な機影を感知。それは、あのソードの同じ全長を持つ巨大な機動兵器の影である。

「お、織斑先生！ レーダーに巨大な機影が……」

「なに？」

「この反応は……ソードですッ！」

「なんだと——しかし、ソードは現状ネオファリアの2機しきか

確認されていないはずだ！」

「ソード機影、降下速度からして予定時間が——今！？」

山田はその眼鏡越しの瞳で観戦室の窓辺を見下ろした。

アリーナより、観戦室の生徒たちは上空から飛来した謎の機影に注目を集めている。それもそのはずだ、何せあれは——

「准尉！ あれを——」

「あれって……ソード！？」

待機室より、天井につるし上げられていたモニターからそのアリーナの現状を目に彼らも状況が把握できずに驚くばかりだ。

「とにかく、ネイナに連絡だ！」

すぐさま、パイロットスーツの懐から携帯を取り出して彼女へ連絡を取った。

「ネイナ！ 別のソードがやってくるなんてこと聞いてないぞ！？」

それに、寄りにもよってありゃあ……」

電話越しからネイナの声が聞こえてきた。

『私に聞かないでよ！ ペンタゴン本部の上層部が勝手に決めてきたんだから』

「そもそも、『ユニコーン』に乗れるパイロットなんているのか？

あんな暴れ馬を乗りこなせるような奴なんて——」

『パイロットが見つかったから、じゃないの？』

「とりあえず、こいつは非常事態だぞ。どうすればいいんだ？」

『クラス戦は続けるけど、とりあえず今回の所だとソードの活躍はユニコーンだけにしておくわ。今日のアなた達は非番ってことで』

「まあいいけど——そりゃそうだな」

『当たり前でしょ。ソード同士が遣り合ったらIS学園なんて島ごと消滅よ？ おそらく、デモンストレーションとしてユニコーン

は一回戦だけやるだけで、あとは切り上げるそうだから』

「わかったよ、じゃあ部署へ戻っておくぜ俺らは——あ、そうだ！
准尉にもユニコーン見せてから帰るわ」

そう言っつて、携帯をしまった大尉は待機室のベンチに据わってモニターを眺めた。

「帰る前に、ユニコーンっていうもう一体のソードをお前さんも見ておけ」

そういって、大尉はたばこの一本を取り出して口にくわえた。

「ユニコーン？」

「ああ、ネクストワン専用機だ」

「ネクストワン——」

興味と好奇心が湧き出た彩夏は、モニターを見つめた。

「あれ？ 確か——」

そう、たしかこの対戦は凰という機能転校してきた中国の代表候補生と一夏が大戦する予定で、本来ならばソードではなく、一夏の専用機が登場するはずなのだ。

「大尉、ユニコーンのパイロットはご存じですか？」

何か、予感をたてた彼は大尉へ訊ねた。

「いや——俺はそのへんは詳しく知らねえな。なにせ、あれはさつきも言ったようにネクストワン専用機だ。誰もが乗り回せるほどの機体じゃないため、パイロットは入れ替わりが激しいんだ」

「まさか——」

ありえない、けっしてあの少年がパイロットだなんて予想できなかった。

しかし、それでも彼の中にネクストワンと共に宿るニュータイプとしての直感が働いた。空から飛来するあの機体から発せられる気配は紛れもなく……

「ッ!!!」

気づいてしまった彼は、その大尉へ振り向いて、

「すみません！ 外で見てもよろしいですか？」

「好きにしろよ」

「失礼します！」

彼は待機室を出て外のアリーナの観戦席のエリアよりいくつか点在してるうちの一つの入口から出てきて、上空に映る白いソードをその肉眼でしかと確かめた。

*

飛来するおその巨大な機動兵器のシルエットは、太陽を背に受けながらアリーナの地へ降り立った。それは全くにもISとは対なる巨大な機動兵器の存在であった。

目の前へ立ち塞がるように様に現れたその機動兵器に凰は予想外の相手と絶句した。

全身白一色で統一された基地で、頭部には印象的な角を思わせるような突起状のトサカが頭聳え、それ以外は全体的に顔もバイザーで覆われたのっぺりとした実にシンプルなフォルムを保っていた。珍しいことに背中にはSE式重火器兵装が積んでいない事である。

「な、何よ！ このデカ物!？」

「俺だよ、凰」

その白いソードから聞こえた第一声は、観客席のエリアにいる彩夏の目を丸くさせる。

「い、一夏……なのか!？」

上空に浮上し続けるユニコーン・ソードから放たれた声はあの織斑一夏の声であることが観戦する生徒たちやそのた全員に知れ渡っ

た。

「うそ、あのソードのパイロットって織斑君なの!？」

「オリムー、嘘じゃないよね!？」

「ありえない——だって、織斑君には専用ISがあるじゃない! どうしてソードなんかに!？」

生徒たちの混乱も当然のことだし、なによりも、

「嘘だろ、一夏……!」

動向を開いて、静かに混乱する千冬のに山田も同様に彼女の弟がソードに搭乗している事実が信じられなかった。

「どうして——ソードは国連軍の新兵器ですよ? それか、どうして民間人の一夏君が!？」

「くっ……!」

耐え切れなくなった彼女は試合の一時中断を発令させようと緊急放送として声を荒げようとしますが、

「待ってください! 織斑先生」

山田が彼女を引きとめると、掛かってきた受話器を差し出した。

「ネオファリアからです!」

「ネオファリア……慈の仕業か!？」

一気に感情が高ぶった彼女は山田からひったくるように受話器を取ると、一気に声を荒げだしたのだ。

「IS学園教員の織斑だ!」

『千冬か——』

その声は偶然にも反論する相手である慈であった。

「キサマア、これは何の真似だ!」

『真似だと——どういう意味だ?』

しかし、受話器越しの彼女はいたって異例性であった。

「ふざけるなッ! お前達ネオファリアは私の弟に何をさせたん

だ!？」

「――ああ、一夏君のことか？」

「そうだ、この人でなしめ……!」

「……」

そんな感情まみれになた千冬に対し慈はため息をついてメンバーたちが群がるテレビより、ユニコーンと甲龍の対峙する映像を見ながら、こう答えた。

「すまんが、私も最近こちらの主任になった故、あの機体にお前の弟が搭乗しているなど思いもしなかったのだ。それに、この要因はネオファリアよりもペンタゴン本部に言わせてもらわないと困る。あそこはISの研究開発をやめて、現在ではソードの開発と研究に力を入れているのだ」

「お前の差しがねではないというのか？」

『そうだな、よってお前に『人でなし』と呼ばれる筋合いは私にはないということだ』

「くっ!」

受話器を乱暴に戻して、千冬は再びアリーナの状況を見ると、既に二体の兵器はそのフィールドの内部でドッグファイトが始まろうとしていた。

「一夏! 今、この場で謝るんなら優しく、痛めつけて、あげるわよ?」

怖いもの知らずの凰は目の前に対峙する白い人型機動兵器へ訊ねた。

「本当にお前ってやつは残忍だな。そんなんだから友達ができな
いんだよ」

現に凰の友人ならぬ、子分だったのは一夏と彼の友人の何人がぐらいだ。彼女は女子ながらに凶暴で、小学校の頃は六年のガキ大将

を半殺しにしたものであり、その噂が広まってご近所付き合いも最悪なうえ、客も減って行き、結局大赤字で中国へ帰ったのだ。

「余計なお世話よ！」

「そういうことだから、これまでの仕返しもユニコーンで晴らすから謝るのはそっちの方じゃないのか？」

「あっそう、それじゃあ……とことん容赦なく痛めつけてあげるわ!!!」

「本性を見せたか、バーサーカー！」

一夏は、操縦桿を握りしめて本機ユニコーン・ソードへ叫んだ。

「行くぞ、ユニコーン！」

白い一角獣は、片手にビームサーベルを握りしめた。本来ならソードでは試作中である中距離ライフル、ビームマグナムを使いたいたいところだが、あんなものを使えばISなんて一発で蒸発させてしまうため、危なっかしくて仕様が禁じられている。

対する凰は、取り出した双剣「双天牙月」を連結させて一本の薙刀へ変形させると、一直線にユニコーンへ突進していく。

「ゴキブリにはソード特性の殺虫剤だ！」

ユニコーンの白い頭部より20ミリビームバルカンが突っ込んでくる甲龍にばらまかれる。

「誰がゴキブリですって!？」

たかが副兵装などと侮って、双天牙月を左右に円陣を描きなら振り回してそれらを弾き返そうとするが、ソードから放たれたビームバルカンはISが持つ従来の副兵装とは桁が違う。

20ミリのビームバルカンの威力はすさまじく、ヒジキ返したと思ったらその勢いに押されて逆にこちらが弾き飛ばされそうになるぐらいで、体制が崩れた。

「くっ——！」

バルカンから逃げ回りながら徐々にユニコーンの周りを何度も旋回し続け、それをユニコーンも同様に身を反転しながらバルカンで追いつける。

——距離を取ることはわかってるよ。

そう、一夏は既に嵐の攻撃手順はわかっていた。この日のために中国のネットワークへハッキングして甲龍のデータを拝見させてもらったんだ。

いつもは中国が国連軍に向けて性懲りもなくハッカーを送ってくるのだから、そのしっぺ返しをしたまでである。

「中国のIS、代表候補生専用機『甲龍』は日本の打鉄より安定なパラメーターを殺して、接近戦に特化した勇猛タイプってやつか。しかし、それだけじゃない——」

「もらったわ！」

瞬間、勝ち誇ったかのような表情へ変わった嵐は甲龍の両肩に装備された双方のユニットをユニコーンのバックパックへ向けて撃ち放った。

……しかし

巨大な空圧の叫びと共に、何かが弾かれた音だけで効力は失われた。

「う、うそ!？」

中国のIS技術によって開発された衝撃波兵器「龍咆」をこの至近距離で命中させれば、相手を地上の地面やアリーナの壁へ貼り付けにすることぐらい簡単だ。

しかし、それが微風のような風をユニコーンの背中へ送ったような程度で終わってしまったのだ。

「こんちくしょおお!!!」

やけになった嵐は、双天月牙を振り回してユニコーンへ切りかか

るが、

「ッ!？」

それは一瞬であった。巨大な壁にさえぎられて長刀の刃は弾き返されてしまった。それもそのはずだ、何故ならユニコーンはSEシールドを展開しているからだ。

ハンドとしてシールドは使用しないことになっていてもなお、一夏はだけは「本気」であった。

素早く背後から忍び寄る巨大な掌が甲龍を纏う彼女を掴み捕らえた。

「は、はなせこのお！」

掌で無意味な抵抗を続けるも、そんな彼女を掴んだユニコーンの手は大きく地上に向かって振り下ろした。

「お前だけは落とす！」

力任せに地上へ投げだされた甲龍は安定力を失ってそのまま地上へ真っ逆さまにたたきつけられた。

これは、まさに一方的な暴力である。成す術の無いISの姿を前に観客の女子たちは騒然としていた。

勝者は当然一夏である。彼と彼のユニコーン・ソードの雄々しい姿に周囲は賛否両論の声が飛び交っていた。

「へえ〜ユニコーンか、また面白いソードが出てきたね」

そんなアリーナから遠距離より学園のオブジェの塔から見下ろす、あのフードの少年が再び現れて、そのアリーナの戦況を見ていた。

「たしか中国の『龍砲』っていうやつ、アメリカから盗んだ技術じゃなかったか？ まだ試作段階の兵器を勝手にパクっちゃうからああなるのにね」

だから射程も短いうえに連射性もないのはそのためだ。そもそも本家のそれは兵器ではなく防御システムである。機体の使用エネルギー

ギーを保つために気体を取り入れて衝撃はの壁を飛ばしてミサイルや銃弾などの実弾兵器を防ぐためなど、またビーム兵器を無効化するために研究が続けられている「試作候補」に過ぎないのである。それを中国政府が兵器として運用させてしまったのだから、自業自得だ。

「まあいいや、こっちはこっちでそろそろ・アレ・をだそうかなーん？」

そのとき、フードの少年はアリーナへ飛来するもう一体の機影を確認した。

「チッ！ あのウサギ婆——まあいい、婆の玩具を先に壊して出番を横取りしてやるか」

片手に握りしめている端末を、少年は握りしめた枯であるが、

「——いや、まてよ？」

そんな単純なことをするよりも面白い事を思い出した彼はフード越しの口元を緩ませた。

「クッククク——ウサギ婆、テメエの玩具を俺がカッコよく改造してやるよ？ もちろん操作はこっちのもんだがな」

場面は変わり、アリーナでは再び上空から新たな機影が確認された。

土煙を上げて飛来したそれは、黒いシルエットに巨大な両腕部を持った——ISである。

「織斑先生！」

観戦室より、山田が叫んだ。

「くう……一夏に続いて今度は正体不明のISか！」

山田はとっさに緊急放送を観戦席に広めだした。

『正体不明のISが出現、生徒の皆さんは急いで非難してください！』

「何がどうなってんだ!？」

観戦室の入り口付近に立つ彩夏であるが、そんな彼の背後からキース大尉が駆け付けた。

「准尉! お前も避難誘導と一緒に手伝え」

「はい!」

二人は生徒たちを安全な場所へ非難すべく誘導に参加し、彼の誘導する場所へ多くの生徒たちが駆けこんできた。

「皆さん、おちついてください! 慌てずにおさないで」

「大尉、准尉!」

その場所へ、急いで慈が駆けつけに来た。

「主任?」

彩夏は居かけよってくる彼女へ振り向いた。

「二人とも、すぐにもソードを展開してユニコーンの支援につけ!」

「何が起こった!？」

大尉が問うと、

「乱入してきた正体不明のISにブルーティアーズ戦の時と同じ異変が起きたんだ」

「なんだった!?」

彩夏は、胸騒ぎを覚えた。

*

「あれは――IS? しかしどうして……」

アリーナへ乱入してきたその黒いISはこちらへ両手から展開した砲口を向けだした。

「なるほど――」

彼個人の予測からして、こんな玩具を送り込んだ犯人は大抵察し

が付く。

「あの人——俺がISよりもソードを選んだことに相当キレてんだな」

しかし、容赦はしない。

黒いISから放たれる両腕部からの光弾の数をSEシールドで吸収しながら、頭部のビームバルカンで反撃に出る。

相手は動きが若干襲うのか、狙いはつけやすく、数発の撃ち放ったウチの何発かがISの片腕に命中して、巨大な腕部の片腕が吹っ飛んだのである。

「……やはりか——」

損傷した、そのISの腕部をスクリーンで拡大してみると、その個所からは機械のようにバチバチと千切れたケーブルがショートする光景と、そのケーブルが幾本も垂れ下がっているのが見られた。

「あの人のことだ、こんなしょうもないことするのは」

呆れた一夏はとどめを刺そうとした途端。

「!?!」

黒いISに突如異変が起きた。これまでダメージを受けてびくびくと小刻みに震える機体が、突如苦しむかのように体を激しく震わせてその頭部が上を向いて叫ぶように機械音が鳴り響いた。

そして、前回と同様に黒い液状な物体がISの足元から発生し、それを容赦なく機体ごと取り込んだではないか。

黒いスライムに飲み込まれた黒いISは、徐々に形を変えていき、それはソードと同じ全長を持つ巨大なコング型の機動兵器に変わった。しまった。

両腕部は同じように武骨で脚部以上に巨大だが、その腕部にはいくつも重火器が供えられ、指先の一本ずつに砲口が目標を捉えていた。

巨大な五本の指先から一斉に放たれるビーム砲の柱を咄嗟に回避したユニコーンは咄嗟のビームバルカンで反撃に映るが、ビームの銃弾は変わり果てた黒いIS……黒いコングにはダメージらしき損傷を与えられなかった。

「ビームマグナムは装備されていない——あとはバルカンと手持ちのビームサーベルだけか」

そんな予想外の展開に陥ってしまう一夏であるが、ただもう一つの切り札だけがこのユニコーンには残されていた。

しかし、本機のセカンドシフトシステムはリミッターを解除することによって周囲に膨大な被害を及ぼしかねないほどの力を有している。その、野生の本能を解き放つ覚悟は今の自分には——いや、今は戸惑う時間はない。

初めてそれを行う一夏であるが、彼はこの場で初のセカンドシフトへ移行する決意をした。

「無限に繋がれる野生の可能性……ユニコーン、お前の本当の力を見せてやれ!!」

その言葉に答えたユニコーンはこれまで封じられていた本来あるべく姿と力を解き放った。

機体の周囲に風が吹き荒れ、起動音が急激に高鳴ると共にユニコーンの各アーマーの溝から赤い光が駆け抜ける。

瞬時に白い装甲はスライドで展開していくにつれ、機体全体から赤いフレームが露出していき、それは全体を駆け巡る赤い血潮のごとくであった。

頭部に聳える一角を思わずブレードは縦に割れて、それらは左右へと開かれるとV字状のアンテナに変わった。顔面はバイザーと共に裏返され、その頭部の奥から現れたのはツインアンの眼光を光らす野獣の素顔である。

ユニコーン・ソード・デストロイドモードという野獣の姿となった本機は両手にビームサーベルを握りしめ、眼光を散らしながら一直線に目の前のコングへ向かって突進しだした。

それを、迎え撃つコング型の両腕部の弾幕もすさまじいはずが、幾度も放たれる太いビームの柱を、身を転じながらかわし、駆け抜けていくユニコーンの野獣性を抑えることはできなかった。

「うおおおおお!!!」

地面をけり上げ、コングの頭上へとびかかるユニコーンは両手の刃でコング型の片腕を斬り飛ばした。その衝撃は予想以上の波動を周囲に与え、アリーナと一体化していた観客席の各椅子の列はバラバラに崩れ乱されていき、アリーナの大地に巨大な地割れをとクレームを作らせ、地割れはアリーナを真っ二つに割りだしてしまった。もはや既にアリーナとしての機能をは失われ、ただの廃墟となった半壊したアリーナの果ては想像を絶した。

片腕を奪われ、後ずさるするコング型にもその影響はあり、自身のユニコーンを見つめる視界には砂嵐が生じ始める。そして次に木津田頃には、腹部へもう片方に握るビームサーベルの先が深く貫いていたのだ。

「ッ……!!!」

武骨な頭部より赤い眼球を点滅させながら、コング型は徐々に活動を停止させていく。

地響きと共にコング型は全身に亀裂が走ると、粉々に崩れ落ちてしまった。

辺りは静寂に包まれ、同時にユニコーンのデストロイドモードも同じように活動時間が終わりをづけ、展開していた各部の装甲が露出していた赤いフレームを覆い隠していき、頭部も元のバイザーに覆われた一角獣の姿へと戻ってしまった。

「終わったか——ん？」

しかし、戦闘を終えたのも束の間、こちらへ複数の機影がレーダーに映った。それは、先ほど倒したコング型と同じ黒いISの編隊であったのだ。

「また来やがったのか！ あの人は本当にしつこい！！」
しかし、

複数の編隊は瞬く間にリーダーがから姿を消したのだ。

「どういうことだ？」

それも当然である。

後から駆け付けたタイラント改とハイペリオンの二機によって瞬く間に黒いISの編隊は全滅させられたのだ。

ハイペリオンのSE式ビームアックスが数体の黒いISを斬り裂いて、タイラント改のビームさベルが次々と黒いISを斬り裂いて蒸発させていく。

「味方か！ ハイペリオンとタイラント改、彩夏さんとキースさんだな」

敵のISを殲滅させた二体は、ユニコーンが立つ半壊したアリーナの地面へ降り立った。

「こいつは派手にやったもんだな？ ユニコーンさんよ」

タイラント改は辺りの惨状を見渡した。幸いにもこれに巻き込まれた生徒や教員はゼロなのが救いである……いや、凰がいるのを忘れていた。

「正体は君なんだろう？ 一夏君」

ハイペリオンより、彩夏の声が訪ねてきた。すると、それにこたえてユニコーンのコックピットハッチが開かれると、そこにはパイロットスーツを着た一人の少年が姿を現した。

「えへへ——ばれちゃいましたか」

ヘルメットを脱ぐと、その素顔はやはり織斑一夏であった。

「当然だよ。そんなことよりも、織斑先生がカンカンだぞ？」

「ああ、姉貴のことはどうだっていいですけどーユニコーンが俺の専用機ってことに納得してくれるかどうか……」

「ISに乗れるっていうのは事実なのか？」

と、キースが訊ねる。

「ええ、一度起動したんですけど。俺はISよりもソードが好きなんで」

「しかし、どうやってソードのパイロットに……」

彩夏がそれを聞こうとしたのだが……

「一夏アッ!!」

地割れだらけのアリーナの地面へ大股で歩いてくる千冬が見えた。

「あ、やべっ」

「待つんだ」

空へ逃げようとするユニコーンの片腕を、ハイペリオンの片手が捕まえた。

「このことはちゃんと君の姉さんにも教えておけ。あの人は君の言う通り、面倒な人だからな」

彩夏に言われて、しぶしぶ一夏はユニコーンから降りた。

SCENE9 「一夏の軌跡」

一夏が、IS学園へ入る数か月前の出来事であった。その時彼は第一希望である藍越学園の試験会場とIS学園の試験会場を間違えてはいつてしまい、そこで展示されていた一機のISに触れた途端に偶然ともいえる奇跡で、女にしか扱えない兵器を男である自分が起動させてしまったのである。そこを、運悪く試験に入ってきた関係者の女たちに見られてしまったことから、世界的イレギュラーなレットルを張られてしまう羽目になる。

そんな彼を見かねた姉の千冬は、弟である一夏をIS学園へ入学させることにしたという。しかし、考えてみればイレギュラーの彼がその原因である巣窟に入るといふのだから、大いに逆効果だといえよう。当然一夏は拒否して藍越学園の受験を希望するのだが、千冬は一向に耳を貸さず、多忙すぎる仕事ゆえに滅多なことでは一夏の前に帰ってくることはなかった。

そんなことで、結局一夏は自身で一人悩むことなる状況へと陥ってしまう。

「……よし！」

自室で荷造りを終えて、リュックを背負った。クシでオールバックの髪型を整え、愛用の革ジャンを羽織り、首元にアクセサリーをかけた。そして両耳に――ピアスに変わってイヤリングを付けた。

「今日こそ、家を出るぞ！」

今日こそはという、一夏の選択の意思は強かった。

自身の選択を聞いてくれない、世界から敵視される、今後は誰かに監視されながらの生活、それならいっそのことこんな世界から違う世界へ移り住んだほうがましだと思った彼は、家出を決意。そも

そも、これは自分がISを起動させなくても薄々考えていたことだった。

彼がISに振れようが触れなろうが、織斑千冬の弟というレックテルによって誰も彼を一個人とは認めてくれない。千冬の弟ならできて当たり前、千冬の弟なのに何故できない？ そんな劣等感に苦しめられる生活なんてまさに地獄だった。

だから、彼は今回ISの一件によってこの家から出て、姉から逃げようと思ったのだ。

置手紙も残して、いざ家を出ようとしたときだった。

玄関の前でインターホンが鳴った。それにビクツとする一夏は恐る恐るドアを開けてみると……

「あら、こんにちは」

そこには、見知らぬ女性と数人のスーツを着た男性たちが彼の元を訪ねてきた。

「は、はい——誰？」

「ああ、ごめんね。国連軍の者よ」

「!？」

軍と聞いて、自分をモルモットにするために攫いにきたのかという警戒感と疑心が芽生え、とっさに身構えを取った。

が、女性は慌てて誤解を取り始める。

「ああ、誤解しないでちょうだい。別に貴方を誘拐しに来たわけじゃないから。どっちかっていうとスカウトしに来たのよ」

「す、スカウト？」

「とりあえず、此処じゃ何だし——上がってもいいかしら？」

「……俺、今から出かけるんですけど」

「家出しに？」

「ど、どうしてそれを——」

「あなたのデータは一樣見させてもらったから。とりあえず、本当に悪いようにはしないから、家にながらせてもらってから話をしてもいい？」

「……」

隙を見て逃げ出そうとするわけにはいくまい。後ろにはスーツを着た男たちはいかにも強そうだし……

「手短になら」

そういって、玄関に男性たちを残して彼女一人が家にながらせた。

「何か飲みますか？」

家にながらせた以上、客としてもてなさなくてはならないと篠ノ之家の恩師に教わったこともあって、彼は一樣この女性も客としてもてなすことにした。

「じゃあ、紅茶貰えるかしら？ なかったコーヒーでいいわよ」

「どうぞ——」

そういって、彼は女性の前に紅茶を置いた。

「それで、話して？」

向かい合わせのソファーに座って、一夏は紅茶を飲む彼女に訊ねた。

「ああ、そうだったわね。実は……」

そういうと、女性は一枚の名刺を彼に手渡した。

「アナハイム・エレクトロニクス社の、エメリア・サリバン？」

「そう、ISをやめてその対なる存在『SWORD』を中心に研究している一大企業よ」

SWORD（ソード）、それは近年になって発表された人型機動兵器だ。その存在にはいまだにIS社会から賛否両論が激しいものの、賛成派である一夏は人型兵器というロマンを感じており、SWORDには幾分興味があった。

「それで……キミに相談があるの」

「俺に、ですか？」

「そう！ 実はね、近年わが社はSWORD開発研究部門『ネオフアリア』を立ち上げて、本格的なSWORDの運用計画を開始したの。その中でテストパイロットになってくれる人材が欲しいのよ」

「へえく……」

「でさ」

と、女性エメリアはアップで一夏の顔をじろりと見た。

「え？」

他人事のように聞き流していた彼はきょとんとした目を彼女に向けてる。

「どう」

「何がですか？」

「SWORDのテストパイロット」

「……は？」

「SWORDのテストパイロットとして君をスカウトしに来たのよ」

「何の冗談だ？」

「冗談じゃなければ今頃君とこうして話したりしていないわ」

「言っときますけど、俺は単なる民間人だし軍人じゃありませんよ」

「そうだけど、君からSWORDパイロットとしての要素が強く検出されたのよ」

「どっからそれを調べたんだよ……」

なんだか胡散臭そうだ。

「まあまあ、そう言わずにどうかしら？ 別に今ここで決断しなくてもいいわよ。ゆっくり考えればいいし」

「そうですか、じゃあ家出しながら考えておきますね」

「ごめんなさい、今この場で考えて頂戴」

エメリアが即答した。

「俺、これからこの家を出てくんで、急なことはやめてくださいよ」

「SWORDのパイロットになりたくないの？」

「っていうか、怪しいんですよ。どうして民間人の俺に対していきなりSWORDのパイロットなんかさせるんだ？」

「だから、要素が強く検出されたって言ったじゃない？」

「それが怪しいんですけど、俺が前回のモンドグロッソで誘拐されたのを知ってるだろ？」

前回二度目のIS世界大会モンドグロッソで彼は千冬の弟であるという立場上、千冬をライバル視する某国の人間から人質として誘拐されたことがあった。その後千冬が試合を放棄して助けに来てくれたのには感謝しているが、それによって彼は千冬の名誉を貶したという罵声を浴びせられて虐めがさらにエスカレートしたことであった。そのこともあってか、一夏は千冬がいないことをいいことに反抗で不良になった。だから、今の身形であるオールバックに革ジャン、首元のアクセサリも上等、しかしピアスだけは付けるのが怖いから適当に雑貨屋で買ったイヤリングを付けている姿はそれが理由だ。

学校へ行かないのは毎日のことで、タバコは吸わずとも喧嘩や飲酒は当たり前、バイクを無免許運転したりと相当なことに明け暮れるようになっていた。この前だったスケバンの女子と喧嘩して半殺しにしてやったのだ。チクったら次は殺すと口止めをしておいたから一夏だとバレル心配はないが……

よって、今の彼はガラの悪い風格で目つきはやや鋭い憎悪の目を

していた。エメリアも、そんな彼が随分と身形風格が変わったことで、一年前の写真を見比べては心底驚いた。

「貴方がどこへ行っても結局は織斑千冬の弟っていうレッテルが付いて回るわよ。家出したって意味ないもの。それよりも、新しい自分になるために私の所へ来る気はない？ 前回誘拐されたトラウマっていうのも否定できないけど——もう一度信じてくれるなら」
そういって、彼に黒い塊を取り出した。拳銃だ。ちゃんと安全口ツクも外している。

「こ、これって——」

そのずっしりとした本物の重みに彼は顔を青くした。

「弾を入っているし、あとは引き金をひけばいつでも撃てるわよ」
「どういうことだ!？」

「もし、私達を怪しく思うのならその銃で私を撃ちなさい。後ろの部下たちにも前もって伝えてあるから」

「……!」

そこまでするのか——

もっとベタな言い回しだけで終わると言ったのに、彼女は命を懸けているってことなのか？

「素人の民間人に拳銃渡されたって、うまく扱えないでしょうが」
「引き金をひくのなら誰だってできるわよ。軍人やお巡りさんだって最初は慣れない手つきで拳銃を握ったもんだし」

「今この場で、俺がアンタを撃っても文句はいわないってことだよな？」

そういうと、一夏は恐る恐る銃口をエメリアへ向けだした。

「ええ、貴方が私を信用できないというのなら正当防衛として撃って構わないわ。もっとも、私達を信じてないならね」

「……」

ため息をついた一夏は、しばらくの間を置いた後にこう拳銃を懐へしまった。そしてもういちどエメリアに問う。

「SWORDって、本当にISなんかよりすごいんですか？」

「事実上はね。ただ、それをこの世界が認めていないだけ」

「——話だけでも聞いてやるか……」

本当に、お人よしな性格だけは治らないようだ和一夏は困ったようにまたため息をついた。

*

それから数日後、気づけフランスの国連軍駐在基地へ飛んでいた。まさか、話を聞くつもりがこんな展開になるとは思ってもみなかった。

「さ、ここが今日からあなたの居場所よ」

どや顔するエメリアに一夏はあんぐりと口を開けたまま在フランス国連軍基地の施設内を見渡した。滑走路にいくつもの巨大な格納施設があり、その他いろいろな建物が立ち聳える巨大軍事施設だ。そのごく一部に自分がちっぽけに立ち尽くしてるに過ぎない。

「ここが——本当に、俺ってどうなっちまうんだよ？」

自分が今ここにいて、自他あまりにも非現実的すぎるために、一夏はこれが現実か否かが区別するのに難しく思った。

「まあいいわ。とりあえず貴方が担当するSWORDは明日から運用試験が開始されるんだし、今日はこのあたりの見学やフランス市内を観光するといいわ。なんなら、私が連れて行ってあげましょうか？」

「い、いいえ——っていうか、本当に俺をパイロットにするつもりなのかよ？」

「そのためにわざわざここまで呼んだのよ？」

「仮に断ったらどうする？」

恐る恐るそう訊ねると。エメリアは意外な答えをだしてきた。

「いいえ、SWORDに触れた以上貴方は逃げることはできないわ。定として受け入れるしかないもの——」

「あまりにも強引過ぎだな」

そこまで自信過剰なものにもほどがあると思ったが、

「私じゃなくて貴方がそう悟ることになるわ」

「は？」

「まあ、貴方にしては初めてのフランス何だし——どうかしら、パリでも見学しにきたら？ 日本人としては憧れる『花の都』なんでしょ？」

「まあ——パリか」

別にパリには興味がある。一度はフランスの街を歩き回りたいたい思っていたことだし、ここまで来た以上は成る様になれ、成すがままという流れで彼は基地内を軽く見学した後、許可を取ってフランスのパリへエメリアに送ってもらった。

「帰るときは、私の名前を呼んでもらえない。名前、覚えてるかしら？」

「エメリアさんだろ？」

「まあ、忘れても貴方自身の名前を言えば私が出てくるから安心して」

「じゃあ……」

「ええ、日本以外の世界を思う存分堪能していらっしやい」

「……本当に、俺はパイロットという位置づけで生かしてもらえるのか？」

ここまでしたのだから、逆に恐ろしいほどにありがたかった。

「まだ言ってるの？ 貴方にはSWORDを動かす資格があるの。あなた以外じゃなければできない特別なこと。私たちは貴女を必要浴しているからここまで連れてきたんじゃない」

「まあ……それなら」

「うん、いってらっしゃい」

「は、はい……」

そんな彼をとりあえず落ち着かせるためにフランスのパリ市内へ散歩に生かすことにした。基地の正門から出ていく一夏を後ろにエメリアの背後へもう一人の人物が彼女へ駆け寄った。エメリアの副主任であるパトリック・レノンという男性である。

ずれた眼鏡をかけなおしてから、先輩のエメリアへこう尋ねた。

「本当に彼をパイロットにしているいいんですか？」

「私の推測では、彼の適応は100パーセントよ。彼は必ず『ユニコーン』のパイロットになるはず」

「適応能力SSだなんて——彼、本当に『人間』なんですかね？」

「例のプロジェクトに関係している人物っていうのは確かなそうよ。それを……奴ら……よりも先にこちらで保護という形でパイロットにすればこっちのもの」

「かわいそうな気がします……」

「いいえ、あの子もおのずと自身の運命を受け入れるわ。もう、後戻りはできないって状況になっているんですもの」

「そう上手くいきますか？」

「大丈夫よ」

「……」

とりあえず、パリまで来てしまった経路にため息をつきながらも一夏は適当にぶらぶらとパリ市街を歩き回った。

いつもはテレビで見る光景が、こうして生で肉眼に飛び込んでくるのだから斬新な光景である。

「でも……華やかじゃないな？」

花の都と言われているのに、パリ市街は妙に華やかじゃない。周囲を行きかうフランス市民の様子がどうも皆暗い表情であり、特に男性達からは笑顔が消えていた。

対して、女性は笑顔で行き交う人々が多く、処かしこから笑い声が聞こえてきた。しかし、それでも華やかなイメージはない。

——女尊男卑で大変だろうな。

考えられる理由と言えばそれぐらいしか思い当たらない。町中を歩きながらすれ違う男性たちを見ると、大半が心身ともに疲れ果てたような顔をしている。

気づけばシャンゼリゼ通りまで歩いていった。巨大な白い門を見つめながら、前を向かずについつい見とれて歩いていっていると、ドン！と鈍い音と共に誰かとぶつかってしまった。

「きゃっ」

相手はしりもちをついてしまった。

「あ、すまん！」

ついでよそ見をしていたと、ぶつかった相手に詫びようとした途端運悪くその相手は——女性であった。男性である自分がこんなことをしたら最悪恐喝されるんじゃないかと思った彼は、持ち前の不良っぷりを見せる。

「——テメエ、何処みであるいてんだあッ！！」

こうでもしないと自分の身を守れないのだ。学校だって女子に因縁つけられたり、わざとぶつかってカツアゲしてくる女子に対して

は大抵この容子で怒号を上げれば半泣きして「ごめんなさい——」
って泣いて逃げていくのが常だ。そもそも、不良相手にその女子
も脳みその無い奴らだと思う。

「あ、あの——」

すると、ぶつかった少女——背まで伸ばした金髪で、前髪で目が
隠れかけた瞳は怯えながら一夏を見上げた。

「そ、そのお……はううっ」

おどおどしてしまふ少女を見て、一夏は妙な奴だと首を傾げた。

——なんだコイツ？

「ご、ご、ごめんなさい……！」

立ち上がった彼女は、着こんだワンピースを手で叩いて何度もペ
コペコとお辞儀をして立ち去っていった。

「なんだったんだ？」

女とはいえ、おとなしそうな奴で助かった。あのまま警察に通報
するなんて言われてたら今頃エメリア達に迷惑をかけていたころだ
ろう。

「……？」

散歩を再開しようとしたところ、彼の足元に何かが落ちていた。

銀色のペンダントのようだ。それもロケット上になっており、平
たい円状を指先で開けると、なかには美しい金髪の女性が微笑んで
写っている写真が入っており、そんな彼女の胸元には無邪気に抱き
着く幼い少女の姿が、推測する限り親子か？

——もしかして……

先程の少女が落とした物か？

直ぐにもぶつかった少女を呼び止めようとしたが、既に彼女の姿
はシャンゼリゼ通りを行く人ごみの中へ消えていった。

「交番にでも届けるか？」

面倒だが、近場に交番を探さないといけないようだ、また一夏はパリ市街をさまよう羽目になる。しかし、さまよってばかりいるせいで基地への帰り道がわからなくなってしまおうという落ちになってしまい、間抜けであるが迷子になってしまったのだ。

「――やべ、ここどこだっけ？」

冷や汗まみれになった彼は必死でエッフェル塔のあたりを徘徊し続けていると、気づけば陽が落ちかけている時刻へ……

人に道聞いてみたところ、成れない現地の名称や通りでまったくわかりにくい。どうすればいいのか途方に暮れながらエッフェル塔から別の市街地へさまよい続けた。

さらに気づくと、あたりは暗くなって夜空には星が瞬きだす時刻になっている。フランスは、日本と比べて治安が悪化していると聞いた。なによりも女性たちによる男性弾圧デモがこの時刻がピークとなる。警察も婦警でなければ対応できない。

パリへ来るまでの途中、エメリアから聞かされていたことを思い出してハッとしたが、既に遅い。

目の前の角からデモ団体と思われる女たちの叫び声が聞こえてきた。もしあんな連中に見つかったりでもしたら……

「やばい――！」

とりあえず、一夏は裏路地へ隠れた。影から顔を出して一段が通り過ぎるのを待ち続けた。

「男はこの世から消えろ！ 男は悪魔の申し子だ！！」

「ISこそ正義、我々女性は女神に見入られた神の申し子だッ！！」
過激でカルトな女たちはプラカードを掲げながら夜のパリの静寂さを妨げながら堂々と通りすぎていった。

「……いったか？」

表路地から出てきた一夏は、ホッと胸をなでおろした。ああいう

のが海外にいるんじゃ、男もぼちぼち夜道を出歩くことはできないな。

早いとこ基地へ帰らないと……そう彼は再びフランスをさ迷い歩き続ける。

「——ん？」

そんなとき、裏路地からふと声が聞こえてきた。悲鳴である。それも少女の悲鳴だ。

「ひょっとして……！」

嫌な予感がすると、一夏は危険を承知でその悲鳴がする裏路地の奥へと走って行った。

裏路地を走って、行きついた場所は人気のない広場で会った。朽ち果てた家々の裏側で囲まれたそこは、よく見ると色褪せたフェンスが囲い、ブランコや滑り台が錆びついた、人知れぬ鄙びた公園で会った。こんなところ、子供が遊ぶような場所じゃない。もはや悪党のたまり場といってもいい場所である。

そこへ——

「や、やめてえ——」

弱々しい声を上げて震えている少女が、大多数……女……たちに抑え込まれていた。上着をたくし上げられて、そこから丸出しにされた白い腹部と細いヘソと括れ、ブラの下側が露わとなる。その一部を見て一夏は知った。

——レイプだッ！

それも、女が女を襲っている——これは、この女尊男卑の風習で生まれてしまった同性レイプである。ISがもたらした女尊男卑の風習によって女性の権力が男性を追い起こってしまったことによって生じたイレギュラー的デメリットだ。

すなわち、男女の性欲が逆転してしまったのである。この女尊男

卑によって独占欲が増えた女性が男性以上の性欲を持ってして、男性——それも幼い男児を襲うショタコン犯罪や中には男を嫌うミサンドリーや過激なレズビアンらが、こういった同性をターゲットにした強姦被害を起こすようになったのである。

もちろん、不良でも正義感を捨てきれない彼はこの場を見て見ぬふりはできあなつた。

「ん？ あいつって——まさか！」

襲われている少女は、今日の昼に自分とぶつかった気弱で根暗そうな少女であつた。

「あの娘が……！」

あつていつもの防衛本能でどやしてしまつたこともあつてか、それ以上に接触はないにしろ見覚えのある人が目の前でひどい目にあふのなんて見ていて耐えられない。

——レイプなんてするやつは外道だ。それが男だろうが女だろうとも関係ねえ！

近くに転がっていた木片の某を片手に、強姦の女グループが一斉に背を向けたすきをついて、

「うわああああああ！」

叫びと共に、目の前の女強姦グループたちへ襲い掛かつた。

内、一人の後頭部を木片でおもいきり殴りつけ、続けてもう一人も顔面を角で殴りつけた。

突然の襲撃に女たちは悲鳴を上げて蹲る二人の残して後の数人は裏路地へと消えていった。

「立てるか！？」

一夏は少女の手を問って立ち上がらせた。

「う、うん——」

とにかくも、この場から逃げるために一夏は少女の手を引っ張っ

てその場から逃げだった。

どれくらい逃げたかはわからないが、息が切れりうまで走ったのは言うまでもない。表通りへ出て、シャンゼリゼ通りより街頭が照らす歩道辺りまでたどり着けた。

「どうにか助かったか」

「あ、あの——」

さっきから少女の顔が赤かった。それもそのはず、あれからずっと一夏が彼女の手を握りしめているからだ。

「え？ ああ……すまん」

手を放してから改めて両手を膝につけて、中腰で息を整える二人。そのうち一夏の方が彼女の身を案じて声をかけた。

「大丈夫か？ なにもされなかったか？」

「う、うん——平気……その、ありがとう」

「気にすんな。それよりも家は何処だ、送ってくから」

「……」

しかし、そう聞きだそうとしても彼女は話ししづらそうにじっと黙ったままだ。

「どうしたよ？」

「その……」

うつむいた様子からして不良歴三年の一夏は、直ぐにも彼女の状況を見破った。

「——なるほど、家へは帰れないってわけか？」

見た限り、自分みたいに不良でグレたまま家出をしたわけじゃないさそうだ。おそらく、大半は家庭の問題。それも身内がかかわっているのかもしれない。

「どうすんだ？」

家に戻るなんて出来やしないだろうに、かといってさっきみたい

なことが起こったのに、こんな危険な場所で野宿でもするつもりか？

「このあたりに、教会があるの。今夜はそこで一晩お世話になるから……」

彼女の話によれば、仲のいい神父がいるのでそこでとりあえず泊まらせてもらおうと思っている。

「そうか、まあ教会まで送ってくか」

「大丈夫、教会は一通りの多いところにあるから私一人でも平気」

「まあ——そういうならいいけど」

「じゃあ……助けてくれて本当にありがとう」

微笑んだ彼女はそう彼に背を向けて去って行った。運よく自分もここから基地までの帰り道は知っている場所のため迷子にならずにこれで無事に帰れる。

「帰るか——」

帰ったら叱られそうかな？ そんな不安を考えながらシャンゼリゼを背に一夏も帰っていくのであるが……

「ッ！」

刹那、後方よりいくつかの爆発が起こった。

「なんだ!？」

それに振り返ると、シャンゼリゼ通りの夜景に炎が燃え盛っている。幾台もの車が燃え上がり、人々のうめきや横たわる姿までその視界に飛び込んできた。

「何が——」

何が起こったのか、わからずに上空から降り注ぐいくつものビームの柱がシャンゼリゼ通りを火の海にしていくではないか。

燃え盛るシャンゼリゼ通りの火柱から照らし出される夜空に浮上する幾つもの正体、黒い人型のボディー、それはまさしくISであった。

「テロか!？」

最近世界を騒がす謎の I S テロ組織だ。おそらく、フランスの軍事施設を襲撃するための見せしめに市街地を襲ったんだ。

黒い I S の両腕部より備えられた巨大な砲身からは大出力のビーム砲が放たれ、次々とパリの街を破壊していく。

「くそっ! シェルターは何処だ!？」

まずは避難したほうがいい。こんなところに居れば絶対に巻き添え食らって死ぬ。どうすればいいかと瓦礫や燃え盛る炎をよけながら避難所を探し出すが、行くところシェルターは皆……

「マジかよッ!」

ここ一帯のシェルターは殆ど「Ladysonly」と書かれた女性専用シェルターしかなかった。こんな非常事態だっていうのに……

「おい! 入れてくれ!？」

しかし、ハッチの奥から帰ってくる声は皆「男は他を探しなさい!」、
「ここは女性専用よ!？」だけでどこのシェルターも男性である自分を受け入れてくれない。

そうこうしているまにも道端で倒れている男性たちを次々に見つけた。そのほとんどが男性用シェルターを探せずに逃げ遅れて負傷した人間が多かった。

「大丈夫か？」

一夏は、目の前で額を負傷して呻いている青年を見つけて起こした。

「立てるか!」

「あ、ああ……」

その後も、一夏は動けるものと共に目の前に倒れている負傷者の男性たちを次々に助けていき、彼らを連れて警察か消防をさがそう

とするが、その警察のパトカーや消防車もISによって火だるまにされていた。

「……裏路地へ行くか？」

額にけがをした青年が、そう訊ねた。

「そこしかないか——」

一夏もそれに同意するしかない。地下道なんてこんなにISが暴れまわっているんじゃない生き埋めになって終わりだ。なら、人気のない裏路地で身をひそめるしかないのだろうか……

動けるものは歩けない負傷者を担いで共に裏路地へ向かおうとしたところ、

「皆さん！ こちらです」

黒衣を着た中高年の男性、それは教会の神父であった。そして、その神父と共にこちらへ駆け寄ってきたのは、

「お前は！」

「よかった！ 無事だったんだね」

あの時の少女だった。確か、彼女は確か教会で夜を過ごすと言っていた。

「皆さん、早く協会へ来てください。こちらに強固なシェルターがございます！」

神父の一言は、まさに神の救いだった。周囲は笑みを取り戻して歩ける者は再び歩けない怪我人を担いで協会へと急いだ。

一夏と少女も、ガタイの大きな男性を担いで神父の誘導の元、この一帯では有名な教会へと向かった。勿論協会の内部に設けられたシェルターは男女関係なく入れる。

教会の室内から十字架の根本より設けられた入り口からシェルターへ通じている。そこへ焦らず冷静に怪我人を優先して入っていく。しかし、

「誰か！ 誰か、俺の息子を知らんか！？ こんぐらいの小さな子供なんだ！！」

一人の男が必死になって皆に聞いているのを一夏が見た。

「まだ一人いないんですか！？」

「息子が居ないんだ！」

「くっ……！」

一夏は、すぐさま神父に知らせた。

「子供が一人いません！」

「何と！」

「そんな……」

少女も、慌てて協会あたりを見渡すが子供らしき影は見当たらない。

「先にシエルターへ行っててくれ！ その子を探してくる！！」

「わ、私も行く！」

一夏に続いて少女も彼の後を急いだ。

「お待ちなさい二人とも！」

呼び止めようとする神父だが、外の状況が激しい戦闘の音が彼の声をかき消してしまう。

協会から出た二人は、声を上げて呼び続けた。そんな彼らの上空を数機のISが通過した。フランス軍の所有ISミライージュ・アテネだ。一世代前の機体である本機であるが、新型のラファール・リヴァイブの部隊がこちらへ到着するまでの間は最前線の戦力として敵のISを迎撃しなくてはならない。

しかし、地上から黒いISの両腕部より放たれる凶太いビームの柱は上空を飛ぶミライージュ・アテネの防衛シールドを一発で突き破り、あっけなく一機のミライージュが撃ち落とされた。

対して、ミライージュ・アテネの主装備は30ミリ突撃機関砲とミ

サイル、コンバットナイフの平均的な戦力だ。対して敵のISは重火器のビーム兵器で接近を許さずに次々とミラーージュ・アテネを地上や上空から撃ち落としていく。

「フランスのISが負けてるの!？」

地上の路地を一夏の後ろを走りっている少女は周囲から燃え盛る炎で照らされた夜空を見た。軍がテロリストを相手に劣勢に陥っているのは許しがたいことだ。

「あれは――!」

そのとき、一夏は火の粉が吹き荒れる前方の一角から子供らしき姿を見つけた。急いでかけよってみると、そこには小さい少年が蹲って泣いている。

「大丈夫か! お父さんとはぐれたのか？」

一夏の呼びかけに少年は泣きながら頷いた。

「しっかりつかまってる!」

一夏は子供を背負ってすぐさま協会へと戻っていく。

「おい!」

すると、途中から意を決して教会を抜け出してきた少年の父親が現れた。

「パパア!」

すぐさま一夏は彼に息子を渡してやった。

「助かった! ありがとう――」

涙ながらに礼を言う男だったが、そんな彼と二人の間に巨大な瓦礫が崩れ落ちてきたではないか。幸い彼らは無事であったが、巨大な瓦礫によって目の前の道がふさがれてしまったことで一夏と少女は教会へ戻れない状況になった。

「大丈夫か!？」

息子を抱きかかえる男が瓦礫で隔てられた側の一夏たちへ叫んだ。

「大丈夫です！ そっちは！？」

「問題ない！」

「俺たちは回り道を探して協会に戻ります。先に戻っててください！」

「す、すまない——死ぬんじゃないぞ！」

未成年の二人を残して先に行くのは大人として心が居たいが、しかし今は息子と共に協会へ戻らなければならない。

男は悔しくも、二人よりも先に教会へと走って行った。

「ほかに行ける道はないか！？」

「こ、こっちです！」

幾つもの巨大な火柱が燃え上がるパリの惨状を二人は走った。

少女は一夏を連れて別の道へ走り出すが、行くところ燃え盛る炎に塞がれて上手く進めない。

「くそ！ ここまで来て……」

「あ、あぶないっ！」

少女が叫ぶ。刹那、二人の前に黒いISの一機が上空から目の前の地上へ降り立った。

「ッ——！」

彼女の前に出て、一夏は身構えた。黒いISは片手のビーム砲を二人へ向けだした。

「くそっ……！！」

最後の最後になって——せめて後の少女だけでも一夏は思考をめぐらすが、そんな二人のことなど構わずに黒いISがズシズシとこちらへ歩み寄ってくるではないか。

「お前は逃げる！ ここは俺が何とかする……！！」

後の少女へ振り向く一夏だが、

「そんな——無茶だよ！ 生身でISに……」

「こうしていても二人とも助からないんだ。誰かがおとりになれば……」

「どうしよう——こんな時にISさえあれば……」

と、少女はそうぶつぶつと何かを呟いた。

——このIS、もしかして!?

黒いIS、その胸元に記されたエンブレムに一夏はハツとした。

エンブレムにはウサギの耳が描かれていた。

——間違いない! このIS、「あの人」の……

一夏は、自分が知る存在を思い出した。思い浮かぶは、笑顔の裏に隠れたエゴイズムをもつ歪んだ科学者……

あの人は、こんなところまでできて何をしているんだ!?

刹那、上空よりとどろく銃撃音が聞こえた。

二人の前に立つISの頭上より降り注がれたその幾つもの光弾は、瞬く間に黒いISをミンチにしてしまった。

「なんだ!？」

突然の出来事に一夏はすぐにも上空を見た。二人をフランス軍のISが助けてくれたのかと最初はそう思ったが、違った。

燃え盛る夜空より降り立つ、その巨大な人型の機影は白いフォルムに頭部には一角獣を思わせる白いブレードが着き聳えたそれに一夏はつぶやいた。

「……SWORD？」

*

「……パリは燃えているか……、悪い意味でパリは燃えているな。あのウサギ婆、ダチの弟がISを拒絶してSWORDを選んだことに発狂してやんのか？」

エッフェル塔の頂上から燃え盛るパリの光景を見下ろす、フィードを被った少年はそうつぶやいた。

「ユニコーンの適合者を白式へ無理やり装着させようとか、どれだけ強引のキチだよ。本来なら俺のペットで婆の玩具を壊してやろうと思ったけど……ユニコーン・ソードか」

少年はその機体に興味を持った。

「今回だけは、例のSWORDの見物と行くか——」

フード越しの視界から、戦場と化した夜のパリから降り立つ、その白き鋼の一角獣を遠くから宥めた。

SCENE10 「一夏の軌跡後半」

「あれは、SWORDなのか!？」

一夏は、少女と共に自分たちの前に跪く巨大な機体を前に動揺していた。

しかし、そんな一夏を見下ろす白い機体片方の掌を地面に近づけると、聞き覚えのある誰かの声が聞こえてきた。

『一夏! はやく、それに乗りなさい!!』

エメリアである。その機体には彼女が乗っているのだろうか?

しかし、開かれた胸のハッチの奥は無人だった。しかし、その奥から間違いないエメリアの声が聞こえてくる。

『一夏、その子と一緒に早く乗って!』

「は、はい! ……早く」

そういうと、一夏は少女の手を引いて機体が指し伸ばした掌に乗り出した。二人が手に乗るのを確認した機体はゆっくりと自身のコックピットへ二人を運んでいくではないか。

そこには単座の操縦席があって、座席一帯を球状全面スクリーンが囲いだす。

『今は民間人も載せているんだし、交戦は避けながらできるだけ敵から逃げるのよ!』

スクリーンの一部からモニター画面の枠が表示され、そこにエメリアの姿が映し出された。

「は、はい! ……って、どうすればいいんだよ!？」

『とにかく操縦桿を、左右の操縦桿を握りなさい!』

「これか――」

左右の操縦桿を握りしめた。

「——ッ!?」

一瞬、彼の脳内にフラッシュバックが起こった。彼の脳内に浮かび上がるは巨大な一角獣の絵で、その壮大な画は力強くも優雅で、美しく、そして気高い。

——可能性を秘めた野獣、ユニコーン……!!”

頭の中に入ってくるその情報は、無限の可能性を秘めた強大な一角獣。それは、選ばれたものにこそ真の力が授けられる。

「……」

一夏は、瞳孔を開いた。彼はそばにいた少女に、

「俺の方に据われ!」

「う、うん」

彼女は、一夏の片腿の上に尻をのせて彼の胸元にしがみ付いた。

「揺れるかもしれない。つかまってる」

「怖いよ……」

「大丈夫、何とかする——!」

震える彼女に、一夏は真剣な言葉で返した。

そして、彼は操縦桿と両足のフットレバーに足をかけて、

「——動けえ!」

跪くユニコーンはゆっくりと立ち上がった。

「た、立った!」

少女もそれを周囲のスクリーンから確認した。

「歩けるか——歩く、いや……飛ベツ、ユニコーン!」

機体各種のバーニアのノズル枠が広がり、ユニコーンはその場から暗闇の上空に駆けて離陸し始めた。

機体に架かるGは掛からずとも、高速でつま先が離れて低空のまま飛び始めた。

『高度を上げて!』

そこからエメリアの声が聞こえる。

「ッ！」

高度が低すぎる。咄嗟に操縦桿を上げて目の前の住宅地の屋根を機体のつま先で崩してしまおうが、どうにか上空に向かって離陸できるまでに至った。

「敵は——十五機!？」

レーダーに映る機影はおよそ十五機、それらが一齐にこちらを取り囲んだ。

『一夏、今はできるだけ戦闘は避けて!』

「ダメです、逃げられません。やります!」

「……わかった、ビームサーベルと頭部のビームバルカンを使ってどうにかその場を耐え凌いで! 後からSWORDを応援でよぶわ」

「お願いします」

そして、一夏は少女にも伝える。

「大丈夫、信じてくれ!」

その声に、彼女もギュッと彼の胸にしがみつく力を強めた。

「いっけえ!」

迎え撃つ敵のビームが縦横無尽に襲い来るも、そのほとんどは機体一帯を球状に囲うように屈折して曲がりくねったではないか。

「——ここから、出ていけえ!!」

右腕が肩部より取り付けられた筒状のグリップを抜き取ると、その先から赤いビーム上のサーベルが放出し、ビームサーベルとなった。

ビームサーベルを握りしめ、目の前の敵陣にめがけて突っ込んでいくユニコーンであるが、そんな機体には再びビームが幾発も襲い掛かるがそれも先ほどのように次々と屈折していき、機体に接触す

ることは叶わない。

「このお！」

間合いを詰めた彼は、そのまま勢いに乗じたサーベルの振りに五機 I S が体を半分を溶断させられてしまい、幾つもの爆散が夜空に舞った。

一瞬で五機をうしなったのにもかかわらず、周囲の黒い I S 達はひるむことなく両腕部のビームを撃ち放っていく。

「機械だけの存在に——！」

頭部より放たれるビームバルカンは本機を周辺を飛び回る内三機を撃墜、そのまま至近距離まで迫られてビームサーベルの一振りですらに二機が身体の半分を蒸発させられる。

「ウロチョロと！」

バーニアを上げ、速度を上げ続けるユニコーンは左手にもサーベルを握りだし、両手で振り下ろす二刀のビームサーベルは一気に残りの五機を瞬時に斬り裂いてしまった。

瞬く間に十五機の黒い I S を全滅させたユニコーンであるが、しかしそれは初陣である一夏の体に大きな疲労という負担を与えた。

ユニコーンはゆっくりと地面へ降り立つと、コックピット内の座席に座る一夏はぐったりと息を荒げてしまった。

「だ、大丈夫！？」

そんな彼を心配に声をかける少女だが、一夏は彼女に一言も反応することなく息切れを起こすばかりだった。

戦闘が止んだパリの夜空に、ようやくラファール・リヴァイブの部隊が駆けつけに来るが、そこには敵の I S は一機も確認できず、代わりにシャンゼリゼ通りに立ち聳える一機の巨大な白い人型兵器だけが確認されていた。

「あれは——なんなの？」

「ミラージュ・アテネの部隊は……全滅!？」

「あの白い人型の巨人はいったい……」

しかし、そんな彼女たちの無線に一通の連絡が入った。それは、彼女らの頭上から飛来する、白い機体と同型のスケールをした、黒い・・SWORDであった。

「こちらは国連軍ドイツ支部、これよりこの場は我々が取り仕切る。ラファール各機はこれより帰投されたし」

無線からは男の声が聞こえてきた。あの黒い人型からであろう。

「なんだと!? ここは、フランス部隊の我々が取り仕切るはずだ!」

しかし、相手が男である以前で彼女達の反応は激しかった。

「国連より命令だ。直ちに帰投せよ」

「断る! 我々の祖国がこのような悲惨な目にあっているのにも……」

「敵は殲滅されている。これ以上この空にいても無意味ゆえ、貴様たちの出る幕はない」

「何を――!」

『各機命令だ! 直ちに空母へ帰投せよ!!』

焦った空母艦長の声に部隊は苦虫を噛み潰したように黒いSWORDを睨みつけては、しゅしゅと帰投していった。

「さて――」

黒い機体、それはユニコーンとは対なる黒いボディに頭部にはユニコーン以上に幾つもの突起物を持つ金色の一角が生え聳え立っていた。

「あれが例の――」

ユニコーンの元へ黒いSWORDが降り立った。

*

次に目を覚ますと、一夏は軍の病室に寝かされていた。

「……ここは？」

「お目覚めみたいね」

彼の隣には、エメリアが座っていた。

「俺は——」

「あの夜、貴方はユニコーンを駆って敵のISをすべて撃墜したわ。本当にすごいわね、やっぱりネクストワンの噂は本当だったみたい」

「ネクストワン……？」

「詳しいことは後から話すわ。今は体を休めなさい」

「あ、あの子は！？」

突然起き上がった一夏に、エメリアは一瞬驚くもすぐに「フフツツと笑った。

「あのお嬢ちゃんは無事よ。貴方が守ってくれたおかげで怪我もなく家へ帰ったわ」

「そうか……」

あいつ、家に帰れたんだな。家族と上手くやればいいけど——

「あ——」

ふと、彼はそばの棚に置かれた自身の私物より例のペンダントを取り出した。

「あちゃあ……結局返しそびれたか」

名前も聞いていなかったし、結局どうしようか——

「ネオファリア・ドイツ支部より、リヒト・マーゼリツヒ中尉入ります」

病室の扉越しからその声がした。

「ああ、どうぞ入って！」

エメリアがそういうと、扉を開けて「失礼します！」と、若い男が部屋へ入ってきた。その制服からして国連軍の人だろう。

彼は、一夏のいるべでどの元へ歩み寄り、フツと笑みを見せた。

「君が、イチカ・オリムラだね」

「え、まあ……アンタは？」

「ネオファリア・ドイツ支部よりSWORD『バンシィ』のパイロットを務めさせてもらっているリヒト・マーゼリッヒ中尉だ。よろしくな」

そう彼は微笑んだ。

「織斑です——」

軍人にしては、堅苦しい風格はなくフランクに見えた。一夏もおペコリとお辞儀をして、こちらも名乗り返した。

「初めてにしては上出来な操縦技術だ。なにか経験とかあるのか？」
興味深そうにリヒトは訪ねてきた。

「いえ、あの機体の操縦桿を握った途端に……」

「そうか——まだ、ユニコーンがどういう原理で発動したかは謎のままだが……やはり、君が原因なのか？」

「あの、俺何かマズイことでも？」

「いや、むしろ早いうちにユニコーンの活躍が知れてこちら側としては嬉しいよ。それよりも……」

リヒトはもちろん、エメリアも今後に関してどうするかを一夏に求めた。彼自身にしてみらいたいことはすでに本人が体験している。そう、ユニコーンの正規パイロットになって、場合によっては戦闘に参加することもふまえた軍職である。

「軍人っていう立ち位置だ。ユニコーン自らがお前を選んでしま

ったからにはこちら側として、君を手放すことはできなくなる。半信半疑だったが、予想以上の結果になってしまったゆえ、強制で申し訳ないが今日付けで正規パイロット・ネオファリア所属の国連軍軍として学生業からの転職を求めたい……すまないが」

最初はエメリアの抜擢したという織斑一夏少年に関して半信半疑で捉えていた。が、エメリアの見込み通りの力を秘めていたことに、先輩となる彼はどうすればいいのか戸惑っていた。

「俺が、ユニコーンの正規パイロットになるってことは最初っからわかっていたことなんだし、別にこうなることは自分も聞かされてましたから気にはしませんよ」

「しかし——軍人の道を歩んでしまうという一択でいいのか？
今更いのは心無いが、後悔はしていないのか？」

「まあ、……織斑一夏……以外の誰かに変わるのなら俺はいいですよ！」

「ッ——！」

今の自分とは違うもう一つの自分に変わることができる——それは、まさにリヒト自身も同じ境遇を抱えていた。

代々政治家の家系であるマーゼリツヒ家に生まれた彼は、誰よりも正義感が強い性質であり、時に政治家という腐敗業とも言い切れない父リカルドの背を嫌い続けた挙句、反発するように軍人で航空機のパイロットを目指したが、ISの影響によって航空機の役職は廃業になってしまった。

途方に暮れていたところへエメリアから声をかけられたのがバンシィ・ソードの正規パイロットになるきっかけである。

話はややそれるも、目の前の青年は自分と同じように昔の自分を嫌って新しい自分になろうと必死なのに違いない。同じ境遇を持つ者として、何となく彼の心境がわかってきた。

「イチカ・オリムラ！」

すると、リヒトは一筋の手を彼に差し出した。

「ネオファリアへようこそだ。今後はこの俺がお前の先輩兼教官としてお前をイッパシのソードパイロットへ鍛え上げてやる……とはいえ、そんな俺もまだまだ青二才だ。共に頑張ろうな！」

「は、はい！ こちらこそ」

一夏は、仲間ができたかのような感情が芽生えて、強くリヒトの手を握りしめた。

……こうして、織斑一夏は正式にユニコーン・ソードのパイロットとしてリヒト・マーゼリツヒと共にソードの道へと身を投じていくのであった。

*

「……と、まあこれが一通りの流れですよ」

そういって、IS学園ネオファリア仮設部署内で彼が初めてこれまでの経路を話した。

「それで——軍に入ったってことか」

そういって、キースはオールバックをやめた一夏の髪形を見た。

「そういや、ウチの姉貴ってこの学園の教員ですよ。なんで、勝手に制服とか改造している生徒を見て怒らなんでしょう？」

顎に手を添えて一夏は理解できないと悩んだ。

「あいつは、自身に与えられた教習科目を全うすればいいという変に偏った奴だ」

そう慈がつぶやいた。事実、千冬は教員として生徒たちに授業とISの技術を教え込むことを目的としている。すなわち、千冬は相手のスタイルや自由などを気にせず尊重するが、自分の授業だけは

従い、学べ！　っていうやり方をしている。

――しかし、そうやって個人個人の身形や風紀を無防備にしてしまふと、メンタリティーが暴走して統率力や団体意識が欠陥し、無自覚極まりない自分勝手な連中があふれ出てしまふのが落ちだ。一軍人である慈達からして、まっさきに教官達から叩き込ま依るのはルールを厳守することである。ルールを守れない部隊は戦場へ出れば必ず全滅する。それが軍の鉄則でもあるのだ。

「だから、アイツはいつまでたっても男達からドン引きされるってのか」

キースはそうつぶやいた。そもそも、女尊男卑になったことで女嫌いな男性があふれ出て、未婚率の上昇が半端なく、深刻な社会問題になりかけている。

今どき合コンなんて「罰ゲーム」のようなもの、出会い系サイトや婚活所なんて「女がいく職安」みたいな呼び方をされるようになった。

「こんなご時世ゆえ当然の結果だ。IS崇拝者の女共には自業自得という言葉がお似合いだな」

そういって、慈は鼻で笑った。

「ちなみに、ウチの姉貴は家事洗濯が全然ダメな方なんです。だから、家のことは全部俺がやっている感じなんですよ」

ちなみに千冬の自室も一夏がこっそり掃除している。床やベッドに脱ぎ捨てて散乱した衣類・下着や、ゴミ箱からあふれ出る生理用の紙オムツ、汗拭きティッシュや化粧落としのウェットティッシュの山々……

「おえっ……アイツ、そんな奴だったのか」

キースは、これまで付き合ってきた女達の中でもっとも嫌っていた元カノが可愛く見えてきた。

「それはさすがに――」

彩夏も想像しただけで吐き気を催すほどの形相をしてしまう。

「やれやれ、自己管理もできないのによくISの教員などをやってられるものだな」

慈自身も自分のことは言えない立場だ。脱いだ衣類をベッドに頬り投げて寝てしまうことや下着のまま家中を歩き回ったりなど、一人暮らしの無防備な女性あるあるなことはよくやる。

が、さすがに脱ぎたての下着を寢床の上で放置したり、生理用のオムツを捨てずにゴミ箱へ溢れるまで入れっぱにしたままの状況などさすがにない。

「そういえば一夏君」

ふと、彩夏が問う。

「はい？」

「アリーナで織斑先生に見つかったとき、すごい剣幕で彼女から怒られたようだけど――」

「ああ、あれですか？」

凰戦から続いて謎のIS襲撃事件の後、ユニコーンに乗っていたパイロットが自分の弟だという事を知った千冬は激怒し、地上へ降りた一夏へ真っ先に鉄拳を浴びせて怒鳴り散らした。

確かに千冬からしては分からなくもない。入学日ギリギリになって帰国してきて、さらに専用機はいらないと言い続けてはユニコーン・ソードの練習をひそかに続け、いざユニコーンの初陣を前にパイロットである彼が堂々と現れたのだから混乱と同時に怒りがわくのは千冬個人からして腹ただしいことだろう。

しかし、それ以前に理不尽なことというなら――

「ユニコーンの待機状態……姉貴に取り上げられちゃいましたし」

「な、なんだってえく!?」

キースは気まずそうにボソツと言う一夏に目を丸くして叫んだ。そもそも、一夏は皆に経路を話すと同時にその件で相談しに来たのだ。ネオファリアを通してユニコーンの待機状態であるブレスレットを千冬から返してもらおうと。

「どうしますか？ ネイナ博士」

と、彩夏はネイナへ振り向いた。このままだと、千冬は知らぬ内に束へ渡してしまいそうで怖い。

「それなら心配しなくていいわよ。アイツの手に渡っても絶対にブラックボックスは開けられないから」

しかし、一方のネイナは余裕の笑みであった。むしろ、束に対して引っかけたなどニヤニヤが止まらずにいる様子だ。

「どういうことですか？」

彩夏は首を傾げた。

「うーん、ちょっと恥ずかしいけど私の趣味かな？」
ボソツとネイナは呟いた。

*

時を同じくして……

「ふっふっふ〜！ ちいーちゃんがイツ君からSWORDとかいうガラクタを取り上げてくれたおかげで、手が省けてラッキー♪」
千冬に頼んでそのユニコーン・ソードの待機状態の画像を見せてもらい、その画像からこちらの特種なPCを使って千冬が持っているユニコーンの待機状態へハッキングを仕掛けたのだ。

高速でホログラムパネルのキーボードを打ち続けながらハッキングをして数秒後。

「なくんだ！ ネイナの奴、束さんのISと比べてぜーんぜんガ

「ド弱いじゃん。マジ雑魚〜」

所詮ソードなんて、そう思っただけはブラックボックスを開けようとした途端……

『おいおいいいのかい？ そんな装備でハッキングしちまって』
ホログラム画面からは白人のボディビルダーが海パン姿で写ってきた。

「へっ？」

目が点になる束は、何が何だかわからずに混乱。

『テレビの前の君も一緒に、やらないか？』

次々に出てくる画面にはマッチョなボディビルダーたちの見事に割れた腹筋や二の腕の筋肉、そしてケツ、ケツ、ケツ……

美しい肉体美を漫勉の爽やか笑顔で披露する彼らのグラビア姿に束の目は一気に流血する。

「ぎあああああああゝッ！！！！！！」

両目を抑えながら、

「めがあ——めがあ……！！！！！！」

床に転がりながら必死に悶え苦しむ姿はまさに拷問であった。レズビアンクズな束からして一夏以外の異性の肉体は脅威であったのだ。

『さぁみんな！ 今から98時間、たっぷり俺たちの腹筋とケツをまんべんなくそのイヤらしい目に焼き付けてくれ。まずはスクワット80回！！』

上下に動く、引き締まったTバックのマッチョ尻の画面に束は激しい吐血を起こした。

『98時間では物足りないと思うが、安心してくれ！ これが終わっても次から俺たちの新しい2000種類のシリーズが永遠にリピート再生して流されるんだ。そう簡単に寂しい思いはさせないぜ！！』

「に、2000——1本98時間……」

『よし！ では、みんながお待ちかねの人気タイム——脱ぐぞッ！！』

画面のボディビルダーは自身が穿いているTバックの海パンへ
両手を付けて勢いよく——

「や、やめろおおおおおおおおおおおおく！！！！」

結局、ユニコーン・ソードのブラックボックスは掘り当てること
ができずに、束は全治1か月間の大量出血と精神的重傷をその身に
負った。

SCENE 11「再開」

ネオファリア仮設部署に置いて、一夏はネイナにある物を渡していた。

「じゃあ、お願いしますネイナ博士」

「ええ、任せて！」

一夏は、自身の待機状態であるユニコーンをネイナへ手渡したではないか。

ここだけの話し、ソードの待機状態はパイロットのDNAと繋がっているため、パイロットが念じれば待機状態のソードは何処だろうとテレポートしてパイロットの手元へ戻ってくるという仕組みだ。最初は慌てていた彼も、ネイナから説明を受けたことで一安心し、今後は二度と姉貴から取られないよう厳重にネイナに保管してもらう事にしなというわけだ。

「それにしても、一夏軍曹もあんな暴君姉さんに振り回されて本当にタジタジよねえ？」

「もう慣れましたからいいんですけど……」

「それよりも、軍曹？」

すると、ネイナは少しだけ真顔になった。

「確か……今日から、貴方のいるクラスに転校生が来るっていう話よね？」

「そうみたいですよ」

「その名前がね『シャルル・デュノア』って名前なの」

「へえ……」

興味ないような感じで一夏だが、その続きをネイナはずれた

眼鏡を上げ直してから淡々と続けた。

「出身地はフランス、そもそもフランスにはデュノアという大手企業が存在するのよ。フランスでデュノアっていうと、ルノーの次にフランスを支えるISの大企業。その企業が貴方や他のソードのパイロットたちがいる一組の教室へ入ってくるっていうのはどうも怪しいのよね……」

「考え過ぎじゃないですか？」

姓が被っただけでは？ と一夏は思った。

「いいえ、私自身でいうのもただけど……SWORDって予想以上に世界で評判が半端な異らしいのよ。昨日なんてISを主力期間を短縮してソードへ乗り換えようとする各国が増えているの。イギリスだって、SWORDの量産機種が売り出されれば真っ先に買うっていう予約もしてあるし、アメリカなんてなおさらよ。性別関係なく使えて、核の脅威にも対抗できる、それがSWORD。

私もそういった驚異の防衛力に手向けた兵器を前提にSWORDを開発したまでは良いけど、ここまで影響が強いだなんて考えもしなかったわ……ちなみに、東側各国は未だにISを使っているらしいけど、IS学園で見たブルーティアーズ戦や甲龍戦も兼ねて、ISからSWORDへって考えを持つ国々が出てきて少し驚いたわ」

自画自賛というわけじゃない。むしろ、予想をはるかに超えてしまい、ネイナ本人は困っているように見えた。

「核やISに対しての国家防衛のためにSWORDを作ったはずが、こんなことになるなんてね……」

「博士……」

一夏は、そんなネイナの後ろが寂しく見えた。彼女だって、大量破壊のためにSWORDを開発したわけじゃなく、国を守るために

という前提でSWORDを開発したはずが、これ以上に兵器として大量に買われてしまっていることに戸惑いを隠せないのだろう。

「さ、朝のホームルームが始まっちゃいそうだし、軍曹もはやく准尉たちと行きなさいな」

いつもの笑顔に戻るネイナに、一夏も心を切り替えて学園へ向かうことにした。ネオファリアの面々はそれぞれ椅子や席について、千冬が教室へ入ってくるまでの間を待ち続けた。

千冬も千冬で、国連軍のお偉いさん方にこっぴどく言われただろう。何せ、ユニコーンを窃盗したという行為に走ったことは言うまでもない。一様、一夏の姉という立場と彼女が篠ノ之束の関係者という位置づけから、警察へ通報するのは控えたという。

千冬が教卓へついたころには、昨日のような気の強さは少しばかり失せているように見えた。

「えっと……」

千冬の様子をはじめ、どんよりした空気が一組の教室に漂うも、気を取り直して山田はこれから転校してくる新しいクラスメイトのことを紹介し始めた。

「今日は、転校生を紹介しますね」

「転校生？」

一夏や他の生徒たちはその言葉に首を傾げた。何せ、この時期に転校生とはどうも珍しすぎるからだ。

すると、転校生と思わしき生徒が教室へ入り、教卓の前に立った。それは……一人の男子だ。

「男——？」

背後から、彩夏はそんな転校生の少年？ を目に疑問交じりな一言を発する。

「ああ、そう——なのか？」

「フランスから来ました、シャルル・デュノアです！」

「名前からして、男の子——のようだな」

フランスでシャルルというのは男性名である。キースはともかく日本人の彩夏には聞きなれない名前であった。

だが、そんな疑問などそっちのけでシャルルに対する周囲の反応は黄色い歓声で帰ってくる。

「すごい！ イケメン」

「守ってあげたい系！」

「でも、私には織斑君が……」

「織部様がいる側で、どうしよう——！」

——どうでもいいわ……！

彩夏と一夏はそう突っ込みたかった。

その後、シャルルの席は一夏の隣に決まり、そのことで周囲から謎の視線がそそがれることになる。

「どうしてこうなった……」

どうも気が進まないが、一様お隣の席同士なのであいさつはしないといけない。

「よろしくな。俺は一夏だ」

「よろしく！ シャルルだよ」

「——？」

そのときだ。一夏はそんなシャルルの声と風格が妙に誰かと重なってしまった。

——あれ？ こいつ、どっかで見た覚えが……

しかし、妙に思い出せない。フランスでの一件から彼は軍隊で無我夢中になってソードの訓練に明け暮れていたことで、先々でおきた記憶はあまり覚えていなかった。

ホームルームは終わり、一時間目からISの模擬試験である。

「更衣室までは一緒か。行くぞシャルル」

と、一夏は急がねばと咄嗟にシャルルの手を握りしめた。

「えっ……!!」

急に赤くなるシャルルだが、そんな彼のことなど構わずに一夏は教室から出てここか駆け足で更衣室へ向かいだした。

「行くぞ!」

「え? どうしたの急に……」

「一夏、遅れるなよ!」

すると、そんな二人の前を彩夏が追い越していく。

「お先にな!」

と、次にキースだ。

「やっべ、やっぱ二人とも生粋の軍人だから体力半端ねえよな……」

…

「ね、ねえ——どうして急いでるの?」

「だって、もたもたして……」

突如、走っている通路の向こう側や左右から多くの女子生徒が集まってきた。

「あの子よ! 二人も男性操縦者って」

「本当だあ!」

「織斑君!」

こんなことが日常茶飯事だ。だから、先に言った彩夏やキースも野次馬化した女子勢から逃れるために廊下を猛ダッシュで移動していったのだ。

二人は、どうにか野次馬の突撃から逃れて無事に更衣室へたどり着けた。

「えっと、あっち向いてくれる?」

更衣室に就くと早々にシャルルは赤くなった様子で一夏へ恥ずか

しそうに言いだした。そんな発言に一夏は首をかしげる。

「は？ どうしてだよ」

「その、は、恥ずかしいらか……」

「シャイな奴だな。まあいいけど」

そういうと、一夏は待機状態のブレスレットを操作して、一瞬の間にパイロットスーツの姿へと変わった。

「そ、それが一夏のスーツなんだ……」

シャルルは、ロッカーの裏側から半顔を出して一夏の姿を見た。

自分が着ているように短パン半袖で、腹部を露出しているようなスーツではなく、衝撃や真空管でも耐えきれるために全身を覆う耐Gスーツであった。

「SWORDのね。それより、先に言ってるぞ？」

「う、うん！ 僕も後から行くから」

そうやって、シャルルも一夏の後に続いた。

「では、これよりペアを組んでもらう！」

千冬の指示のもと、クラス全員は二組のペアを組もうとし始めるが……

「織部さん！」

「織斑君！」

「シャルル君！」

「キースさん！」

と、何故か男子勢へと猛烈に誘いのアピールをしてくる。

その中でも、

「一夏ッ！」

箒が一夏の両腕を引っ張ると、

「一夏ア！！」

凰が一夏のもう片方の腕を引っ張りだした。

「ちょ、やめろって！」

アリーナでは常にこの有様だ。

「いい加減にしないか！ SWORD側の俺たちはいつものように君たちの相手をする側だ。織斑先生も言ってただろ？」

彩夏が、そう説得させるも生徒たちは「ええ〜!?」と言い出す。

「いいや、今度ばかりは少しだけ違う」

と、その一言と共にアリーナに慈が入ってきた。当然、彼女がアリーナにいと千冬は良い顔をしない。

——あいつが、私の弟を軍へ引きずり込んだのか！

そういった見方をするため、千冬は彼女を目の敵にしているのだ。

「主任！」

彩夏と他二名は一斉に敬礼した。

「うむ、休め。今回はSWORD同士の防衛戦が主な訓練だ」

「防衛戦？」

一夏は首を傾げた。

「それぞれのSWORDにISをつかせ、互いについてるISできるだけ多く落としたもの、またはつかしているISを多く守り切った方が勝利という内容だ。SWORDの防衛性能を検証するための訓練である」

そう慈は説明しきった。

そのこともあってか、生徒たちは目を光らせてそれぞれの好きな男性たちの元へ駆け寄っていくではないか。

それぞれ同じ人数に調節した後、SWORD三機はそれぞれのISと共に低空へと上がった。

「これは、自機の被弾もだが何よりも仲間側につけたISの護衛を主に行動しろ」

慈の指示のもと、いざ訓練は開始された。

SWORDはそれぞれ派手な動きができないためにシールドで防御しつつ自機側につけているISの数機を時間内に守り切れることが試される。

しかし、護衛と言えども後ろに控えているISがどうにかカッコいい自分をソードのパイロットたちに見せて自己アピールしたいというのか、勝手にSWORDから離れてIS同士のドッグファイトになってしまう始末だ。

「こ、こら！ 勝手に前へ出るな！！」

彩夏が呼び止めるも、生徒たちは聞かぬ耳。

「箒ッ——！」

「凰ッ——！」

同じグループ同士なのも構わず箒と凰は、一夏が乗るユニコーンの前で私闘しだした。

「こ、こら！ お前達——」

一夏が止めようとするが、二人は授業の内容なんてそっちのけで互いの近接武器が火花を散らしている。

「見ておれんな……」

静かにキレた慈は、メガホンを片手に深く息を吸い込んだ。

「こら！ みんな戻れ！」

「お前ら！ いい加減に……」

彩夏やキースも同じように自分たち側につく生徒たちを呼び戻そうと口調を強めるが、そんな二人よりも強烈な怒号が飛び上がった。

「静まれええッ——！！！！！！！！」

慈の一喝に周囲はSWORD勢もろとも静まり返った。低空にいる一声が慈へと視線を向けた。

そして、呆れた口調でネイナへ通信を取った。

「——博士、訓練は中止だ。子供たちがこちらの言う事を聞かず

に困る」

「了解、タイラント、ハイペリオン、ユニコーンの三機は直ちにドックへ帰還しなさい」

管制室よりネイナも、ISの生徒がSWORDのパイロットたちに自分たちをアピールしてもらいたいがために好き勝手に前に出て私闘を繰り広げてしまったことには苛立ちを通り越して呆れてしまった。

「IS学園の生徒達って、自己中な子が多いのね……」

SWORDのディフェンス性能を試したかったが、協力側があれでは話にならない。

「織斑先生、次からはもっと厳しく生徒たちを指導してもらわなければ困ります！」

慈は、できるだけ怒りを押さえつけて千冬と山田の元へ文句を言いに来た。

「そうだな、申し訳ない。次からは心がけよう……」

めんどくさそうに、聞き流した感じの千冬はすぐにも慈から目を背けてから、上空の生徒たちに「お前たち！ とっとと降りてこい！！！」と怒鳴り上げた。

唯一SWORDのそばにいたのはシャルルと彼の専用機「ラファール・リヴァイブカスタム」だけであった。

「あはは……みんなやっぱり夢中になっちゃったみたいだね」

苦笑いするシャルルに一夏も同感と頷いた。

「そうだなって——あれ？」

ふと、ユニコーンの背後スクリーンから見えたリヴァイブカスタムの映像に違和感を覚えた。

「……シャルル、お前の機体からカメラ機能の作動反応が出ているぞ？」

「え——あ！　ご、ごめん！　つい緊張しちゃって間違えちゃったよ」

「ふうん……」

しかし、明らかにシャルルの機体からはそんな誤操作ではなく、意図的な感覚がしてならなかった。訓練中にも薄々感じていたが、ずっとリヴァイブカスタムはカメラ機能を作動し続けていた。

その後、生徒たちは千冬からみっちり怒られ、訓練からアリーナのトラック100週というトレーニングの罰を与えられてしまった。それは昼飯なし・昼休憩なしというスパルタペナルティーである。

「——ねえ、一夏軍曹」

一方の昼休み中、一夏は通路脇でネイナに声をかけられた。

「博士？」

「確か……シャルル君だったかしら？　あの子、今日から軍曹のルームメイトになるよていよね？」

「そういたいですけど……」

「ちょっと気になるのよねえ」

顎に片手を添えて俯くネイナに、一夏も同じような疑問を彼女に伝えた。

「訓練中、ユニコーンの背後をアイツが撮影していたんですよ」

「ああ、そのことなら意図的な可能性が高いわね。ユニコーンの全面度ドライブレコーダーにそれはぴったり映ってたの。訓練が始まったと同時に撮影機能が作動しただのには怪しいわね」

「……もしかして、シャルルはユニコーンの背面を盗撮していた？」

「可能性はありうるわ。それに……フランスからのIS男性操縦者なんてそもそも胡散臭いわよ。国連軍の情報だとフランスに男性操縦者が居たなんて情報これっぽっちも伝わってこないんだし、フランス政府が隠し通していたなんてこともありえない。最近経済が

危ういフランスの現状今日からして、仮に男性操縦者がいたとすればすぐさま派手にアピールしてくるに違いないの」

「その……もしかして？」

今朝彼に彼女が話していたことを思い出した。

「シャルルが——デュノア社の？」

「そう考えた方が妥当かもしれない。今夜——寮のルームで一緒になったところで聞いてみて。場合によっては尋問という手段も仕方ないわ」

「お、俺がシャルルを？」

「近くに彩夏准尉とキース大尉も待機させておくから」

「は、はい……」

いきなり強硬手段に乗り出すのはどうも気が進まないが——それでも、SWORDの情報が危ういというのなら一夏とて仕方ないことだと考えた。

——その夜、一夏は彩夏とキースと共に寮の室内に盗聴器とビデオカメラを仕掛けて、一夏以外の二人はシャワールームに身を潜めた。

しばらくした後、シャルルが室内へ入ってくると、彼は何事もなかったかのように汗だくの姿で疲れたようにベッドの上へ腰を下ろした。

「ふう〜すっかり疲れちゃったよ。連帯責任で僕もアリーナを100週は知らされるんだからたまったものじゃないね」

「シャルル……」

同じようにベッドへ腰を下ろしている一夏は、少し緊張気味だが意を決して口を開いた。

「あ、僕先にシャワー浴びてきても——」

「シャルル、話があるんだ」

「え、なに？」

真顔で問う一夏に、シャルルの表情からも苦笑いの笑みが消え失せた。

「……何か、俺に隠し事とかしちやいないか？」

「え、別に……どうして、そんなこと聞くの？ 僕たち、今日あったばかりだよな」

「ああ、そうさ。俺たちは今日初めて会った。でも、お前の姓がデュノアっていうのが少し気になってな」

「別に、デュノアなんて言う姓を持った人はフランスだといくらでもいるよ？」

「お前——デュノア社の人間じゃないのか？」

「ち、ちがうよ！」

——？

突然口調を強めた。その隙を盗聴器とビデオで確認しているネイナはこれに鋭く反応した。

「本当に、デュノア社の人間じゃないっていうんだな？」

「本当だよ！ どうして、そんなこと聞くの！？」

感情的になって、シャルルの表情は怒りを表した。

「何で怒るんだ？」

「え——」

一夏のその問いにシャルルは一瞬黙った。

「俺は別に、デュノア社のことやお前のことを悪くいつているつもりはないぞ。そもそも、怒るまでのことじゃないだろ？」

「だ、だって！ 一夏がそんな真剣な顔して言うから……」

「——デュノア社にはシャルル・デュノアという同姓同名の人物はないけど、『シャルロット・デュノア』っていう名前の女性がいるらしいよ」

「だ、だ——だからなに？」

シャルルの額から大量の汗が浮かんできた。まるで焦っているかのように。

「お前……シャルロット・デュノアだろ？」

「ち、ちがう！」

ベッドから立ち上がって、シャルルはとっさに否定した。

「からかうのはやめてよ！ 僕、そういう悪い冗談言う人とか嫌いだよ」

「じゃあもう一つ質問だ。俺たち、前に『パリ』で会わなかったか？」

「ぱ、パリに——？」

シャルルはその質問に目を丸くした。それを見た一夏は立ち上がると、寮の室内に設けられた台所の流しに行くと、水を出して頭を濡らし始めた。

天井へ顎を傾けながら、濡れた髪を前髪ごと両手で後ろへ撫でおろし、久方のオールバックをシャルルに見せた。

「あっ……！」

シャルルは驚いたように、オールバック姿の一夏に反応した。

「この髪形に見覚えはないか？」

「……！」

しかし、シャルルはそんな彼の姿から目をそらしだす。

「なら——」

そういうと、彼は懐からある物を握りしめて、それを最後にシャルルへ見せつけた。

「これは、お前の私物じゃないんだな？」

「それは！」

若い母親と幼い娘の写真がはいったロケットに、シャルルはつい

体が反応してしまう。

「い、一夏が……持ってたの？」

「やっぱり、お前——あの時の女か」

当時、パリで助けた大人しそうな少女、それは彼……彼女だったのだ。

「ッ！」

動揺するシャルルに、一夏はさらに言う。

「なるほどな。どういう理由かは知らないけど、お前がこの写真に写る子供——シャルロット・デュノアだったのか」

事前に写真はネイナに渡して調べてもらった。国連軍の情報操作の結果、この写真に写っている幼い少女はシャルロット・デュノア、デュノア社長と不倫相手の間にできた子供、隠し子であったのだ：

：

お知らせ

閲覧してください、ありがとうございます。

また、この度は数年間も小説を更新せず、投稿を延期し続けてしまい、大変申し訳ございませんでした。

大変勝手ではございますが、今週を持ちまして「インフィニット・ソード」を本ページから削除させていただきます。

今まで、このような作品を閲覧して頂き誠に有り難うございます。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~24528

インフィニット・ソード

2022年06月10日 09時10分発行